

飛鳥・藤原宮発掘調査概報 22



平成四年五月

奈良国立文化財研究所

飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報22 正誤表

頁	行	誤	正
2	66-1の面積	112	1200
14	下から1	西二坊々間路	六条々間路
15	5・7	西二坊々間路	六条々間路
107	(図版名)	網部分	網部分
111		図版差し替え	
113	(図版名)	網部分	網部分
	写真図版1項目	藤原宮西方官衛	藤原宮西方官衙

目 次

平成三年度発掘調査地一覧表	2
I、藤原宮の調査	4
1、西方官衙地区の調査	5
ア、第66次調査	5
イ、第66－2・3・4次調査	6
ウ、第68次調査東区	9
エ、第66－7次調査	14
2、西面大垣の調査（第66－11次）	15
3、南面大垣の調査（第66－9次）	17
4、宮外周帶の調査（第63－11次）	18
II、藤原京の調査	19
1、左京四条四坊の調査（第63－13次）	20
2、左京六条三坊の調査（第66－10次）	20
3、左京十一条三坊の調査（第66－1・13次）（雷丘北方遺跡）	21
4、右京一条一坊の調査（第65次）	30
5、右京一条二坊の調査（第64次）	34
6、右京二条一坊の調査（第66－8次）	43
7、右京二条二坊の調査（第66－5次）	44
8、右京十条四坊の調査（第66－6次）	45
9、右京七条一坊の調査（第63－12次）	48
III、飛鳥地域の調査	52
1、石神遺跡第10次調査	53
2、坂田寺第7次調査	64
3、山田道第4次調査	83
4、飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991－1次）	84
写真図版	

平成三年度発掘調査地一覧

* 本書に未収録

遺跡・調査次数	調査地区	面 積	調査期間	調 査 地	所有者等	備 考	執筆担当
藤原宮64	6AJQ-A・B 6AJS-S・T・U	2,600 m ²	2. 11. 27 ~4. 4	橿原市醍醐町 3133 - 1他	醍醐町土地 区画整理組合	区画整理 事業	橋本
65	6AJP-P・Q	1,110 m ²	3. 2. 12 ~3. 28	橿原市醍醐町 333 - 1	岩城彰久	店舗建設	相原
63-11	6AJJ-B	82 m ²	3. 1. 10 ~1. 16	橿原市醍醐町 105 - 7	西川久雄	資材置場	相原
63-12	6AJH-S	580 m ²	2. 12. 25 ~2. 22	橿原市高殿町 5 - 2他	橿原市	改良住宅 建設	西口
63-13	6AJB-B	136 m ²	3. 3. 18 ~4. 3	橿原市膳夫町 189 - 3	福本千代野	住宅建設	橋本
66	6AJF-S	315 m ²	3. 8. 6 ~9. 2	橿原市繩手町 178・179	鴨公農業協 同組合	事務所・ 倉庫新築	相原
67*	6AJF-C	約2,000 m ²	3. 4. 17~	橿原市高殿町 326 - 2他	中浦忠太郎	計画調査	
68次東区	6AJG-T・U	1,010 m ²	3. 9. 6 ~11. 26	橿原市四分町 291他	橿原市	団地建替	橋本
68次西区*	6AJG-T・U	450 m ²	3. 12. 6 ~2. 6	橿原市四分町 293他	橿原市	団地建替	
66-1	6AMH-J	112 m ²	3. 4. 1 ~8. 3	明日香村大字雷 235 - 3	小山良太郎	宅地造成	山本
66-2	6AJF-Q	30 m ²	3. 4. 4 ~4. 5	橿原市繩手町 174 - 1・174 - 6	鴨公農業協 同組合	駐車場造成	山本
66-3	"	85 m ²	3. 4. 4 ~4. 11	橿原市繩手町 170 - 5~7	辻本貢造	駐車場造成	山本
66-4	"	70 m ²	3. 4. 8 ~4. 11	橿原市繩手町 167 - 3	柴田一郎	住宅建設	山本
66-5	6AJQ-E	204 m ²	3. 6. 17 ~7. 5	橿原市醍醐町 142 - 5	(株)バスコ	集合住宅 建設	山岸
66-6	6AMR-R	166 m ²	3. 7. 30 ~8. 29	橿原市栄和町字柳田 57 - 2	関西電力	変電所建設	西口
66-7	6AJH-P	60 m ²	3. 8. 1 ~8. 5	橿原市飛騨町 90 - 8他	橿原市	道路改良	橋本
66-8	6AJP-M	192 m ²	3. 8. 23 ~9. 5	橿原市醍醐町 222 - 2	森村秀造	資材置場 造成	川越
66-9	6AJM-B	40 m ²	3. 9. 17 ~9. 21	橿原市飛騨町地内	橿原市	下水道管 埋設	相原
66-10	6AJC-M	75 m ²	3. 11. 11 ~11. 14	橿原市木之本町 126 - 1	中井一志	住宅建設	川越
66-11	6AJK-C	221 m ²	3. 11. 19 ~12. 16	橿原市繩手町字久保 193 - 1	谷 英雄	住宅建設	西口
66-12*	6AJH-S	350 m ²	4. 1. 8 ~2. 19	橿原市高殿町 5 - 2他	橿原市	宅地造成	
66-13	6AMH-J・Q・R・S	745 m ²	3. 12. 2 ~4. 14	明日香村大字雷字稻葉 繩手 235 - 2・3 字竹ノ花 237 - 3他	奈良県・ 明日香村・ 鳩田清彦	計画調査	安田

66-14※	6AJD-P	14.5 m ²	4. 2. 5 ～2. 6	橿原市高殿町 27-1	橿原市	溜池改修	
66-15※	6AJG-T	800 m ²	4. 2. 12 ～4. 13	橿原市四分町 284-1 他	橿原市	住宅建設	
66-16※	6AJH-P	70 m ²	4. 2. 24 ～2. 25	橿原市飛驒町 86-1 他	橿原市	歩道設置	
66-17※	6AJN-N	60 m ²	4. 3. 23 ～3. 31	橿原市膳夫町上サイ田 659-3	関本淳子	住宅建設	
石神遺跡 第10次	6AMD-U	670 m ²	3. 7. 8 ～12. 17	明日香村大字飛鳥 字唐木215-1・ 字水落214-1他	明日香村	計画調査	大脇
坂田寺 第7次	5BST-A	330 m ²	3. 9. 2 ～12. 17	明日香村大字坂田字古宮	奈良県	風致整備	西口
飛鳥寺 1991-1次	5BAS-W	1,190 m ²	3. 4. 5 ～8. 12	明日香村大字飛鳥 21-1	大字飛鳥共有	溜池埋立	花谷
山田道 第4次	6AMC-N	209 m ²	3. 7. 11 ～7. 31	明日香村大字奥山	明日香村	道路工事	山岸
本薬師寺※ 1991-1次	6BMY-C	22 m ²	4. 3. 10 ～3. 27	橿原市城殿町 285・286	城殿区共有・ 北村正実	計画調査	

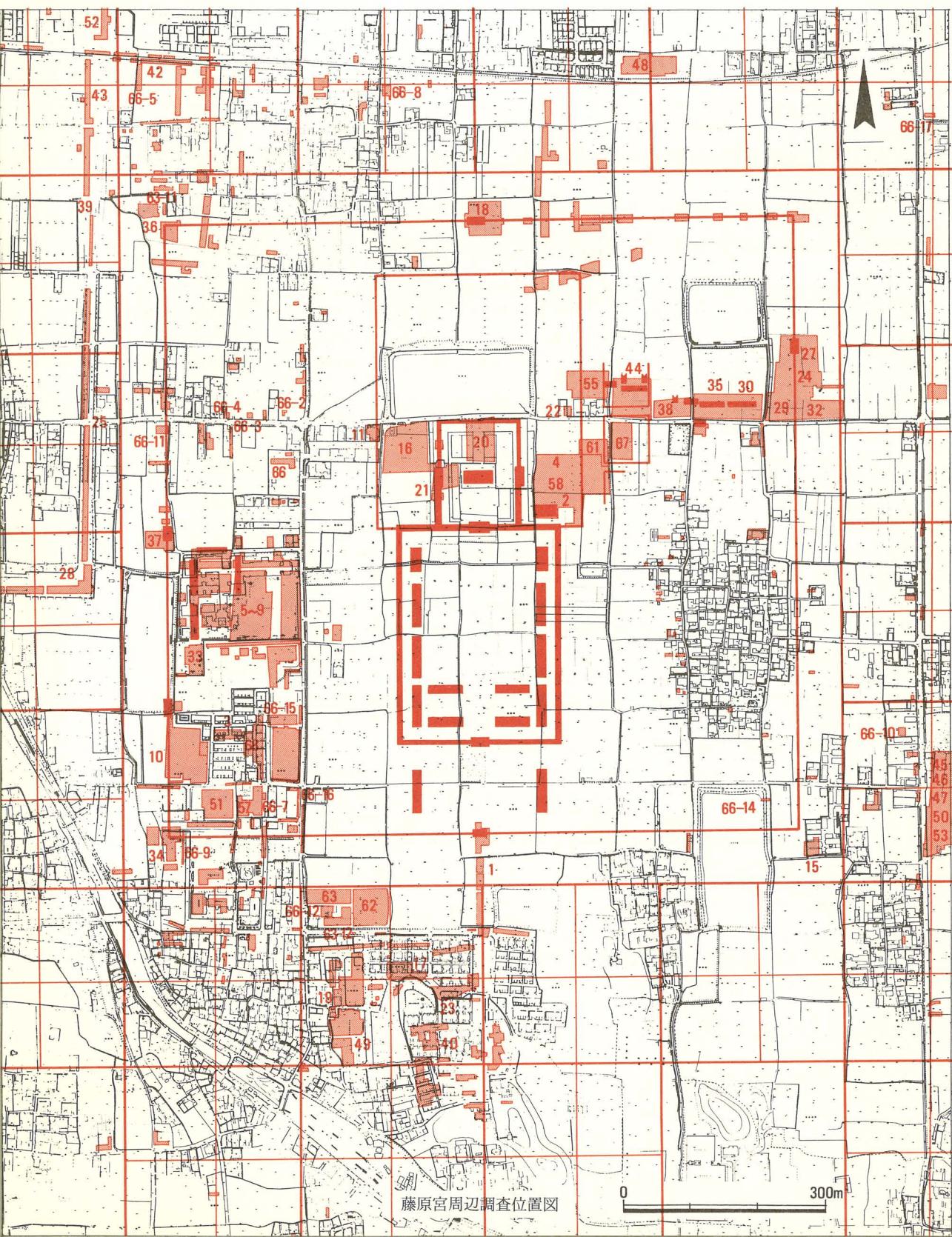
凡　例

- 本書は奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が、原則として平成三年一月から同年十二月までに行った藤原宮跡・藤原京跡および飛鳥地域の発掘調査の概要報告である。各調査の報告は、原則として各現場の担当者が行った。
- 発掘調査地一覧表には、平成三年度の調査地をすべて示した。
- 発掘遺構図に用いた座標値は、平面直角座標系第VI座標系による座標値であり、遺構図では「—」符号を省略している。高さはすべて海拔高で示す。
- 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』と省略した。
- 遺構図には、個々に遺跡あるいは大地区割りごとの一連番号を付け、番号の前に、S A (築地・壠)、S B (建物)、S C (廻廊)、S D (溝・濠)、S E (井戸)、S F (道路)、S K (土坑)、S S (足場)、S X (その他)、などの分類記号を付けた。
- 7世紀の土器の時期区分は飛鳥 I ~ V と表す。詳しくは『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II』 p.92~100を参照されたい。
- 本書の編集は山岸常人が担当した。

表紙カット：飛鳥池遺跡出土海獸葡萄鏡鋳型

裏表紙カット：飛鳥池遺跡出土木製門の様

I、藤原宮の調査



1、西方官衙地区の調査

ア、第66次調査

(平成三年八月～九月)

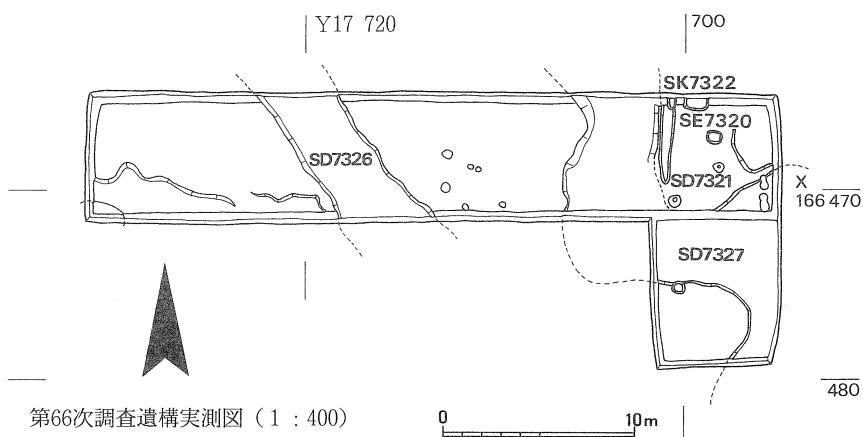
この調査は農協移転に伴う事前調査として、橿原市繩手町で行ったものである。調査地は藤原宮西方官衙にあたる。周辺地は国道165号線建設時に地下げが行われており、藤原宮期の遺構の存在があやぶまれていた。過去には同敷地内で第29-2次調査が行われている。この時は藤原宮期の遺構は確認できず、古墳時代の自然流路を検出している。今回はそのすぐ南に東西37m、南北7mの調査区を設け、一部東端を南へ拡張した。調査面積は約315m²である。

調査区の層序は上から盛土・旧耕土・茶褐色土となり、西辺の一部では茶褐色土の上に淡緑灰色粘質土が、東辺の一部では青茶褐色細砂土（整地土）が堆積する。床土は地下げのため存在しない。遺構は現地表面下1.3mの旧耕土直下の茶褐色土・淡緑灰色粘質土・青茶褐色細砂土上面で検出した。

遺構

検出した遺構は流路・井戸・土坑などがあり、これらは古墳時代のものと7世紀後半のものがある。

古墳時代の遺構 調査区の中央部と東部で古墳時代初頭の流路SD7326・SD7327を確認した。SD7326は南東から北西へと流れる自然流路で幅3.5m、深さ1.1mである。堆積層は褐色・灰色粗砂である。SD7327は南東から北西へと蛇



行しながら流れる自然流路である。幅5~6m、深さ1.0mで、堆積層は黒灰色バラスである。第29-2次で検出したSD2286はSD7327の堆積層の一層であり、第29-2次調査区全域が今回検出のSD7327の中と考えられる。SD7326・SD7327からは布留式の土器が出土している。

7世紀後半の遺構 調査区の東部、SD7321以東の東西幅4mの範囲で、厚さ約0.3mの青茶褐色細砂土の整地層が存在する。この整地層上面で南北溝SD7321・井戸SE7320・土坑SK7322が検出された。SD7321は幅0.6m、深さ0.5mの南北溝で、調査区北端から4.5mで終る。埋土は青茶褐色砂質土で遺物の出土は無かった。SE7320は径1.5mの円形の井戸である。北半分は調査区外となる。深さ1.1m、堆積土は暗灰色砂質土で、飛鳥Ⅲの土器が出土した。SK7322は径0.5mの土坑で、深さは0.7m、北半分は調査区外となる。堆積土は黒褐色土・暗灰色砂質土で、重複関係からSD7321より新しい。

遺 物

今回の調査区から出土した遺物は比較的少なく、弥生時代から藤原宮期に属す。SD7326・7327からは古墳時代初頭の布留式の壺・甕・椀・高杯が出土し、SE7320からは飛鳥Ⅲの土師器杯C・甕・高杯、須恵器杯・甕が出土した。

まとめ

今回の調査の目的のひとつであった藤原宮関係の顕著な遺構は確認することができなかったが、藤原宮造営以前の様相の一端に触れることができた。古墳時代初頭の遺構として南東から北西へと流れる2条の自然流路を確認した。また、調査区の一部で7世紀後半の整地土を確認、これを切込む溝・井戸・土坑などを検出した。井戸SE7320は出土土器から井戸の存続時期を飛鳥Ⅲに限定でき、整地地業もこれに伴うものか、それ以前と考えられる。当該時期における藤原宮地域の開発が注目される。

イ、第66-2・3・4次調査

(平成三年四月)

これらの調査は、住宅新築ならびに駐車場造成に伴う事前調査として、樞原

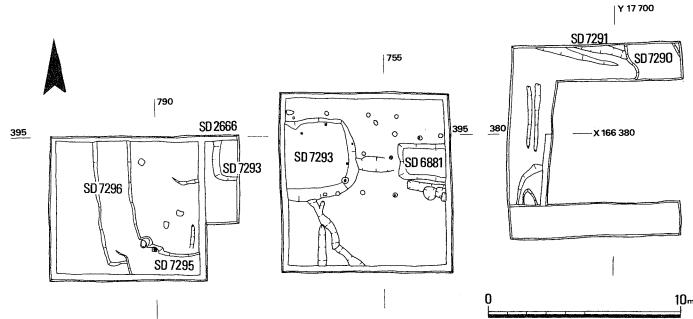
市繩手町において相次いで行ったものである。調査地は醍醐池の西方で藤原宮西北部にあたる。周辺では過去十数回の調査を行っているが、概して後世の削平が著しく、第58-11次調査において宮内先行条坊の四条々間路と西二坊々間路の交差点を検出した（『概報19』）以外、宮にかかる顯著な遺構は検出されていない。ただ、第27-6次調査及び第63-2次調査において14世紀頃の集落に伴う環濠らしき溝が見つかっており、今回の調査は藤原宮期の遺構の遺存状況の確認と共に、環濠で囲まれた範囲を押えることを主眼とした。その結果、やはり藤原宮期の遺構は全く検出できなかったが、二重の環濠を巡らした方形区画の規模が判明したので、調査次数は異なるがまとめて報告する。

遺構

第66-2次調査は2m×9mの東西トレンチ2本を、6mの間隔をあけて設定した。南トレンチは従来から知られている沼状地形にあたり、湧水が著しいため調査を断念した。北トレンチでは、床土直下の暗茶褐色粘質土面で自然流路と思われる南北溝SD7290と、これに注ぐ東西溝SD7291を検出したので、両トレンチ間を幅2mで結んだ。その結果、南トレンチのすぐ北から東南方向に沼状地形SK7292が広がることが判明した。SD7290はここに流れ込むのであろう。

第66-3次調査は東西9m、南北9.5mの調査区を設定して行った。基本的な層序は耕土・暗灰茶色砂質土・黄褐色粘質土・灰黒褐色砂質土（地山）の順で、暗灰茶色砂質土面で環濠の一部であるSD6881・SD7293と数個の円形小柱穴群SX7294等を検出した。SD6881は前年東隣で行った第63-2次調査で検出していった溝の西延長部に当り、調査区中央で一旦途切れる。幅約2m、深さ0.25cmで、埋土は2層に分かれれる。

前回は無遺物のため年代を決められなかったが、今回14世紀の土器が出土したため、環濠の一部とみて間違いない。SD7293はSD6881の



第66-2・3・4次調査遺構実測図（1：400）

西端から2.2m隔てて始まり、西へ伸びる溝状遺構である。幅4.4m、深さ0.75m程の大規模なもので、埋土は2層に分かれる。SD6881・SD7293の周辺には数個の円形の小型柱穴があり、半数には柱根が残る。建物として明確にまとまらないが、溝が途切れる鞍部に当るため門が存在した可能性は残る。

第66-4次調査は当初東西8.3m×南北7.7mの範囲で開始し、後に東へ1.7m×3.7m拡張した。基本層序は耕土・床土・灰褐色砂質土・暗灰茶色砂質土・灰黒褐色砂質土（地山）の順で、遺構を検出したのは暗灰茶色砂質土面である。調査区ほぼ中央を北から東にL字形に曲る溝SD7295・SD7296は幅2.0m、深さ0.4mで、埋土は層に分かれる。その東4.3m、北4.0mの位置（拡張区）で、平行してやはりL字形に曲る溝の一部を検出した。これは第66-3次調査のSD7293、第27-6次調査のSD2666それぞれの延長線上にあり、両者が合する部位にあたる。幅は不明、深さ30cm、堆積土は上下の2層に分かれる。

まとめ

今回の調査と第27-6次・第63-2次調査の成果を総合すると、二重の環濠を巡らせた正方形の区画が復原できる。第27-6次調査の直角に折れ曲がる溝SD2665・2666が内濠の西北隅にあたり、SD2665の北肩から今回検出した西南隅にあたるSD7293の南肩までの距離は約65mである。一方、SD7293の西肩から第66-3次で検出したSD7293東端とSD6881西端のとぎれ部の中心までの距離は32m強を測り、両溝間の鞍部を中央入口と見てここを中軸線として東に折り返せば外寸で方65mの区画が想定できる。また、第27-6次の調査でもSD2665・2671、SD2666・2675双方の溝肩間が約4.3m、4.5mとほぼ等しかったことから、この空間地を通路とみなす可能性を指摘していたが、西南隅の第66-4次でも同様に西へ約4.3m、南へ約4.1m隔てて直角に折れ曲がる溝SD7296・7295を検出し、これらが外濠であることが確実になった。外濠で囲まれた区画の規模は東西・南北共外寸で76mとなる。なお、内濠・外濠間の空間地に土壙あるいは築地壙のような施設があったか否かは判らない。また、西辺の外濠SD2675は北方へと抜けている。排水のためであろう。

区画が正方形で、環濠が二重に巡る点は、通常の中世環濠集落のあり方とは

様相を異にする。むしろ土豪層の居館のような施設を想定すべきであろう。

出土遺物には大量の土器類のほか若干の瓦類があり、軒丸瓦6275型式1点、軒平瓦6641F型式1点がSD7293から出土している。土器類は主として2本の濠から出土し、14世紀代を主体に若干13世紀代のものを混える。



環濠区画復原図

ウ、第68次調査東区

(平成三年九月～十一月)

この調査は、近年継続して行なわれている橿原市四分町での市営団地建て替え工事に伴う事前調査として実施したものである。調査地は藤原宮西方官衙地域に当る。当地域では、これまでの調査において、藤原宮に関わる南北に長い建物群（第5～9次調査）、小規模な掘立柱建物や塀（第3・26・51次調査）、あるいは藤原宮に先行する六条々間路・西二坊々間路（第51・54-15・57・59次調査）などを検出している。また当地の周辺には弥生時代の集落遺跡である四分遺跡がひろがり、今回の調査区に東接した位置で行った第59次調査では掘立柱建物や掘立柱塀・井戸など藤原宮期の遺構を検出するとともに、その下層で弥生時代後期の水田遺構を確認している。従って本調査においては、西方官衙地域における藤原宮期の土地利用の状況、及びその下層における弥生時代の水

田跡の西方へのひろがりを確認することを主な目的とした。

なお今年度実施した第68次調査は、東区と西区に分けて行った。そのうち本概報では東区の調査について報告し、西区については次年度の概報に収録することとする。

東区における調査は排土の置場の関係から、まず調査地の北半を調査し、次に南半に及ぶこととした。調査面積は1010m²である。なお下層遺構の調査は第59次調査との関連から、調査区南半に東西14m、南北11mの調査区を設けて行った。以下では上層遺構と下層遺構に分けて調査の概要を述べる。

上層遺構

本調査区における層序は、上から、現代の盛土・耕作土（暗灰色粘質土）・床土（暗青灰色粘質土）・淡褐色土で、遺構はこれらの土を排除した現地表下0.7mの深さにある淡黄灰色微砂・灰褐色礫の上面で検出した。

検出した遺構には、掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・土坑・溝などがあり、これらはおおむね古墳時代・7世紀前半代・7世紀後半及び藤原宮期に属する。

古墳時代の遺構 この時期に属する遺構には、井戸2基、溝4条、土坑1基などがある。

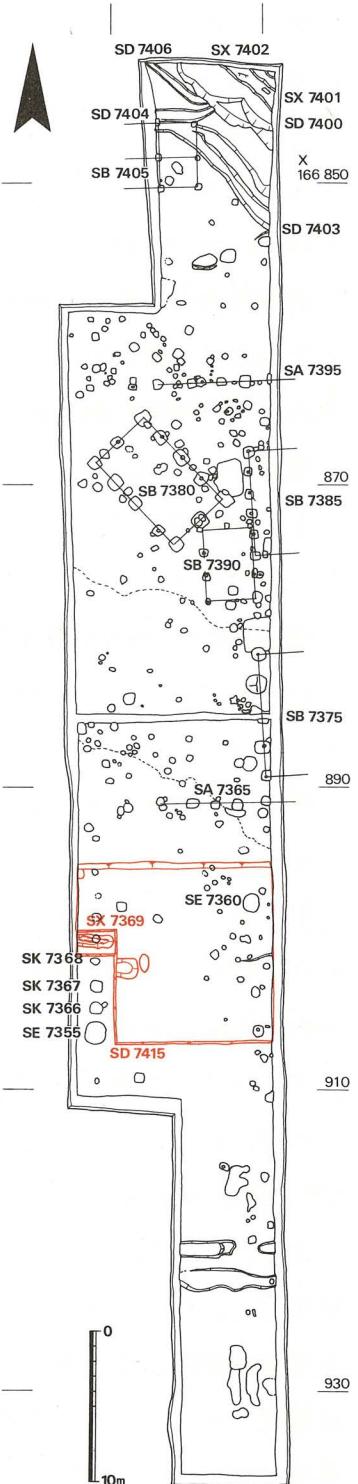
2基の井戸はいずれも調査区南半で検出した。SE7360は東辺に位置し、1辺1.2mの隅丸方形を呈する素掘の井戸で、深さは0.8mである。また西辺で検出したSE7355は、深さ1.1mの素掘の井戸で、1辺1.4mの隅丸方形を呈する。SE7360とSE7355からはともに5世紀後半に属する土器が出土した。

調査区北端付近ではSD7400・7403・7404・7406の4条の溝を検出した。SD7400は調査区の北端で検出した斜行する大溝である。調査区内では南岸のみを検出し、北岸を確認していないために溝の規模は明かではないが、現状で幅は5.5m以上、深さは1.8mある。堆積土は大きく3層に分けられるが、最上層（炭混暗灰褐色砂質土）はこの溝を含め調査区北端部全体を埋めた埋土である。この層からは飛鳥I及び飛鳥IV・Vの土器が出土した。溝の本来の堆積層は2層からなり、上層は灰色微砂・黄灰色粗砂・淡灰色粘砂が互層になる砂質土層で、下層は灰褐色粗砂である。上層からは5世紀後半から6世紀後半の土器が出土し

たのに対して、下層には須恵器が含まれておらず、4世紀末から5世紀初頭の土器が出土する。SD7400の中央部には流れに沿うように木組施設SX7401・7402が設けられている。ともに溝の底を幅数十cmで掘り窪めて流れに沿って置いた木組の施設で、その周囲に粘土・粘質土を貼って固めている。SX7401は、掘り窪めた底に小石を置き、その上に板を立てて粘土を貼ってそれを支え、さらにその上に底板を置いて側板を立て、側板の内外を粘土で貼り固めるとともに所々を杭で止めている。またSX7402の木組は机を転用したもので、天板を北に向けて寝かしている。SX7401・7402とともに機能は明かではない。なおこれらは裏込や内部の堆積土から出土した遺物が4世紀末から5世紀初頭のものであることから、SD7400の下層の堆積土に対応する時期に設けられたものである。

SD7404は幅0.8m、深さ0.5mの素掘の東西溝で、断面はU字形を呈する。SD7404はSD7400から水を引くための溝であると考えられる。またSD7403は1.2m、深さ0.3mの素掘の溝で、SD7400にはほぼ並行して流れる。SD7404・7403はいずれもSD7400の上層と同時期の土器を出土するが、重複関係からSD7403がSD7404より古い。

SD7406は北で西に45°振れる素掘の溝で、断面U字形を呈する。幅は0.5m、深さは0.4mである。出土した土器は少ないが、須恵器を含まずほぼ4世紀末から5世紀初頭のものに限定されること



第68次調査東区遺構実測図（1 : 500）

や重複関係から、SD7400の最下層の堆積に並行する時期の溝である。恐らくSD7404と同様にSD7400から水を引く機能を果たしていたと推定される。

井戸SE7355の北で土坑SK7668を検出した。楕円形で、深さ7cmの浅い土坑である。SK7668からは古墳時代の土器が出土した。

7世紀前半代の遺構　この時期に属する遺構には、掘立柱建物1棟がある。

調査区中央北寄りで検出したSB7380は、桁行4間、梁間2間の掘立柱建物で、北で西に45° 振れる。この振れは、上述した古墳時代の2条の溝SD7400・7404の振れや、第59次調査で検出した弥生時代後期の水田遺構の畦畔方向ともほぼ合致する。このことは弥生時代から7世紀前半までの長期に亘り地形に制約された土地利用が行われたことを示している。柱間寸法は、桁行が1.8m、梁行が1.9mである。

7世紀後半から藤原宮期の遺構　この時期に属する遺構には、掘立柱建物4棟、掘立柱塀2条、土坑3基等がある。掘立柱建物・掘立柱塀ともわずかに北で西に振れている。

調査区の東辺中央で検出したSB7375は南北棟掘立柱建物で、その西側柱列4間分を検出した。柱間寸法は2.1m等間で、いずれも柱穴には長さ50~70cmの柱根を残す。両端と北から3番目の3個の柱穴には柱の下に礎盤（南端は石で、他は木材）を置く。SB7375の北3.7mにはSB7375の西側柱と柱筋を合わせたSB7385がある。SB7385も南北棟掘立柱建物で、その西側柱列7間分を検出した。柱間寸法は1.4m等間である。北端の柱穴には柱根が残り、その下には礎盤の石が置かれていた。SB7385と重複関係があり、それより新しいSB7390は、桁行3間、梁間2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行が1.8m等間、梁行が1.7m等間である。SB7375の南1.5mには掘立柱東西塀SA7365があり、調査区内で4間分を検出した。柱間寸法は1.5m等間である。またSB7385の北には4.5mを隔てて掘立柱東西塀SA7395があり、調査区内で6間分の柱穴を確認した。柱間寸法は1.8m等間である。さらに調査区の北辺に位置する総柱建物SB7405は、南北2間、東西1間以上で、柱間寸法は南北が2.0m等間、東西が2.4mである。

3基の土坑SK7366・7367・7368は古墳時代の井戸SE7355の北で南北に並んで

検出された。いずれも隅丸方形を呈する深さ0.1m程度の浅い土坑である。これらの土坑からは7世紀代あるいは飛鳥IVの土器が出土した。当初SK7368も含めて一連の柱穴で、掘立柱建物となると考えていた。しかし断ち割り調査の結果いずれも浅く、柱の痕跡や抜取りを認めることができず、また出土した遺物からSK7368だけ時期の古いことが明かとなり、並んで掘られた土坑であると考えるに至った。

なお第59次調査で調査区の西辺において検出し、さらに西方へ延びることが推定されていた3棟の掘立柱建物と1条の掘立柱塀については、その延長を本調査区内で検出することはできなかった。従ってこれらの遺構はいずれも第59次調査区と本調査区との間において完結するものと推定される。また逆に本調査区において検出し、東へ延びることが推定された遺構についてもその延長を第59次調査区において検出していないことから、これらの遺構も両調査区に挟まれた未調査地において完結するものと思われる。

下層遺構

下層遺構の調査は、調査区南半の東壁面における土層の観察及び平面における遺構の検出の両面から行ったが、いずれにおいても水田の遺構を確認することはできなかった。

基本的層序は、上から順に微砂（淡茶灰褐色微砂・淡黄灰褐色微砂）・粘質土（淡灰褐色粘質土）・微砂（淡黄色微砂・淡黄褐色微砂）で、遺構面である粘土（黒灰褐色粘土・黒灰色粘土）に至る。

検出した主な遺構には、溝状遺構SX7369と東西溝SD7415がある。SX7369は下層遺構掘り下げ途中で検出したもので、検出面は淡灰褐色粘質土である。幅0.9m、深さ0.3mで、調査区内で2.2m分を確認した。掘り込みの内部には自然木が埋まり、それを封するように上を黄灰色微砂が覆っていた。機能・性格は明かではない。また東西溝SD7415は上層で検出したSE7355の壁面及び底面において確認した、ほぼ東西に流れる溝である。SD7415からは弥生時代中期の土器が出土した。

出土遺物

出土した遺物には土製品・木製品・石製品・金属製品がある。古墳時代の土師器・須恵器が大半を占め、7世紀から8世紀の遺物は少ない。注目されるものとしては、7世紀から8世紀のものと考えられる蹄脚硯・円面硯、古墳時代の碧玉製管玉・滑石製双孔円盤などがある。

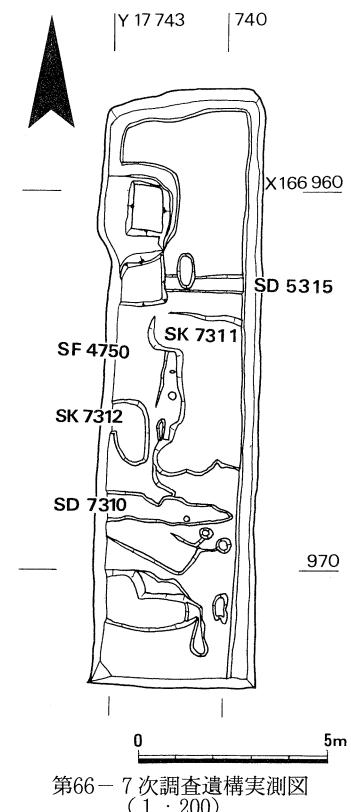
まとめ

今回の調査においては、古墳時代、7世紀前半代、7世紀後半から藤原宮期の建物・塀・井戸・溝等を検出し、今回の調査区においてもこれまで周辺で行われた藤原宮西方官衙地域の調査成果とほぼ同じ状況であることを確認した。また7世紀前半代の遺構の方位が弥生時代後期の水田の畦畔や古墳時代の溝の方位とほぼ一致していることが確認され、7世紀前半代まで長期に亘って自然地形に制約された土地利用が行われたことも明かとなった。一方本調査区に東接する位置で行われた第59次調査で検出された弥生後期の水田遺構は今回の調査区では確認できなかった。第59次調査区では黒色粘土の直上に堆積していた褐色シルト層の存在を手がかりとして水田跡の検出を行ったが、今回の調査区ではこの土層が認められず、このことが水田遺構を検出できなかった要因である。また水田と住居を区画するような溝等の施設も検出しておらず、第59次調査で検出した水田の西への広がりについては不明である。

エ、第66—7次調査

(平成三年八月)

この調査は、道路建設に伴う事前調査として、橿原市四分町で実施したもので、調査地は藤原宮の西南辺にあたる。周辺ではこれまで数次の調査が行われ、特に本調査地に西接する位置で昭和六十二年には第57次調査が実施され、藤原宮に先行する条坊道路である西二坊々間路が検出された。今回の調査



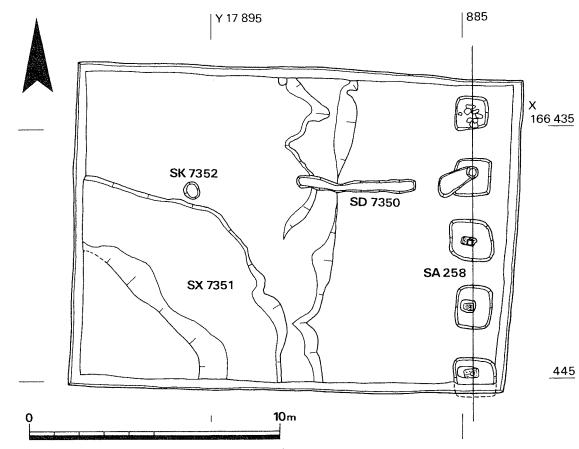
はその東延長を確認するために実施した。調査面積は60m²である。

盛土・耕土・黄灰粘質土・黄灰褐砂質土・灰褐微砂を排除して遺構面に達する。検出した主な遺構は東西溝2条と土坑2基である。二条の東西溝はともに浅い素掘で、SD5315は幅0.5m、深さ0.2m、SD7310は幅0.8m、深0.2mである。このうちSD5315は第57次調査で検出した西二坊々間路SF4750北側溝の東延長上に位置するが、その南11mに位置するSD7310は南側溝の延長上にはない。従ってSD7310は西二坊々間路の南側溝ではなく、本調査区内では南側溝は削平されてしまったと考えられる。SK7311は深さ0.2mの浅い不整形の土坑で、またSK7312は深さ0.1m程の長円形の土坑である。いずれも時期は明らかはない。

2、西面大垣の調査（第66-11次）

（平成三年十一月～十二月）

この調査は、橿原市繩手町における個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は昭和五十四年の第23-5次調査地の北にあたり、調査区の東端に藤原宮西面大垣SA258、その西9mに南北溝SD2375、調査区西端から西の水田に外濠SD260が想定された。調査地は湿潤な水田で、基本的な層序は上から水田耕作土・床土・青灰色粘土・暗褐色砂質土（地山）である。調査地の東端では表土下約40cmで地山の暗褐色砂質土となり、その上面で大垣SA258を検出したが、地山は大垣の西3mあたりから西へ向かって大きく下降し、その上に灰色微砂粘土や青灰色砂質土が厚く堆積する。また、大垣の西8mあたりから西では、青灰色砂質土もやや大きく下降して、木質物を含む暗灰色粘土層や暗灰色砂層となる。これらは西外濠の最終堆積層にあたるもので、調査区の西



第66-11次調査遺構実測図（1:300）

端では、暗灰色粘土が急激に下降する状況で西外濠に至る。

遺構 検出した主な遺構には西面大垣SA258がある。第23-5次調査の南北溝SD2375は検出されなかった。

西面大垣SA258は、一辺1.5~1.8mの大型掘方をもつ南北塀で、5間分を検出した。柱穴の遺存状況は極めて悪く、柱掘方が深さ約0.3~0.4m残るだけで、その中央部西寄りに柱抜取り穴の最下部が柱痕跡状に確認された。柱抜取り穴の東面は半円形をなしていて、柱の最下部の痕跡と理解されることから、柱の直径が約0.3mで、柱間は2.6m等間であることがわかる。北端の柱穴では柱位置の底に大きな川原石を据えて、その周囲に同様の川原石を詰め込んでいる。他の柱穴の底には礎盤が据えられている。礎盤は長さ約50cmに切った筏穴のある丸太材を2つから3つに縦割りしたもので、南端の柱穴では別に半裁した丸太の薄い断片が敷いてあった。これらは柱の不同沈下を防ぐためと考えられる。

遺物 遺物には土器・瓦類がある。土器は西外濠の最終堆積層などから土師器・須恵器・黒色土器・瓦器のほか灰釉陶器が少量出土し、瓦類には藤原宮式軒丸瓦6275D・軒平瓦6641Cのほか丸・平瓦が少量ある。

まとめ 西面大垣に関しては、これまでに昭和四十三年の県教育委員会の調査、第23-5次・西面中門・西面南門・西南隅の調査の多くの地点で確認してきた。今回の調査では、大垣の柱の礎盤の存在とその構造を確認した。西外濠については、第23-5次調査で藤原宮の廃絶後も周辺地の基幹用水路として中世まで機能し続けたことが明らかになっており、今回も直接に西外濠を検出したわけではないが、その最終堆積層にあたる砂・有機物層を確認し、中世には浅いが幅広い水路となっており、この水路のために藤原宮期の南北溝が流失していることを確認した。この最終堆積層に関しては、第23-5次調査では青灰色粘土層で覆われた後、自然河川状をなしたものと理解してきた。今回の調査では、瓦器を含む粘質土層や有機物層がその上で確認され、瓦器の時期にまでも基幹水路として機能していたことが認められた。

3、南面大垣の調査（第66-9次）

(平成三年九月)

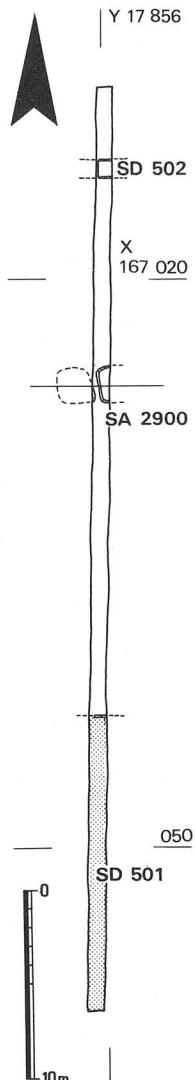
この調査は下水道埋設工事に伴う事前調査として、橿原市飛騨町で行ったものである。調査地は藤原宮西南隅の整備地にはさまれた南北道路で、南面大垣を南北に横断する位置にあり、第34次調査（『概報12』）の東隣にあたる。調査区は南北49m・東西0.8mの約40m²である。

調査地の層序は上から盛土・茶灰色砂質土・淡茶灰色細砂土・黒褐色土で、遺構検出は現地表面下1.5mの黒褐色土（弥生時代後期の包含層）上面で行った。検出した遺構には南面内濠・大垣・外濠のほか東西・南北の小溝がある。

南面内濠SD502は幅1mで、堆積土は黒褐色土混じりの灰茶色土で、瓦・土器が少量出土した。

南面大垣SA2900は2個の柱穴を検出した。これらはそれぞれ西南隅の柱穴から9・10番目にあたる。東の柱穴は南北1.8m、東西は調査区外に出るが0.5mまで確認できた。隅丸方形を呈すると思われる大形の柱掘方である。埋土は黒褐色土ブロック混じりの淡茶灰色土である。西の柱穴は西壁で確認したもので、南北1.2mまで確認した。埋土は東の柱穴と同様である。南面外濠SD501は幅15m以上を検出したが、さらに南へ広がる。第34次調査地を考慮すると、今回検出した溝は外濠本体ではなく最上層の部分と思われる。堆積土は最上層が灰色粘土・茶褐色土である。

以上のように、幅0.8mと極めて狭い調査区であったが、藤原宮の南面内濠・大垣・外濠を検出し、これまでの成果を追認した。



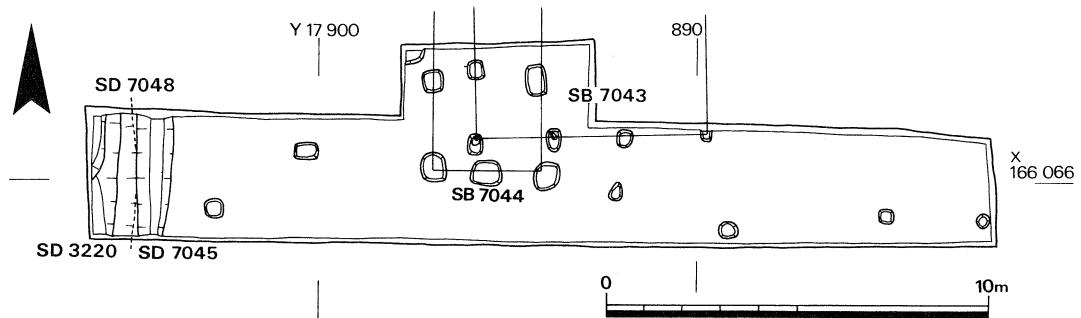
第66-9次調査遺構実測図（1:400）

4、宮外周帶の調査（第63－11次）

（平成三年一月）

この調査は資材置場建設に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原宮西北隅の二条大路と外濠にはさまれた外周帶にあたり、周辺の調査としては南に第36次（『概報14』）、東に第54－22次（『概報19』）、北には第58－14・15次（『概報19』）、北西に第63－1次（『概報21』）等がある。調査区は東西24m・南北3mを設定、後に一部北へ拡張した。調査面積は82m²である。調査地の層序は、上から黒灰色粘質土（耕土）・青灰色粘質土・灰褐色砂質土（床土）・暗灰褐色砂質土（包含層）・茶褐色粘質土があり、遺構は現地表面下0.4mの茶褐色粘質土面で検出した。検出した遺構は、建物・溝のほか、南北・東西方向の小溝がある。

建物SB7043は東西3間、南北2間以上の建物で柱穴は0.5m 規模、柱間は東西7尺、南北7尺である。一部の柱穴には石が入り、柱穴から10世紀以前の黒色土器が出土地している。建物SB7044は東西2間、南北2間以上の南北棟建物で、柱穴は一边0.7m略方形を呈する。柱間は梁行6尺、桁行8尺、遺物の出土は無かったが、藤原宮以前の7世紀代と考えられる。南北溝SD7045は幅0.5m、深さ0.15mで暗灰緑色砂質土が堆積し、11世紀の瓦器が出土地している。南北溝SD3220は幅0.9m以上、深さ0.5mで、包含層の上面から切込む。暗灰緑色粘質土の堆積土から11～12世紀の瓦器が出土地している。南北溝SD7048は幅1.3m以上、深さ0.5mである。SD3220の下層で検出したもので、西肩は調査区外となる。堆積土は灰褐色砂質土で、土師器・須恵器が出土地している。



第63－11次調査遺構実測図（1：200）

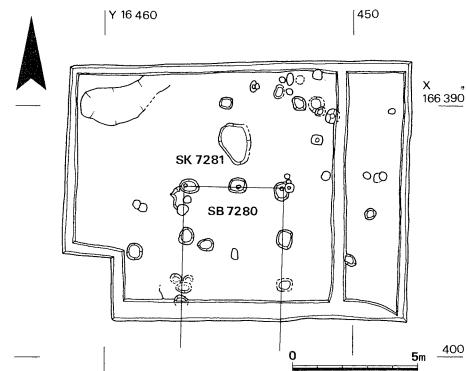
1、左京四条四坊の調査（第63－13次）

(平成三年三月～四月)

この調査は、宅地造成に伴う事前調査として、橿原市膳夫町で実施したもので、調査面積は136m²である。調査地は左京四条四坊東北坪の西南部に位置する。昭和五十年には今回の調査地の東南方で調査を行ない、四条大路を検出している（第27－14次調査、『概報10』）。

調査区内では、耕土・床土を排除すると遺構面である灰褐色微砂・暗茶褐色粘質土に達する。検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、土坑1基である。SB7280は桁行2間以上、梁間2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行が2.1m、梁行が1.8mである。SK7281は不整形の土坑で、深さは0.15mと極めて浅い。

出土した遺物は少なく、特に遺構に伴うものが極めて少なく、また土器も土師器の破片のみであるために、遺構の年代を特定することは極めて困難である。



第63－13次調査遺構実測図（1：300）

2、左京六条三坊の調査（第66－10次）

(平成三年十一月)

この調査は個人住宅建設に伴う事前調査として、橿原市木之本町で行ったものである。調査地は左京六条三坊北西坪にあたる。左京六条三坊では、過去の数次にわたる調査によって、藤原宮期では四町占地と推定される大規模な土地利用の状況が判明するとともに、京以前では「木之本廃寺」、奈良時代には「香山正倉」の存在が推定されている（第45～47・50・53次調査、『概報16』～『概報18』）。今回の調査も関連遺構の検出が期待されたが、調査予定地はすでに盛土がなされているのに加えて、工事排土が高く積まれていたために、

調査面積は南北10m・東西7.5mの75m²に留まった。

調査地の層序は盛土・水田耕土・床土・淡黄灰色ないし淡青灰色微砂となり、遺構検出は地表下0.7~0.8mにある微砂層の上面で行った。

検出した遺構には藤原宮期のものとして、不整形の土坑SK7347・小穴SX7345、京以前のものとして小穴SX7348のほかに東西方向に掘られた中世の小溝がある。

土坑SK7347は、最深部で約0.2mあり、褐色砂質土で埋められている。土坑からは少量の瓦と土器が出土した。小穴SX7345は調査区西壁断面にかかるもので、一辺0.7m、深さ0.25mである。小穴SX7348は、藤原宮期の遺構面下0.3mで検出した直径0.3m、深さ0.07mの小穴である。遺構面である微砂層の下は、微砂と粘質土の間に砂礫層が堆積し、あたかも調査区全域が流路であったような状況を示していた。この流路の堆積土の一部からは7世紀後半を下限とする土器・瓦片が少量出土した。

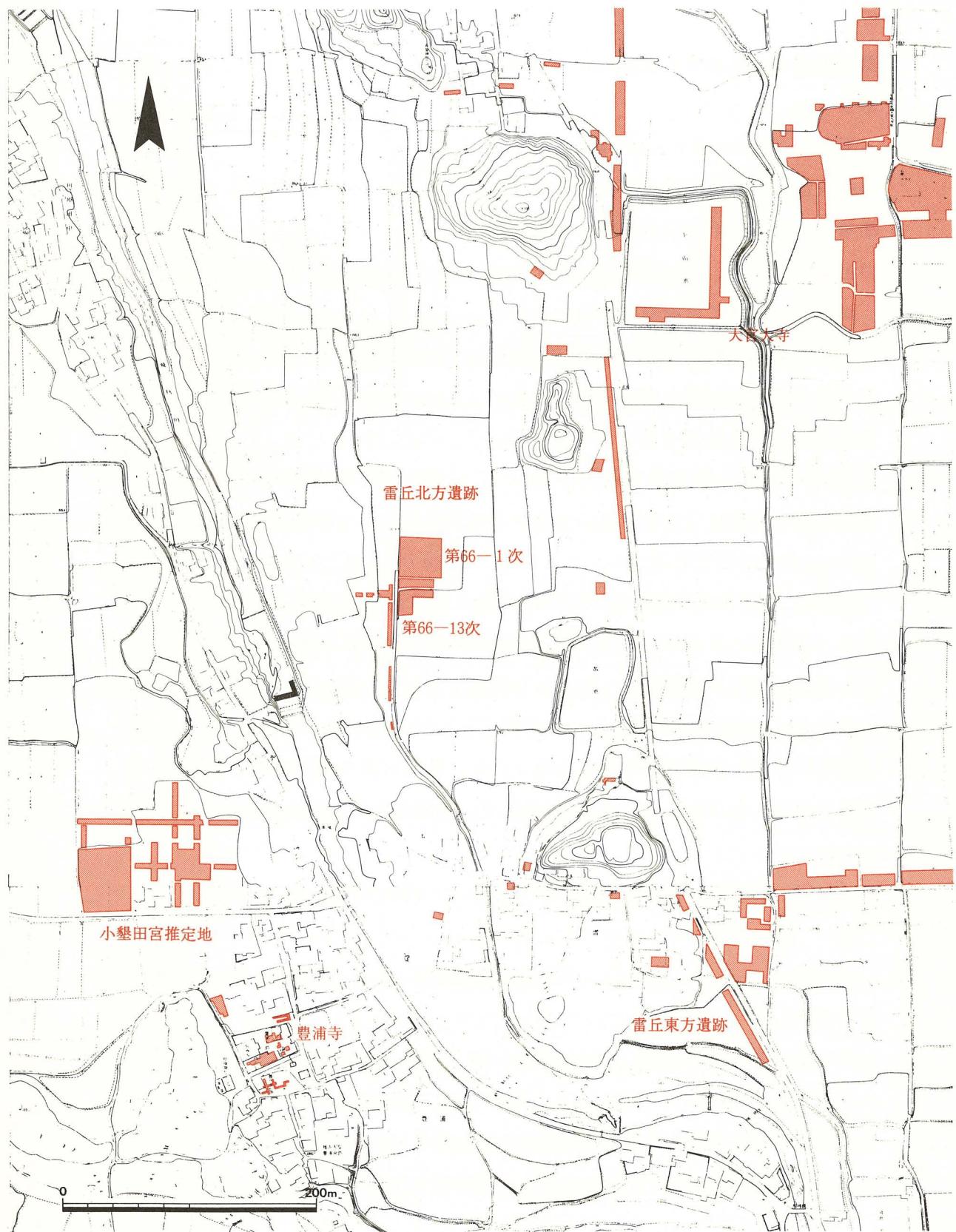
以上のように、調査面積が小規模なため、藤原宮期や奈良時代のまとまった遺構は検出されなかった。今後、当地区での大規模な計画調査が望まれる。

3、左京十二条三坊の調査（第66-1・13次）(雷丘北方遺跡)

(平成三年四月~八月・同十二月~平成四年四月)

はじめに

雷丘北方遺跡第1次調査（藤原宮第66-1次）は、橿原神宮東口停車場飛鳥線の新設によって移転する民家住宅の新築に伴う事前調査として行ったものである。調査地は高市郡明日香村大字雷（字稻葉縄手）で、雷丘の北北西200m、ギヨン山の南西80mほどの位置にあたり、藤原京の条坊では左京十二条三坊西南



雷丘周辺発掘調査位置図

坪の中心部から西南部に相当する。当地域周辺では今まで発掘調査が行われたことなく、北方の字カナヤケで重弧紋軒平瓦を採集し、昭和五十年頃に田に暗渠を敷設した際、柱根2本と土器若干が出土した（藤井利章「明日香村雷出土の柱根」『青陵』第48号 1981）程度の知見しかなかった。

第1次調査の結果、7世紀後半から奈良時代にかけての大規模な四面庇付東西棟建物とその西方に廊状に並ぶ2条の南北柱穴列を検出し、四面庇建物は藤原京左京十二条三坊西南坪の中軸線にほぼ合致し、この建物を中心に回廊が巡る空間が想定された。建物の構造・規模や廊を伴う形態などから見て、官衙あるいは宮の可能性があり、きわめて重要な遺跡であるとの認識から、県道敷設予定地とその隣接地(字竹ノ花)を対象として範囲確認を目的とした第2次調査（藤原宮第66-13次）を行った。

以下においては、両次調査の結果をまとめて報告することにしたい。

遺構

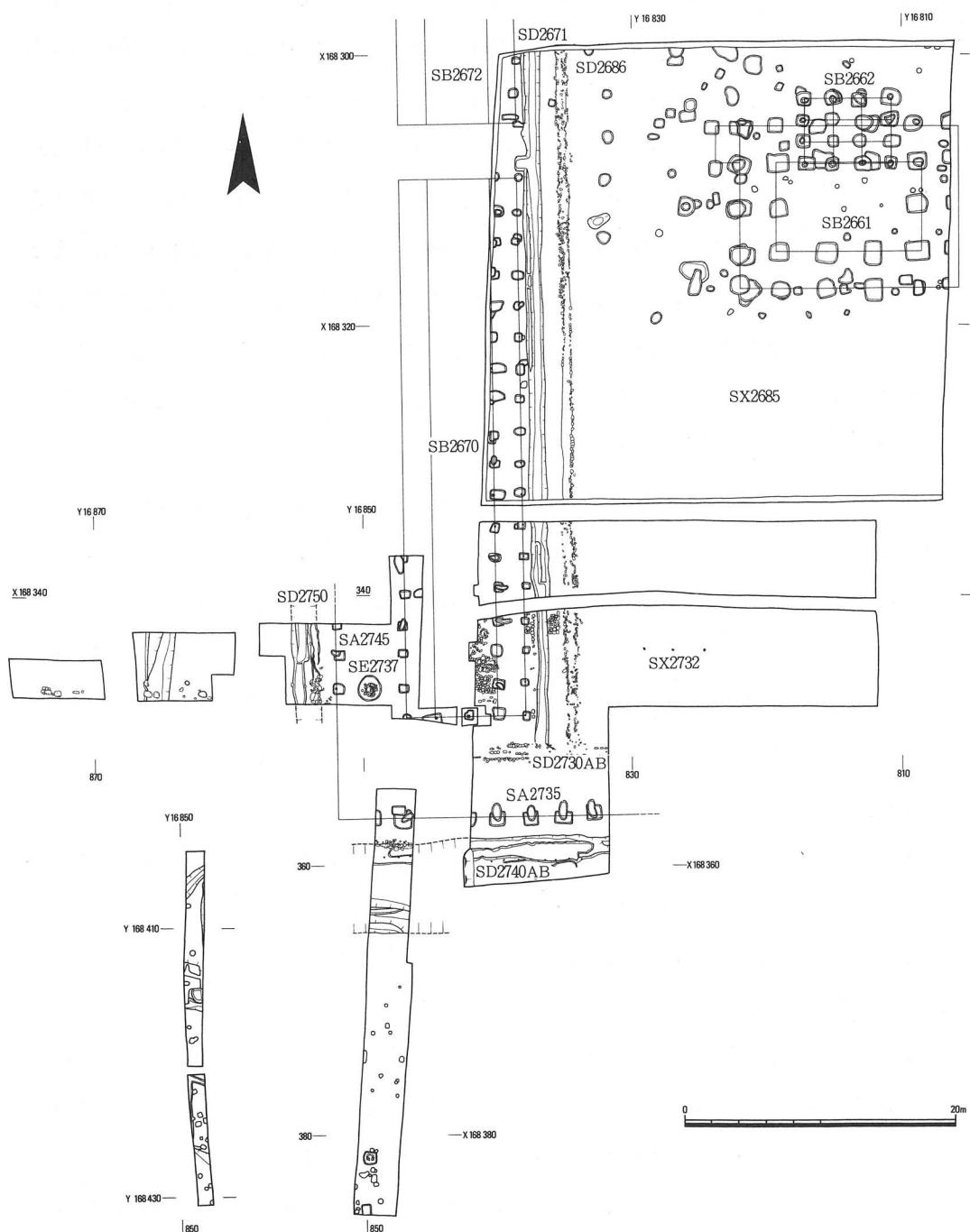
調査地は北から小山・ギヲ山・ギヲン山・雷丘と続く低い丘陵の西に広がる緩やかな斜面上の水田で、西約100mには飛鳥川が西北へ流れ、その氾濫原を示す地形が調査区の西端部まで及んでいる。全体の地形は西北方へ低くなり、古代の遺構はこの傾斜地に厚さ0.5m～1mの大規模な整地を行ってから造られている。

検出した主要な遺構は、出土遺物からみて、天武朝末期に造営され、藤原宮期を経て、奈良時代前半に廃絶したと考えられる。また、建物・溝に造り替えがあることからA・Bの2時期に分けることができる。

A期　　掘立柱建物3棟・掘立柱塀2条・溝4条がある。

建物SB2661は3間×2間の身舎の四面に庇が付いた東西棟建物である。柱間寸法は身舎の桁行が12尺、梁行が11尺、庇の出が9尺である。柱掘方は一辺2mに近い方形で、柱はすべて抜き取られていた。北庇に柱筋を揃えて西6尺のところに2個の柱穴があり、階段用の柱と思われる。建物内部で径0.3mほどの円形の柱穴をいくつか検出した（SX2665）。これらは床束であろう。

建物SB2670はSB2661の西約16mにある長大な南北棟建物で、身舎が17×2間、



第66-1・13次調査遺構実測図（1:500）

その東西に庇が付く。柱間寸法は身舎が8尺等間、庇の出が7尺。身舎の検出した柱穴20のうち7に柱根が残る。長さ約1.2m、径約30cmである。これに対し庇の柱穴24のうち11に柱根が残り、長さ約60cm、径は約15cmと細い。このため第1次調査の段階では片流れの廊と推定したのであった。建物内部に玉石敷SX2731が施されている。石敷は東庇の柱列から約2.5m東まで確認でき、建物周囲から内部全体が舗装されていたらしい。石敷面は建物中心部が高く、周囲がやや低くなる。壁のない吹抜けの建物であろうか。

建物SB2672はSB2670の北3.9m隔てて柱筋を揃えて建つ南北棟建物である。東南の隅を検出したに過ぎないが、SB2670と同形式と想定される。両建物間の間を抜けて東に進むとSB2661の階段に達する。

塀SA2735は建物SB2670の南約7.5mにある東西塀で、柱間寸法は8尺等間で柱掘方は一辺約1.2mの方形で深さ約1mと大きく、北側からの柱抜取り痕が明瞭である。

塀SA2745は建物SB2670の西約5.0mにある南北塀で、柱間寸法は8尺等間である。柱掘方は一辺約1mの方形で、柱根が1ヶ所残る。柱根は径約30cm、長さ約50cmで、礎板上に立つ。南へ延びて東西塀SA2735と接続し、L字形に区画施設の西南隅部を形成すると思われる。

溝SD2671は建物SB2670・2672のすぐ東を並行する南北溝で、両建物に共通する東雨落溝と考えられる。幅1.0m前後、深さ約0.3mで、底面に黄褐色の粘土を貼っており、また石敷SX2731とこの溝との境に石の並びが認められることから、石組溝であった可能性が強い。

溝SD2730Aは建物SB2670の南約2mにある東西石組溝である。東雨落溝SD2671が接続するものと考えられる。合流部の西側は幅約0.5m、深さ約0.2mで、北岸は2石以上小石を積んでいる。東側は幅が狭くなり、南岸は後世の小溝で壊されていると思われる。B期に造り替えがある。

溝SD2740Aは塀SA2735のすぐ南にある幅約5.0m、深さ0.5mほどの大規模な東西溝である。北岸には約1m間隔で丸太を打ち込んだしがらみの護岸がある。青灰色の細砂が堆積するが、含まれる遺物はごく少ない。B期に北岸を造り替

え幅を広くしている。

溝SD2750は塙SA2745の西約1.5mにある幅約2.6m、深さ0.4mほどの南北溝で、東岸は雑に石で護岸する。堆積土中から木簡・木製品・瓦・土器類が出土した。塙と同様SD2740とは接続すると思われるが、東西溝の方が規模が大きくかつ地形も西下がりなので、SD2740はさらに西方へ延びるものと思われる。

B期 堀立柱建物1棟・溝3条・礫敷などが新たに造られる。

建物SB2661が壊され、建物SB2662が建つ。また溝SD2671が埋め立てられて溝SD2686が造られ、溝SD2730が造り替えられる。

溝SD2686から東側、建物SB2662の南方の空間には礫敷SX2685が施される。礫は南ほど大きく密で、北ほど小振りかつ粗くなるが、明瞭な境界はない。表面は凹凸が著しく、飛鳥地域における既知の石敷や礫敷とは様相を異にする。この部分が旧流路にあたりじめじめしていたために敷いたものであろうが、上面は歩行には向いていない。

建物SB2662は3間×3間の総柱建物で、柱間寸法は東西が7尺、南北が5.5尺の東西棟である。柱掘方は1.0~1.3mの方形で、SB2661の柱掘方を切る。柱はすべて抜き取られていた。なおA期のSB2661と互いの中軸線を揃えている。

溝SD2686は溝SD2671の東約1.2mにある南北溝で、礫を雑に並べただけの石組溝である。幅約0.6m、深さ0.2mほどで、南方で東西溝SD2730Bと合流する。堆積土中から瓦類が多く出土した。

溝SD2730BはSD2686との合流部から西側でAの北岸を造り替えたものである。幅約0.3mで、北の側石は一部が残るのみで、SD2686との合流部と東側の状況は不明である。東側はA期のままであるか。

溝SD2740BはしがらみであったA期の北岸を1mほど拡幅、さらに一抱えもある大石で護岸したもので、幅は約6.0m、深さ約0.5mである。堆積土は最下層が砂、その上が粘質土で、粘質土下部から砂層上部にかけて、木簡・木製品・瓦・土器などの遺物が多数出土した。

その他の遺構 第2次東調査区中央に東西に並ぶ柱が3本遺存している(SX2732)。柱間は西1間が7尺、東の1間が8尺で、その性格は不明である。時期はA期に属

する。西調査区の塀SA2745の東側に小さな井戸が1基ある（SE2737）。径1.85mの大きな掘方中央に一辺約0.6mの小さな方形の井戸枠をつくる。井戸枠は深さは約1.4mで、各辺2枚の一枚板を上下に重ね、最上部には大官大寺式の軒平瓦などを立てて使用している。平安時代の遺構である。

第1次調査区の東南部で、整地土をはずし下層遺構の調査を行った。地山面で東から西へ流れる自然流路SX2684を検出、北岸に沿って建築部材と思われる木材が横たわっていた。

また、東二坊大路想定位置に設けた調査区では、SD2750から西約12mまでは整地土が厚さ0.5mほどで広がるが、以西では中世以降に形成された大きな段差によって整地土は失われている。このため道路遺構は検出できなかった。

第2次調査と合わせて、村道拡幅に伴う調査を村道西側について行った。東西大溝SD2740の南方では、自然堆積土である礫層が床土直下にあらわれる。時期の不明な小穴・土坑のほか、まとまった遺構は検出できなかった。十二条大路想定位置を中心に設けた調査区では、7世紀代の土坑、古墳時代の斜行溝などを検出したが、側溝など大路に係る遺構は検出できなかった。

遺 物

木簡・木製品・瓦類・土器類・石製品などがある。その多くは溝SD2686・2740・2750と礫敷上面から出土したものである。

木簡は第1次調査区の土坑SK2676から1点、第2次調査区の溝SD2740・2750から計10点出土しているが、（表）「神前評川辺里」（裏）「三宅人□人俵」と記した荷札1点、「黒月」と書いた断片1点を除き、ほとんどが削り屑である。木製品には独楽・斎串・糸巻・形代などがある。

瓦類には軒丸瓦22点、軒平瓦74点などがある。大部分は礫敷上面から出土した。大官大寺式の軒瓦が比較的多く、軒丸瓦6231Bが9点、6231Cが3点、また軒平瓦6661Bが16点ある。熨斗瓦10点も大官大寺式である。ほかには四重弧紋軒平瓦36点が目立つ程度で、軒丸瓦6233B・6278B、川原寺式E、雷紋縁の紀寺式、飛鳥寺Ⅲ、平吉遺跡Iaなどの諸型式が各1点ずつあるに過ぎない。丸・平瓦には凸面布目の平瓦、繩叩きのある平瓦が含まれるが、全体的に数量は少なく、

しかもほとんどが小片である。「觀智賢□是□」と墨書した平瓦の破片がSD2740から出土し注目される。

土器類は藤原宮期を中心に、7世紀後半のものが一定量を占め、奈良時代前半のものが少量ある。ほかに硯、新羅系土器などがある。

まとめ

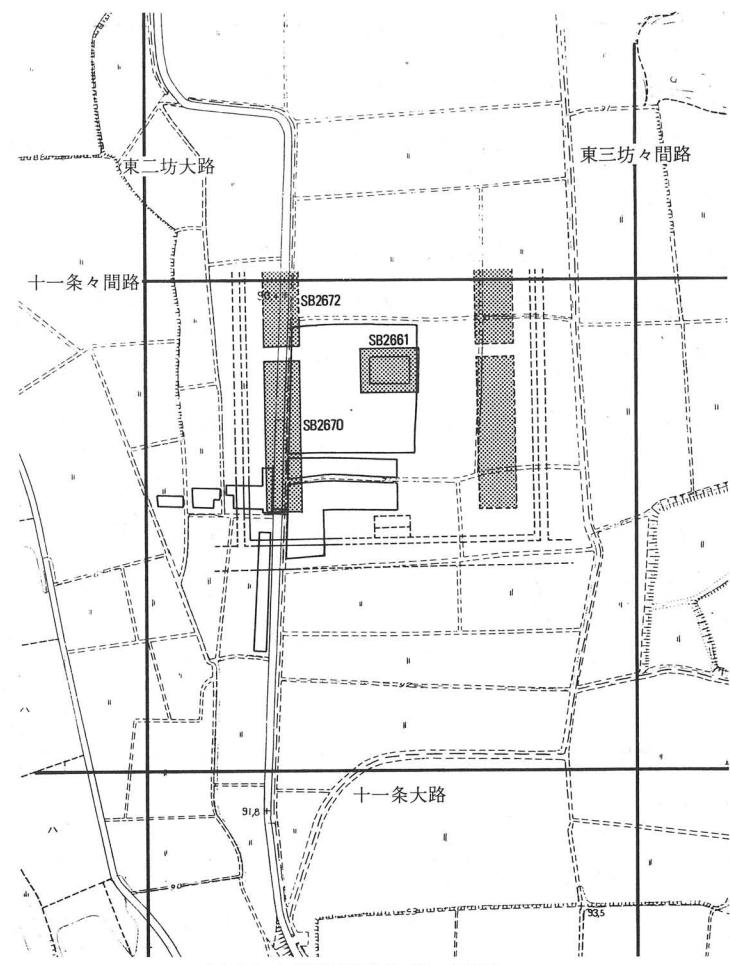
遺構配置 四面庇付きの東西棟建物の西方に2棟の南北棟建物が南北に並ぶことから、これを正殿と脇殿の関係と捉えると、正殿を中心とし東側にも同規模の南北棟建物の存在が想定できる。また、建物群の西と南に、掘立柱塀とその外側の溝とが組み合った区画施設が存在することから、正殿中軸線上南方に門が想定されるとともに、この遺跡の中心部分の東西規模が推定可能となった。遺構の配置にはその位置・距離などに計画性が窺える。北脇殿の南妻は正殿の北庇柱筋と揃い、西方の南北塀は南脇殿と柱筋を一致させるのである。また、正殿の中軸線から脇殿の中軸線までの距離は100尺、南方の東西塀の位置は正殿の心から150尺、西方の南北塀は同じく130尺にあたる。

占地・条坊との関係 正殿の中心は十二条三坊西南坪の中軸線にほぼ一致しており、南脇殿の南妻の位置もほぼ坪の南北二分線に合う。今まで十二条以南では条坊遺構は明らかになっていないが、上の状況とその存続時期からみて、この遺跡は条坊に則したものと推定してよい。また、北脇殿の規模は不明であるが、南脇殿の半分と見積っても西北坪へ渡ることは確実で、少なくとも南北二坪を占地していたことも明らかである。なお、西側の区画施設から東二坊大路心までの距離は約20mで、路面幅を考慮すると、溝SD2750と塀SA2745を実質的な西限施設とすることが可能である。一方南の溝SD2740と塀SA2735については、十二条大路まで約55mであることから、南限ではなく中心建物群の区画施設と考えられよう。

建物の規模 正殿は四面庇付きで、柱間寸法が大きく、また柱の掘方もきわめて大型である。藤原京内で今までに判明している、一坪占地の邸宅跡である右京七条一坊西南坪の正殿（柱間桁行9尺・梁行7尺、掘方の大きさ1.1～1.7m）と比較すると、その規模の大きさは際だっている。また、脇殿も東西両庇つき

で、南脇殿の17間に匹敵する長大な建物は京内では知られていない。

遺跡の性格 2回の調査によって、この遺跡が大規模な整地を行った後に形成されており、占地・規模・建物配置・時期などについてその一端を明かにすることができた。しかしながら、この遺跡の性格に関してはなお不明な点が多い。寺院、貴族の邸宅、官衙、宮などが候補として挙げられるが、建物の規模・形態、出土遺物などから前二者には無理がある。先に推定した建物配置について、北脇殿を南と同規模とし、さらに正殿の北に後殿の存在を想定してみると、宮殿遺構の典型とされる飛鳥稻淵宮殿遺跡のそれと極めて類似した形態となる。コ字形の建物群は政治的な場としての機能が考えられるが、雷丘北方遺跡の場合少なくとも二坪を占地しており、建物群の後方にかなりの空間があるため、ここに生活の場を想定することもできる。このような想定を重ねれば、宮としての性格づけも不可能ではない。しかし、現段階では調査面積もごく一部に過ぎず、その性格解明には今後の継続的な調査が必要である。



雷丘北方遺跡復原図 (1 : 2000)

4、右京一条一坊の調査（第65次調査）

（平成三年二月～三月）

この調査は大型店舗建設に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行なったものである。調査地は右京一条一坊南西坪にあたり、第60次調査（『概報20』）として発掘調査を既に行なっているが、店舗設計変更のため今回は第60次調査区のすぐ南で調査を実施した。第60次調査では一条々間路、北西坪で井戸、南西坪で建物・土坑を確認している。今回は南西坪の宅地内部の様相を探るため東西2ヶ所の調査区を設定した。東調査区は第60次調査区の東に東西6m・南北21m、西調査区は第60次調査区の南に一部重複して東西24m・南北38mである。調査総面積は1110m²となる。

調査区の層序は上から盛土・耕土・暗青灰色粘土（床土）・灰茶色粘質土・灰茶色微砂である。遺構検出は地表面下1.6mの灰茶色微砂上面で行った。

遺構

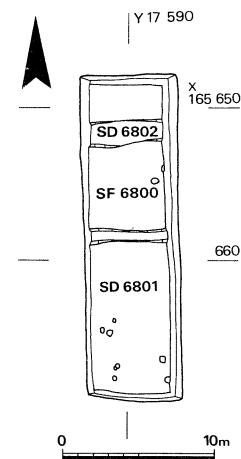
東区 検出した遺構には一条々間路SF6800とその両側溝・小穴がある。

SF6800は第60次調査で検出した条間路の延長上にあたり、路面幅5.6m、側溝心々距離6.8mである。北側溝SD6802は幅1.5m、深さ0.2m、南側溝SD6801は幅1.2m、深さ0.3mで、いずれも素掘溝である。側溝からは多量の藤原宮期の土器が出土し、「郡」と記した墨書き土器が含まれる。

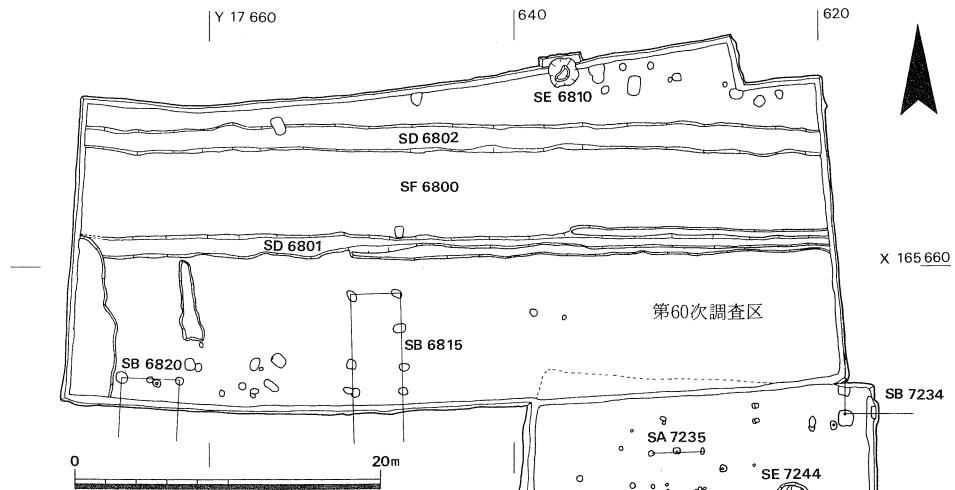
西区 検出した遺構には、7世紀から8世紀前半にかけての建物・塀・井戸・土坑のほか、中世の土坑・東西南北に掘られた小溝があり、7世紀から8世紀前半にかけての遺構は藤原宮期とその直前のものにわけられる。

〈藤原宮期の遺構〉 この時期に属する遺構として建物4棟・塀1条・井戸3基・土坑5基がある。

SB7230は3間×2間の南北棟建物である。桁行7尺・梁行6.5尺で、一辺0.6mの柱掘方である。柱穴のほとんどに礎盤を残している。柱穴から飛鳥Vの土器が出土している。



第65次調査東調査区
遺構実測図（1:500）



SB7231は4間×2間の南北棟建物である。桁行6尺・梁行5尺、一辺0.4mの柱掘方である。方位はやや西に振れる。柱穴から飛鳥Vの土器が出土している。

SB7232はSB7231と柱筋を揃え、やや北で西に振れる建物である。西半が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、2間以上×2間の東西棟建物である。桁行10尺・

梁行7尺で、径0.6mの柱掘方である。柱穴から飛鳥Vの土器が出土している。

SB7234は調査区北東隅で検出した3個の柱穴で、建物の南西隅と考えられる。柱穴は一辺1.0mと大型の掘方であるが第60次調査では確認できず、建物の規模は不明である。遺物の出土はなかったが、藤原宮期の建物と思われる。

SA7235は東西2間の柵列で、柱間は11尺等間隔である。

SE7237は掘方径約3.2mのほぼ円形の井戸である。深さ1.7mで本来は木枠組と考えられるが抜き取られており、一部に裏込の礫が残っていた。埋土は、上から暗灰茶色粘質土・暗灰褐色粘質土・暗灰色粘土である。埋土から飛鳥Vの土

器と共に、墨書き土器・転用硯（杯）・漆の付着した杯・鞴羽口・砥石・刀子が、また裏込から藤原宮式軒平瓦（6641-Ab・E・F）が出土している。

SE7243は掘方外径約3.2mのほぼ円形の井戸である。掘り直しがあり、当初は深さ1.1mであったが、後にやや南東にずらし、深さ1.5mまで掘削している。埋土は上から暗灰褐色粘土・灰色粘土・淡青灰色砂・暗青灰色砂質粘土である。ここから飛鳥V～平城IIの土器と共に、「御」「十」などと記された墨書き土器・鞴羽口・土馬が出土している。

SE7244は掘方外径は南北3m・東西2.7mのやや南北に長い円形で、深さ1.2mの井戸である。本来の木組の井戸枠を一部改修し、逆にL字形に板をたてならべている。埋土は上から炭混じり褐色土・黄褐色土・灰色粘土・青灰色粘質土である。飛鳥V～平城IIの土器と共に、転用硯（杯）・漆の付着した壺・土馬が出土した。

SK7236は南北1.4m・東西1.2mの隅丸の長方形の土坑で、深さ0.6mである。埋土は淡青灰色砂質土で飛鳥Vの土器と共に墨書き土器が出土している。

SK7238は一辺0.8mの方形の土坑である。深さ0.2mで埋土は灰褐色粘土である。飛鳥Vの土器が出土した。

SK7239は径0.9mの円形の土坑である。深さ0.3mで埋土は灰色粘土である。

SK7242は長径1.2m・短径0.8mの橢円形を呈する土坑である。深さ0.2m、埋土は黄褐色粘土で飛鳥Vの土器が出土している。

SK7247は調査区南東隅の壁面で検出した土坑である。規模・形態は不明であるが、深さ0.3mで埋土は炭混じり黒灰色粘質土である。

〈藤原宮期直前の遺構〉 建物2棟・土坑1基がある。

SB7233は2間×2間の南北棟建物である。南側柱に2つの柱穴の重複があり、2度の建て替えか、設計変更があったと考えられる。柱穴は径0.3mと小規模で、柱穴から飛鳥IVの土器が出土している。

SB7245は1間×2間の南北棟建物である。桁行10尺・梁行4.5尺で、柱掘方は径0.3mの小規模な柱穴である。北でやや東に振れる。埋土や柱掘方がSB7233と類似することから藤原宮直前の時期と思われる。

SK7240は南北5.0m・東西3.7~4.4mの台形を呈する大土坑である。深さ0.4mで埋土は灰色粘土が堆積する。ここから飛鳥IVの土器と共に漆の付着した杯・鞴羽口・鋳型が出土している。

〈中世の遺構〉 土坑1基と東西・南北に掘られた小溝がある。

SK7241は南北1.0m・東西0.8mの長方形の土坑である。深さ0.3mで埋土は暗灰色粘土・黄灰色砂質粘土である。遺物の出土はなかったが、小溝より新しいことから中世の遺構と思われる。

遺 物

今回の調査で出土した遺物は、藤原宮期の土器・墨書土器・硯・漆付着土器・鞴羽口・銅滓付坩堝・銅製品・銅滓・鋳型・砥石・水晶・土馬・埴輪・瓦(6647-C・E)がある。

まとめ

第60次調査と今回の調査によって右京一条一坊南西坪の約十分の一を調査することができた。前回の調査と併せて確認した建物は藤原宮直前のものを含めても8棟と少なく、SB7234以外は規模も小規模なものである。それにも拘らず、井戸は今回の調査で3基確認され、そのいくつかは改修の痕跡が見られる。京内の他の調査で確認されている四町・一町規模の宅地の場合でも、井戸は1~2基程度であり、当坪における井戸の検出数は他に比べて多いといえよう。藤原京では宅地を四町から四分の一町の範囲で与えられていることが知られているが、小規模な建物にもかかわらず井戸が多いことは、宅地班給面積が小さく、それぞれの宅地ごとに井戸を設けていたか、なんらかの理由によって井戸を掘り直さなければならなかつたものであろう。

遺物の中では、鞴羽口・銅滓付坩堝・銅製品・銅滓・鋳型・砥石のほかに漆付着土器の出土が注目される。第60次調査でも鞴羽口・銅滓・坩堝などが出土地しておおり、付近に銅製品の工房に関わる施設の存在が推定される。

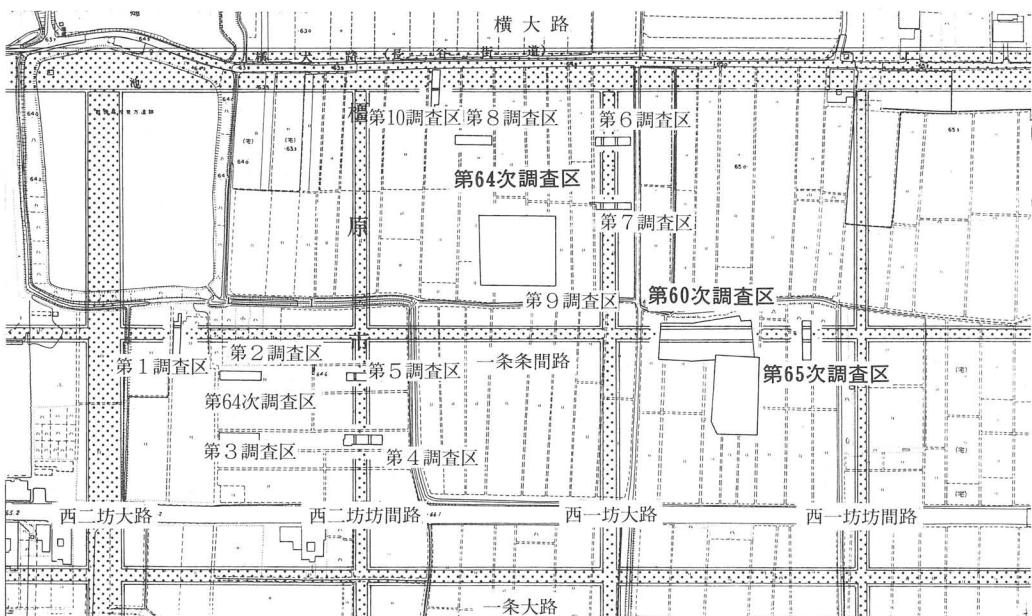
このように、小規模建物・井戸の多さ・工房に関わる遺物の存在などは隣接する第64次調査(本概報)でも見られ、藤原宮北方の横大路沿いにはこのような宅地利用がみられたのかもしれない。周辺地域での今後の調査を見守りたい。

5、右京一条二坊の調査（第64次）

（平成二年十一月～三年四月）

この調査は、樅原市醍醐町において実施した土地区画整理事業に伴う事前調査である。調査地は藤原京右京一条二坊に当り、その西南・東北両坪の大半と西北・東南両坪の一部に及ぶ。これまでこの坊を含めて藤原京の北辺地域においては大規模な発掘調査が少なく、本調査によって藤原京の北辺地域の状況と、藤原京の北辺を限ると推定されている古代の官道横大路に関する資料を得ることができるものと期待された。

土地区画整理事業地のうち今回発掘調査の対象となったのは、宅地の区域を除く道路敷および公園予定地だけで、上記の目的を果たすために、道路敷および公園予定地部分に10箇の調査区を分散して設けた（以下では、10箇の調査区を調査開始の順に従って第1～第10調査区と呼ぶ）。そのうち、第1～第5の調査区は、右京一条二坊西南坪を中心にして一部西北・東南両坪に及ぶように、第6～第10の調査区は、東北坪と一部右京一条一坊西北坪に亘って設定した。西南坪を中心とした5つの調査区のうち、第1調査区は一条々間路、第4・5両調査区は二坊々間路の検出をそれぞれ主たる目的とし、また第2・3両調査区は西



第64次調査発掘区位置図 (1 : 4000)

南坪の中心付近の状況を把握することを目指した。一方東北坪に設けた5つの調査区のうち、第6・7両調査区は西一坊大路、第10調査区は横大路の検出をそれぞれ目的とし、また第8・9両調査区は東北坪の中心付近の状況を把握することを目的とした。調査面積は併せて2600m²である。

層序は各調査区で異なるが、いずれにおいても概ね耕土・床土及び1、2層の包含層を除去すると藤原宮期の遺構面に達する。遺構面は現地表からおよそ0.5~0.7mの深さにある。

検出した遺構には、条坊道路とその側溝・掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・土坑などがあり、概ねこれらの遺構は7世紀後半から藤原宮期に属する。遺構については、個々の調査区毎に個別に取り上げるのではなく、便宜上条坊関連遺構と右京一条二坊に属する西南・西北・東南・東北の4坪、右京一条一坊の西北坪に分けて述べ、また一部で検出した奈良時代の遺構などは、各々上記各項目の関連箇所において述べることとする。

遺 構

(1) 条坊関連遺構

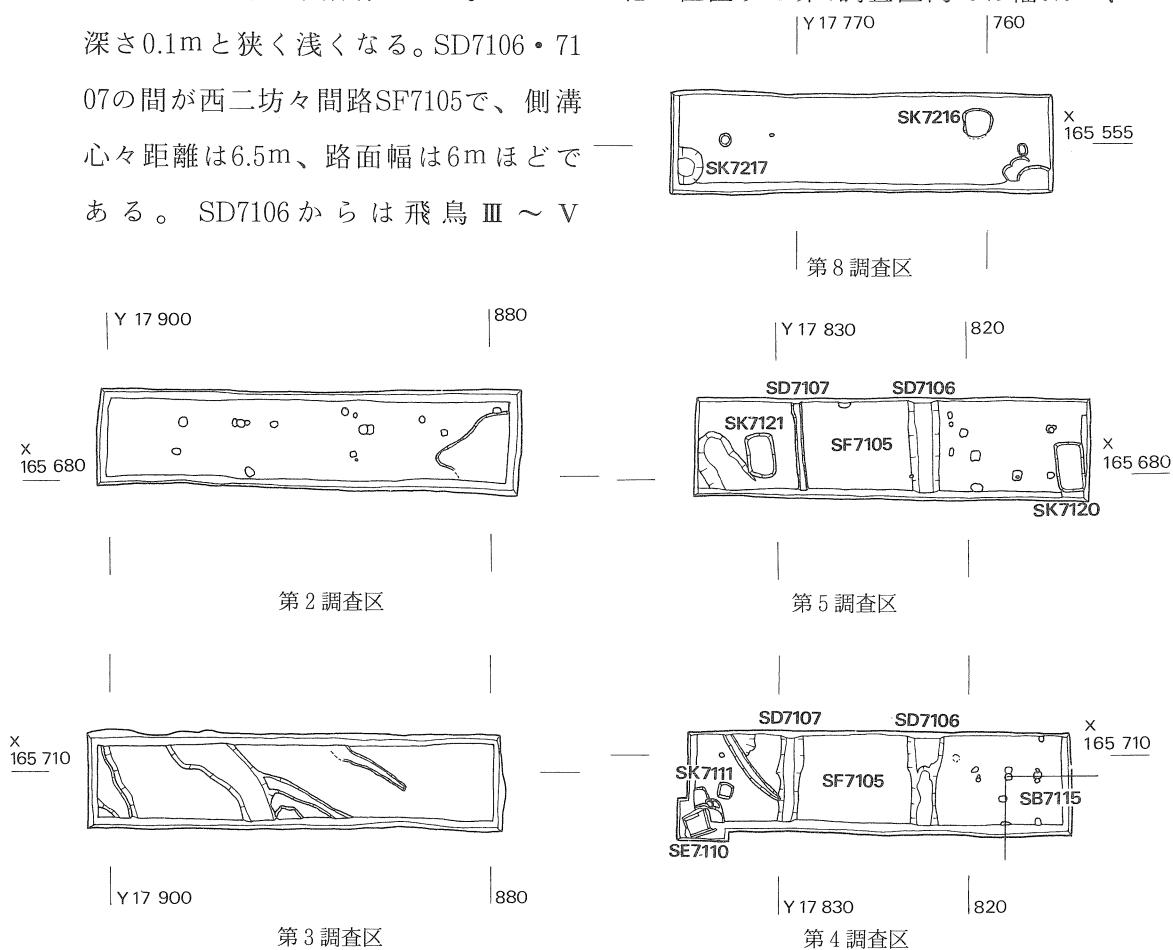
藤原京の条坊に関連した遺構としては、横大路とその南側溝、西一坊大路とその東西両側溝、西二坊々間路とその東西両側溝、一条々間路とその北側溝を検出した。

横大路SF7220とその南側溝SD7221は第10調査区で検出した。SD7221は幅1.1m、深0.35mの素掘の東西溝で、飛鳥Vの土器少量を出土した。第10調査区では、SD7221以北に顕著な遺構がないのに対して、以南に黄色粘質土と灰褐色砂質土とを交互に積んだ厚さ0.2mの整地土SX7225が南北9.4mの幅で広がっていることを確認した。まずSD7221以北に顕著な遺構が見られないのは、これより北が横大路の路面敷で、SD7221が南側溝に当ることを示唆する。一方第10調査区内で北側溝に当る溝を検出していないことから、横大路の路面は調査区外北方に及び、路面幅は10m以上と推定することができる。またSD7221以南で検出した整地土については、性格が明かではないが、如上のように横大路南側溝SD7221以北に及ばず、また第10調査区南辺以南に広がらないことから、右

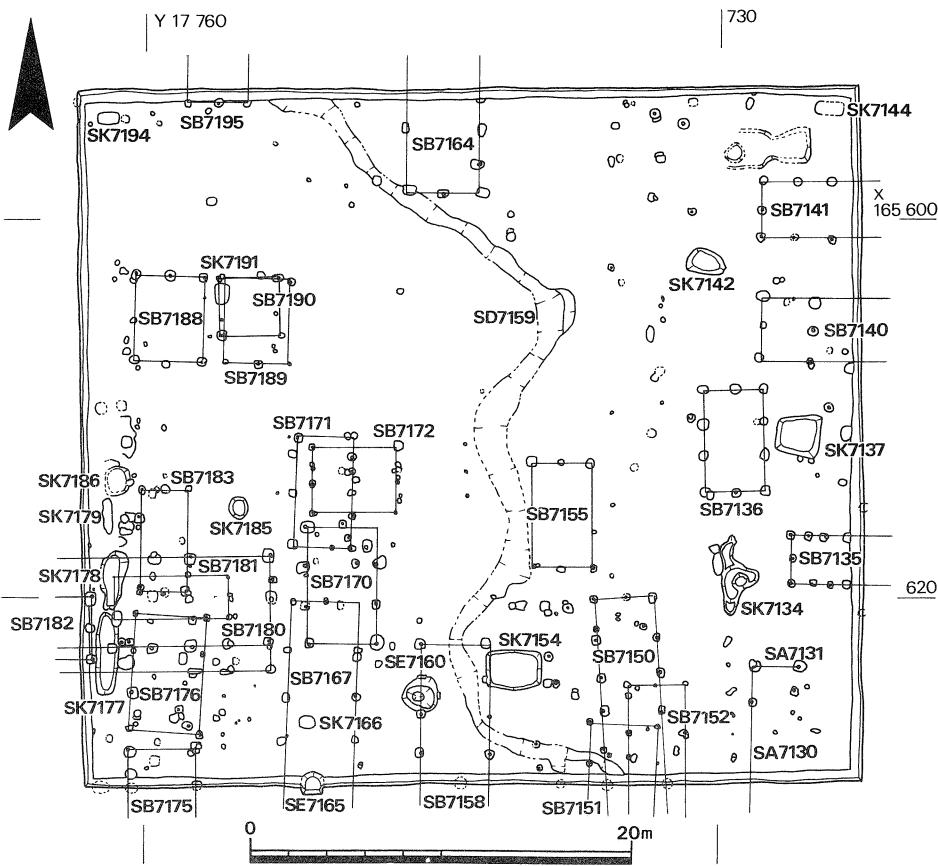
京一条二坊東北坪の北辺を限る何等かの施設に関わる地業である可能性を想定することもできる。

西一坊大路SF7200とその東西両側溝SD7201・7202は、第6・7両調査区で検出した。両調査区ともに後代の溝等で著しく削平され、西一坊大路とその東西両側溝の規模や状況を十分に明かにすることはできなかったが、現状で東側溝SD7201が幅0.9m、深さ0.3m、西側溝SD7202が幅0.9m、深さ0.1mの、それぞれ南北素掘溝で、両溝の間が西一坊大路SF7200の路面敷である。側溝心々距離は8m、路面幅は約8.5mである。いずれの溝も飛鳥Vの土器を出土した。

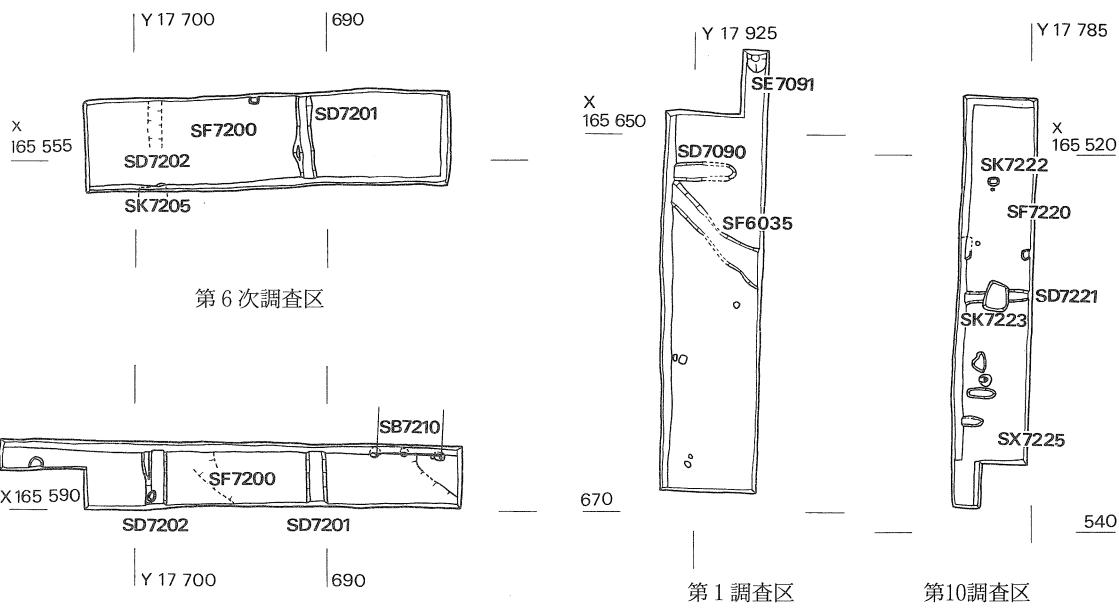
西二坊々間路SF7105とその東西両側溝SD7106・7107は、第4・5両調査区で検出した。東側溝SD7106は幅1.5m、深さ0.5m、西側溝SD7107は幅1.1m、深さ0.3mの、共に南北素掘溝である。SD7107は北に位置する第5調査区内では幅0.5m、深さ0.1mと狭く浅くなる。SD7106・7107の間が西二坊々間路SF7105で、側溝心々距離は6.5m、路面幅は6mほどである。SD7106からは飛鳥III～V



第64次調査遺構実測図 (1 : 400)



第9調査区



第7調査区

第64次調査遺構実測図 (1 : 400)

の土器、SD7107からは飛鳥Vの土器がそれぞれ出土した。

一条々間路SF6035とその北側溝SD7090は、第1調査区で検出した。SD7090は幅1m、深さ0.3mの東西素掘溝で、調査区中央で急激に浅くなって消滅し、東へは延びない。この溝から飛鳥IV～Vの土器が出土した。SD7090は第56次調査で検出した一条々間路北側溝のほぼ西延長上にあり、一条々間路の北側溝と推定される。これに対して当調査区内では南側溝に相当する溝を検出することができなかった。従って一条々間路の規模は当調査区内では明かにし得ない。

(2) 右京一条二坊西南・西北・東南・東北各坪の遺構

右京一条二坊を構成する4つの坪の内、西南・西北・東南の3坪については、第1～5の各調査区で、また東北坪については第6～10の各調査区で調査した。

①西南坪の遺構 西南坪では井戸1基、土坑2基を検出した。

第4調査区の西南端で検出した井戸SE7110は、縦桟横板組の井戸枠1段分が残存し、北で西に振れる方位をもつ。井戸枠は一辺が1.2mある。掘方および井戸枠の西南隅部分が調査区外に及ぶため、一部拡張して遺構検出を行ったが、掘方は拡張区内で収まらず、井戸枠のみ規模を確認した。底までの深さは0.8mで、埋土には斎串などの木製品や飛鳥Vの土器、瓦などが含まれていた。土坑は第4・5両調査区でSK7111とSK7121の2基を検出した。SK7111は一辺0.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.5mある。またSK7121は東西1.5m、南北2.5mの長方形の土坑で、深さは0.3mである。埋土からは奈良時代に属する土器が出土した。

なお西南坪の北半の中央部に設けた第2・3両調査区では、わずかに小穴が数個検出されたのみで、他に藤原宮期に属する遺構を認めることができなかった。

②西北坪の遺構 西北坪自体第1調査区の北端に僅かに一部がかかるだけであったために、西北坪で検出した遺構は井戸1基のみである。

第1調査区で北へ拡張して検出した西北坪内の井戸SE7091は、北端が調査区外北方へ延びるため、規模は判明しないが、現状で東西1m、南北0.9m以上の長円形を呈する。深さは1.1mで、埋土には飛鳥IIIの土器が含まれていた。

③東南坪の遺構 東南坪には掘立柱建物1棟、土坑1基と多数の穴がある。

第4調査区の東端で検出した掘立柱建物SB7115は、南北3間以上、東西2間以

上で、棟の方向は明かではない。柱間寸法は、南北の柱間が1.4m、東西の柱間が1.5mである。第4・5両調査区ではこの他に内部に小穴を有する穴を多数検出した。これらの穴は柱穴で、内部の小穴は柱痕跡と推定されるが、調査区内で建物としてまとまるものはない。土坑SK7120は第5調査区の東端で検出した、長方形の平面を呈する土坑で、東西1.3m、南北2.8m、深さ0.3mある。年代を推定するに足る遺物は出土しなかったが、埋土が第5調査区の西端近くで検出した西南坪内の土坑SK7121と同じことから、ほぼ同じ時期、即ち奈良時代に属すと思われる。

④東北坪の遺構 東北坪内で検出した主な遺構には、掘立柱建物・掘立柱塀・道路・溝・井戸・土坑、などがある。これらの遺構の大半を検出したのは、坪の南半中央部に設けた第9調査区においてである。掘立柱建物・掘立柱塀は各々24棟と2条で、棟方向・規模・柱間寸法などについては表1に掲げた通りであり、詳細はそれに譲ることとする。これらの建物や塀は柱穴の重複関係や棟方向、あるいは柱筋などの点から、少なくとも3つの群に分けて考えることができる。即ち第一は、棟方向がほぼ北を向いた建物群で、検出した大多数の建物がこれに属する。しかしこれらの建物には重複関係のあるものがあり（SB7151とSB7152、SB7171とSB7172、SB7181とSB7183）、少なくとも二時期に亘ると推定される。また第二は棟方向が北でやや西に振れる一群の建物（SB7150・SB7170・SB7180）である。ただしこれらの建物も全く同じ振れをもつわけではない。第三は棟方向が北でやや東に振れる一群の建物（SB7135・7167・7171・7176・7188・7189、SA7130・7131）である。この内SB7189は第一群に属するSB7190と柱穴に重複関係があり、それより新しい。以上のように掘立柱建物・掘立柱塀は、重複関係や棟方向などの点から四時期以上に亘って建てられたものであることが分る。しかし第9調査区東辺で検出したSB7136・7140・7141の3棟が柱筋を揃えるなどやや計画的な配置をとる以外に必ずしも整然とした建物配置をとっていない。

井戸は第9調査区で2基を検出した。SE7165は第9調査区の南辺で検出したほぼ円形の平面を呈する素掘の井戸で、掘方は東西1.3m、南北1.3m以上ある。深さは1.1mで、埋土からは飛鳥IVの土器が出土した。またSE7160は第9調査区

の南辺中央付近で検出した井戸である。井戸枠が抜き取られていたために、規模は明かではないが、現状で平面は南北1.8m、東西2mの隅丸長方形を呈し、深さは1.3mである。抜き取り後の埋土には瓦や飛鳥Vの土器が含まれていた。

土坑は第6～10調査区において多数検出した。詳細は表2の通りである。検出した土坑の中で特徴のあるものについてのみ記すこととする。第9調査区の西辺で、南北に列なるSK7177・7178・7179・7186の4基の土坑を検出した。これらの土坑からは多量の土器を出土した。いずれも飛鳥Vの土器である。また第9調査区の東辺中央にあるSK7137は土取りのために掘られた土坑と思われ、底部に鋤先の痕跡が多数残っていた。埋土から飛鳥Vの土器が出土した。

なお第9調査区中央部で南北に蛇行して流れる流路SD7159は、最大幅が2mあるが、深さはわずかに0.1mほどである。堆積土は上下2層に分けられ、上層は

遺構名	棟 方 向	規模（桁行×梁間）	桂間寸法（桁行・梁間）	備 考
SB7135	東西	3間以上×2間	1.0m・1.2m	北でやや東に振れる
SB7136	南北	3間×2間	1.8m・1.8m	
SB7140	東西	1間以上×2間	2.7m・1.8m	
SB7141	東西	2間以上×2間	1.8m・1.5m	
SB7150	南北	5間以上×2間	2.1m・1.6m	やや北で西に振れる
SB7151	南北	1間以上×1間	2.1m・3.5m	
SB7152	南北	4間以上×2間	1.3m・1.5m	
SB7155	南北	3間×2間	1.8m・1.2m	
SB7158	南北	3間以上×1間	2.0m・3.6m	SE7160より新しい
SB7164	南北	3間以上×2間	1.6m・2.0m	
SB7167	南北	3間以上×2間	2.4m・1.8m	北でやや東に振れる
SB7170	南北	3間×2間	2.1m・1.8m	わずかに北で西に振れる
SB7171	南北	4間×1間	1.0m・2.5m	
SB7172	東西	2間×2間	2.1m・1.8m	
SB7175	南北	1間以上×2間	1.8m・2.1m	
SB7176	南北	3間×1間	1.9m・3.6m	やや北で東に振れる
SB7180	東西、南廂付	4間以上×2間	2.0m・2.2m	やや北で西に振れる、廂出1.4m
SB7181	東西	3間×2間	2.0m・1.1m	
SB7182	東西	? × 2間	? • 1.6m	東妻のみ検出
SB7183	南北	3間×2間	1.6m・1.2m	
SB7188	南北	1間×2間	4.5m・1.8m	やや北で東に振れる
SB7189	南北	1間×2間	4.5m・1.8m	わずかに北で東に振れる
SB7190	東西カ	1間×1間	3.0m・3.0m	
SB7195	南北	? × 2間	? • 1.6m	南妻のみ検出
SA7130	南北	2間以上	3.0m	
SA7131	東西	1間	2.4m	

表1 東北坪内の遺構

暗褐色粘質土、下層は灰褐色粗砂である。重複関係から見てSB7168をはじめいずれの掘立柱建物群よりも古いが、弥生時代後期から古墳時代の土器が極少量含まれているに過ぎず、年代の詳細は不明である。

(3) 右京一条一坊西北坪の遺構

右京一条一坊西北坪は、第6・7両調査区で遺構の検出を行い、第7調査区で掘立柱建物1棟を検出した。

掘立柱建物SB7210は恐らく南北棟建物で、その南妻と思われる東西に並ぶ3個の柱穴を検出した。西で北にやや振れる方位をもち、柱間寸法は1.6mである。

遺 物

出土した遺物には土器・瓦塼・土製品・金属製品・石製品・木製品がある。

土器は藤原宮期の須恵器・土師器が大半を占め、中には墨書や籠記号を施したもの、漆の付着したものがある。墨書土器は第9調査区のSE7165から出土したもので、土師器の大皿の底部に「百□」と墨書されている。瓦塼には藤原宮式の軒丸・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。軒瓦はいずれも藤原宮式で、軒丸瓦には6233B・6273B・6278Bの各型式があり、軒平瓦には6641F型式がある。これらの軒瓦はいずれも第9調査区の包含層から出土した。土製品には円面硯・ガ

遺構名	形 状 ・ 規 模	調査区	備 考
SK7134	不整形、南北4m、東西2.5m、深さ25cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7137	方形、南北2.3m、東西2.4m	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7142	長円形、南北1.4m、東西2.1m、深さ80cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7144	長方形、南北90、東西1.6m	第9調査区	
SK7154	長方形、南北2.2m、東西3m、深さ1.1m	第9調査区	
SK7166	方形、南北75cm、東西85cm、深さ40cm	第9調査区	
SK7177	長円形、南北4.4m、東西1.2m、深さ50cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7178	不整形、南北3.2m、東西1.3m、深さ30cm	第9調査区	
SK7179	長円形、南北2m、東西60cm、深さ25cm	第9調査区	
SK7185	円形、直径1m、深さ50cm	第9調査区	7世紀の土器出土
SK7186	方形、1辺1.5m、深さは15cm	第9調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7191	長方形、南北1.2m、東西90cm、深さ30cm	第9調査区	7世紀の土器出土
SK7194	長方形、南北60、東西1.2m、深さ20cm	第9調査区	飛鳥IV・Vの土器出土
SK7205	不整形、南北不明、東西不明、深さ不明	第6調査区	
SK7216	隅丸方形、南北1.4m、東西1.2m、深さ50cm	第8調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7217	円形、南北2m、東西1.4m、深さ60cm	第8調査区	飛鳥Vの土器出土
SK7222	方形、南北75、東西90cm、深さ25cm	第10調査区	馬骨出土
SK7223	方形、南北1.8m、東西1.4m、深さ25cm	第10調査区	

表2 東北坪の土坑

ラス坩堝・鞴羽口・土馬・有孔円盤・埴輪がある。ガラス坩堝は第9調査区のSE7165・SK7186・包含層から体部片が合計4点出土した。このうちSE7165出土のものは、内面に銀化した緑灰色のガラス質が付着しており、他のものは黄緑色である。金属製品には、銭貨・帶金具・刀子・鉄釘がある。銭貨では第5調査区の西二坊々間路東側溝SD7106から出土した富本銭1点が注目される。表面には上下に「富」「本」の2字、左右に七曜文を亀甲形に配する。「本」は「大」と「十」の合字で表現され、背面は無文である。外径は2.4cmである。SD7106は出土遺物から平城遷都時には埋められていたことが明らかで、富本銭の出土例としては最古のものとなる。石製品には砥石・石鎌が、木製品にはSE7110から出土した斎串がある。

遺物の中では富本銭とガラス坩堝が類例が少なく注目されるが、ほかに鞴羽口・砥石・漆付着土器・金属製品・鉄滓などの遺物が少量ながらも出土していることから、付近に工房関係の施設の存在が想定される。

まとめ

今回の調査において得られた成果は以下の通りである。

(1) 藤原京の条坊に関連した遺構、即ち横大路・西一坊大路・西一坊々間路・一条々間路を、概ねこれまでの調査によって得られた成果から推定された位置において検出した。就中、藤原京の北を画すると推定される横大路とその南側溝を確認したことは重要で、今後北側溝と横大路の規模や京の北辺を画する施設の有無などの確認が必要である。

(2) 右京一条二坊の東南坪および西南・西北両坪では井戸と柱穴を検出したにとどまり、これら三坪の内部の状況については十分明かにすることはできなかったが、東北坪については多数の建物などの遺構を検出し、藤原京の北辺地域においても小規模な建物が、藤原宮期を挟む数時期に亘って建て替えられていることが判明した。また出土した遺物から付近に工房関係の施設の存在が推定されるに至った点は、藤原京の北辺地域の性格を考える上で重要である。



SD7106出土 銭貨（1：1）

6、右京二条一坊の調査（第66－8次）

（平成三年八月～九月）

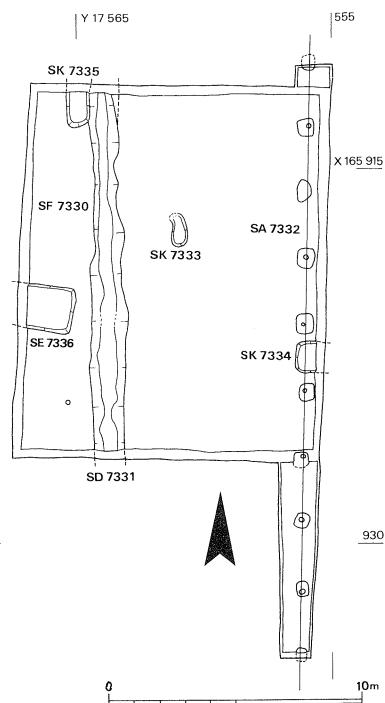
この調査は資材置場建設に伴う事前調査として、橿原市醍醐町で行ったものである。調査地は、藤原京右京二条一坊東南坪にあたり、調査地の西北方には二条々間路と西一坊々間路の交差点の存在が想定されている。当初は東西12m、南北15mの調査区を設定し調査を行ったが、その後一部拡張を行ったため、調査面積は192m²となった。調査地の現況は畠地で、層序は、耕土・床土（茶灰色粘質土）の下が、南半では茶灰色砂質土、北半では灰褐色砂礫となり、地表下0.3m前後にある両層の上面で遺構を検出した。

検出した遺構は、藤原宮期の遺構として、西一坊々間路SF7330及び東側溝SD7331、掘立柱の南北塀SA7332、土坑SK7333、藤原京より後出のものとして土坑SK7334・7335、中世の小溝、現代の野戸SE7336などである。

西一坊々間路SF7330は、路面幅の3m分を検出したのみで、西側溝は現市道下となる。

東側溝SD7331は幅1～1.2m、深さ0.25m前後の素掘溝で、堆積土からは飛鳥Ⅲ～Vの土器が少量出土した。南北塀SA7332は東側溝心から東へ7.6mの位置にあり、9間分、23.7mを検出したが、柱間は不揃いである。東南坪の西を限る施設と考えられる。土坑SK7333は浅い土坑である。土坑SK7334・7335は隅丸方形の平面形をなし、深さは0.65～1mである。

この調査では西一坊々間路と坪を限る塀を確認したが、東側溝と塀の間は、従来の知見よりも広く、この間が藤原宮のように墳地として利用されていた可能性が残る。この問題については、類例の増加を待って検討したい。



第66－8次調査遺構実測図（1：300）

7、右京二条二坊の調査（第66－5次）

(平成三年六月～七月)

共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は醍醐の集落の西、国道165号線橿原バイパスと西日本旅客鉄道桜井線に挟まれた地で、東隣は長谷田土壇のある田である。藤原京二条二坊西北坪と西南坪に当る。

調査地の層序は、地表から順に約1.5mの近年の盛土・耕土・床土・黒褐色粘質土の遺構面となり、旧地表から約0.4mで遺構面に達する。

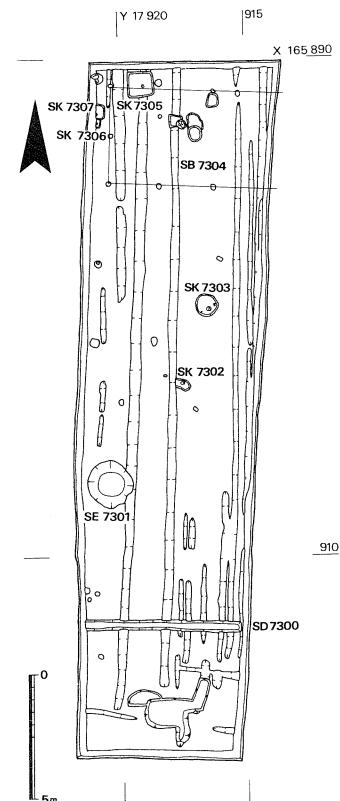
検出した主な遺構は、東西溝・井戸1基・掘立柱建物1棟・土坑2基である。

東西溝SD7300はほぼ二条々間路南側溝と推定される位置にあるが、その心が国土座標のX= -165912.7の位置にあり、第54-23次・60-19次の調査の成果 X= -165913.5と比較すると0.8m北へ寄る。第54-23次西調査区と繋ぐと46分から49分西で北へ振れていることになり、SD7300を二条々間路南側溝と断定することはなお検討を要す。北側溝は検出されなかった。

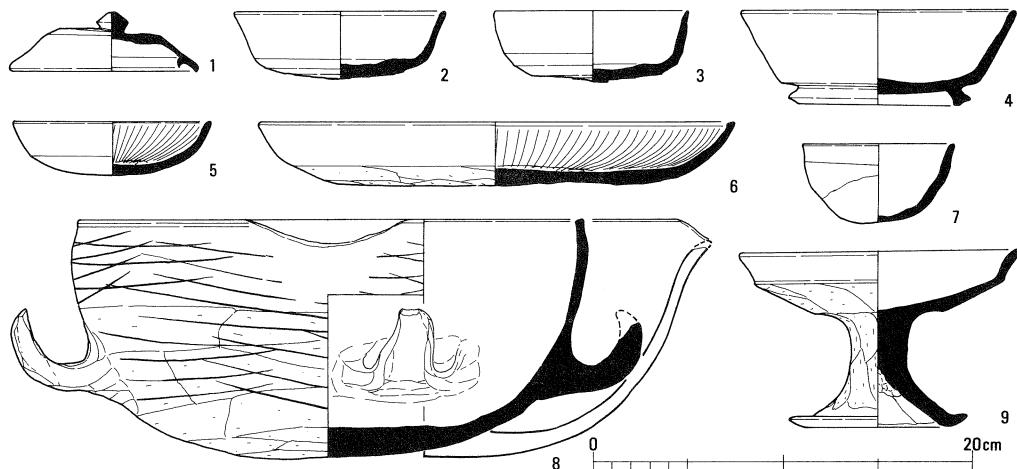
井戸SE7301は径1.8m、深さ2m余りの円形の掘方を持ち、井戸枠は抜き取られていた。埋土から瓦器が出土したので十二世紀前半に属する。井戸中より呪符と覚しき木簡が一点出土した。

掘立柱建物SB7304は調査区北端にあり、南北2間、東西3間以上、柱掘方は径0.2mとごく小さい。

土坑の内、SK7303は径が0.9mのほぼ円形で、深さは0.5m、中に完形の土師器・須恵器11点以上が含まれていた(45頁図参照)。いずれも7世紀後半代に属する。SK7302は東西0.6m、南北0.4mの楕円形平面で深さは0.2m、人頭大の石の下に土師器の甕等を据えていた。藤原宮期に属するかと考えられる。



第66-5次調査遺構実測図
(1 : 300)



SK7303出土土器実測図（1：4）

調査区北側の第42次の調査でも藤原宮期の遺構の密度は低く、今回も同様の傾向を示している。

8、右京十条四坊の調査（第66－6次）

（平成三年七月～八月）

この調査は、関西電力が橿原市栄和町字柳田に計画した配電用変電所新設に伴う事前調査である。当該地については、平成元年五月から六月に発掘調査を行なっている（第60－3次調査、『概報20』）が、その後、周辺にマンションが建設されたことにより建設位置等の変更が必要となり、今回の調査はそれによって生じた未調査部分について行なったものである。第60－3次では、十条々間路想定位置で道路遺構は検出されなかったものの、藤原宮期の掘立柱塀と井戸・掘立柱建物などを検出し、調査区南端で古墳時代流路、下層で厚い砂に覆われた弥生時代後期とみられる水田遺構を検出している。また、平成二年に橿原考古学研究所が実施した隣接地の東北坪における調査では、藤原宮期の掘立柱建物と、それに先行し藤原京の地割と大きく異なる方位に建てられた掘立柱建物や掘立柱列を検出している。

遺 構

今回の調査では、先行する調査で明らかになった諸点、即ち藤原京右京十条

四坊東南坪内の藤原宮期の遺構、古墳時代流路、そして下層の弥生時代の水田について新たな知見を得ることを目的とした。

調査地の基本的な層序は、上から水田耕作土・床土・青灰色粘質微砂・暗灰色微砂質粘土であり、床土下面では南端を除き青灰色粘質微砂をえぐる

ように灰色細砂あるいは褐色粗砂がほぼ全域に広がっている。この砂層は前回の調査成果から、古墳時代流路SD2411の堆積層にあたり、青灰色粘質微砂層と暗灰色微砂質粘土層は弥生時代の水田面であることが確認されている。遺構は砂層面（旧水田面下45cm）で検出し、その後古墳時代の遺構である流路の確認調査を行なった。

砂層面で検出した遺構には、掘立柱建物SB2720・素掘溝SD2725のほか、小規模な柱穴や土坑がある。

掘立柱建物SB2720は、真北に対して北で西に30°近く振れる方位の柱筋をもつ1間以上×2間以上の建物で、棟の方向は明かでない。柱掘方は一辺1~1.2mの不整形な方形で、深さは約0.4mである。南北素掘溝SD2725よりも古く7世紀中頃の遺構と考えられる。素掘溝SD2725は幅0.6m、深さ0.1mの南北溝で、暗灰色粘質土の埋土から7世紀後半の土器が少量出土した。極めて浅くしか遺存しないために第60-3次調査区では確認していない。

このほか調査区東半には、暗灰色粘土を埋土とする小規模な柱穴がいくつかみられる。周辺には藤原宮期前後の土器が見られることから同期の建物である可能性があるが、建物にまとまらない。

古墳時代の流路SD2411は、前回の調査でその北肩が確認されている。今回

の調査区はほぼ全域が流路の中にあり、部分的な調査にとどめた。流路は幅約9~11m、深さ1.5mで、堆積層の違いから、徐々に浅く狭くなる4時期以上の流れがあることがわかる。最下層の流れに古墳時代初めの壺形土器が含まれ、他の流れにも少量の弥生土器と古墳時代前半の土器が含まれる。また、最上層の流れに幅20cm、長さ90cmの板材が埋没していた。流路は北西へ流れている。

下層遺構である弥生時代の水田については、古墳時代流路で削り残された調査区の南端でその存在を確認した。南に広がっていることは明かであるが、調査可能な面積が狭く、畦・水路などは検討はできなかった。

まとめ

藤原宮期の遺構については前回の調査で確認した東西塀SA2400の南に柱穴等は検出されず、SA2400が坪の外周を画する塀である可能性が高くなった。しかし、坪内では明確な建物は検出されず、その利用形態は明かでない。

藤原京条坊に先行する建物については、今次調査地の北西部において、橿原考古学研究所が平成二年四月から七月にかけて行なった調査で同じ傾きをもつ建物と柱列を検出している。また、前回の第60-3次調査区の東端でも、同様の傾きをもった柱掘方を検出しており、今回検出した建物SB2720もそれらと一緒にをなす遺構とみられ、その時期は橿原考古学研究所の調査では7世紀中頃とされる。今回の成果からは7世紀後半以前であることが確認されるので、同時期としても矛盾はない。遺構群は東西幅約80m以上の広がりをもつことになる。

その場合、藤原京西京極大路として踏襲される下つ道が真北に近い方位で施工されていることは、7世紀初めとも言われている下つ道の施工を7世紀後半以降と考えるべきであるのか、あるいは同時期に方位の異なる建物群が営まれたと理解すべきなのであろうか。また、同様に真北に近い方位で造営されている飛鳥地域の7世紀代の遺構群といかに関わるのであろうか。以上の諸点は、この時期に都市的空間として成立しつつあると理解される飛鳥地域とその周辺地域を理解する上で、重要な課題である。

9、右京七条一坊の調査（第63－12次）

（平成二年十二月～三年二月）

この調査は、橿原市高殿町の西南部に計画された橿原市の分譲宅地造成に伴う事前調査の第3次目の調査で、第62次調査（『概報21』）の西、第63次調査（本概報）の南に位置する。

調査地の層序は、上から耕土・床土・青灰色粘土・暗灰褐色砂質土あるいは黄褐色粘質土・暗灰色砂あるいは暗褐色粘土である。調査区の東北部～中央部にかけての砂層は、第62次調査区西南部から延びる自然流路であり、幅50余mの規模で東南から西北方向に横断していることになる。流路の西の暗褐色粘土は、弥生時代中期から後期の遺物を含む堆積層で、その上の暗灰褐色・黄褐色粘質土は藤原宮期の整地土とみられる。

遺構

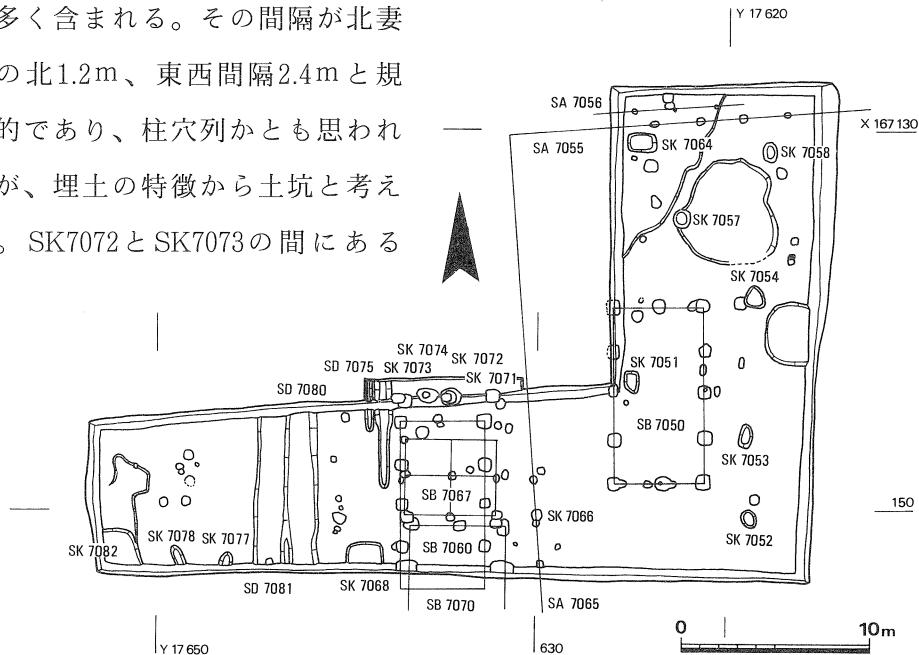
遺構は青灰色粘土の下面、すなわち藤原宮期の整地土面で検出し、主な遺構には南北素掘溝3条、掘立柱建物3棟、掘立柱塀3条、土坑11基がある。

掘立柱建物SB7050は調査区東寄りの南北棟で、南北4間（柱間2.4m等間）、東西2間（2.4m等間）である。一辺約0.6m、深さ0.6mの柱掘方に直径15cmの柱痕跡がある。建物は北で西へ僅かに振れる方位を持ち、柱間数・柱間寸法・柱掘方の規模は、第62次調査区の南北棟建物SB6485と酷似している。**掘立柱建物SB7060**はSB7050の西側柱列の西6.7mに東側柱列を置く東西2間、南北4間以上の南北棟で、SB7050と同様に北で西へ僅かに振れている。柱穴は一辺0.6mの方形で、深さ0.5m分が遺存する。柱間は桁行梁行とともに2.2m等間、南妻柱列は調査区の南外方にでる。**掘立柱建物SB7070**はSB7060の南に重複する南北棟建物で、北の1間分のみを検出した。柱穴は一辺0.6～1.2m、深さ0.5mの不整形で、埋土は上半部が円礫を含む青灰色粘土、下半部が暗灰色粘土であって、上半部が柱抜取り穴であるかも知れない。柱間は梁行・桁行とともに2.4m等間である。藤原宮期のSB7060より古く、藤原宮期あるいはその直前期の遺構と考えられる。なお、これらと重複する小円形柱穴群はSB7060より古い時期の南北棟

あるいは総柱建物SB6067としてまとまるとも考えられるが、確定的でない。

掘立柱東西塀SA7055、南北塀SA7065はともに、一辺0.3mと小規模な柱穴で、柱間は2.4m等間で、第62次調査のSA6486やSB6475などと同じく北で約4度西に振れる方位であり、同時期と考えて良ければ藤原宮造営以前の7世紀代に位置付けられる。なお、SA7055の北の掘立柱塀SA7056はSA7055と同様の方位にある2間以上（2.1m等間）の東西塀であるが、小円形の柱掘方を持つことからすれば藤原宮期以降の塀であろう。

建物SB7050の東には不整形な土坑が南北に並び（SK7052・7053・7054）、北にも2基の土坑（SK7057・7058）が点在する。SB7050内の土坑SK7051とともに土坑暗灰褐色粘土の埋土で藤原宮期の土器と木質物が含まれている。SB7060の北妻柱列の北1.2mにも土坑SK7071・7072・7073が東西に等間隔に並ぶ。土坑の埋土は共通しており、漏斗形に開く上半部には木質層を間層として青灰色粘土と砂の互層がレンズ状に堆積し、垂直近くに掘り込まれた下半部には暗灰色粘土と粗砂の互層が水平堆積する。底までの深さは0.6～0.9mである。埋土下層から藤原宮期の土器が少量出土し、上層の木質層には木簡とその削り屑が多く含まれる。その間隔が北妻柱の北1.2m、東西間隔2.4mと規則的であり、柱穴列かとも思われたが、埋土の特徴から土坑と考える。SK7072とSK7073の間にある



第63-12次調査遺構実測図 (1 : 400)

土坑SK7074は、楕円形の浅い擂鉢状で、青灰色粘質土で埋められている点で他と異なるが、これにも削り屑状の木質層があり、他の土坑と同様の目的で掘られたと考えられる。

建物SB7060の西にある南北溝SD7075は幅1.0m、深さ0.3mの素掘溝で、調査区中程から南では痕跡的になって途切れてしまう。底に灰色細砂が堆積し、暗茶褐色砂質土で埋められている。飛鳥II～Vの少量の土器と木質物が出土した。この溝は北側の第63次調査区の南北溝SD6918と位置及び堆積土が一致し、それに連なる溝であり、そこでは東西溝SD6510より新しい。

南北溝SD7080はその西の南北溝SD7081の東肩を壊して掘られた素掘溝で、幅1.8m、深さ0.3mである。暗褐色粘質砂土の埋土には7世紀前半の土器とともに藤原宮期の土器が少量含まれる。第63次調査区の南北溝SD6919に連なり、東西溝SD6510より新しい。建物SB7060やSB7050と同一方位をとり、この溝の西には柱穴がないことからすれば、西北坪内を区分する溝と考えられる。南北溝SD7081については第63次調査区では確認していないが、きわめて浅くしか遺存しないことから、同調査区では削平されてしまったものとみることができ、今次調査区で併走する事から、SD7080の前身遺構にあたると考えておく。

調査区西端に広がる土坑SK7082と調査区南に点在する小規模な土坑SK7077・7078・7068はともに、炭化物を含む黄褐色粘土を埋土とする深い土坑で、藤原宮期の土器と藤原宮式の瓦片が少量出土した。炭化物を含む土坑は、東方の第62次調査区の南半部にも多数存在し、それらとの関連が想定される。

遺 物

瓦類、土器・土製品、金属製品、木製品がある。瓦類は土坑SK7068から軒丸瓦6274Abが出土したほか、整地土などに少量含まれる。ほとんどが日高山瓦窯で作られた藤原宮所用のものである。なお、瓦窯の壁と考えられる焼土が数点みられることから、これらの瓦類は坪内の建物所用ではなく、瓦窯からもたらされた流入物を見ることが出来る。土器では南北溝SD7080等出土の7世紀前半と藤原宮期の土師器・須恵器の他、下層の暗褐色粘土や暗灰色砂層に含まれる弥生土器・古式土師器が少量ある。藤原宮期以前の7世紀前半代の土器の

出自については藤原京域の開発の開始と関わって興味深い。土製品には円面硯があり、ほかに須恵器杯蓋の転用硯がある。転用硯と灯明皿に利用された土器が多いことはこの坪の特徴である。また文字は判読できないが須恵器杯の底部に墨書がある。金属製品では弥生～古墳時代初頭の流路出土の銅鏃が珍しい。

木簡は、SK7071・7072・7073などの土坑から約725点出土したが、大半は削り屑（708点）であり、断片的である。釈読できる文字には「戸主」「戸廿四」「少女」「疾」「長十五丈」「大初位」「□地損破 板屋一間」「伴マ」などがあり、帳簿状の用例に多い板材を横方向に使ったものがある。第62次調査の井戸SE6495から出土した「年六十三」と共に、京内出土木簡としては特異な内容を含んでいる点はこの坪の性格を示唆するものとして注目される。

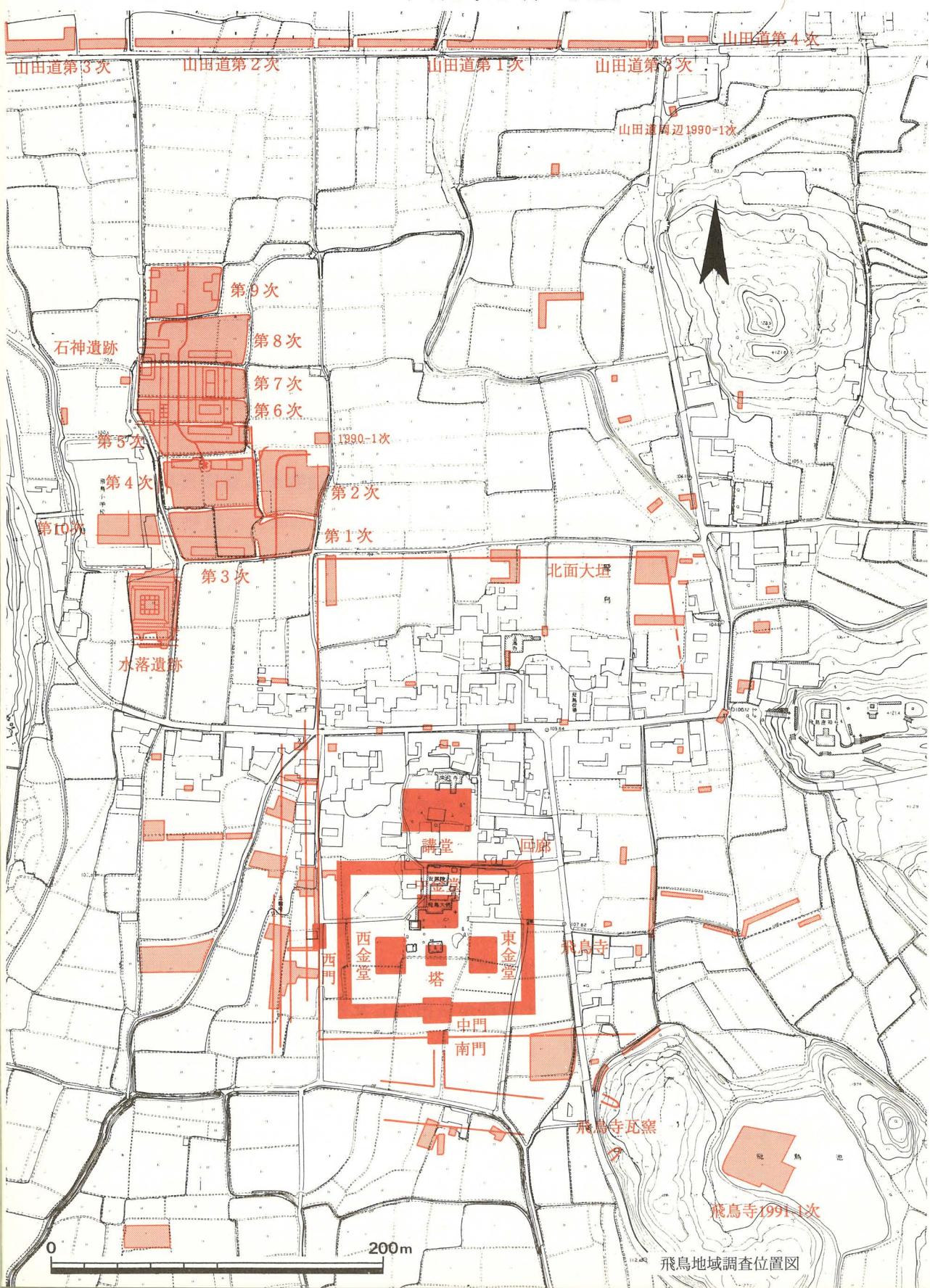
まとめ

今回の調査で検出した遺構の内、配置と重複関係・出土遺物から藤原宮期に属すると考えられるのは、建物SB7050・SB7060、南北溝SD7080、木質物を含む土坑SK7071・SK7072・SK7073・SK7074・SK7051・SK7052などである。

先行の第62・63次調査とあわせると、右京七条一坊西北坪の北三分の一をほぼ調査したことになる。これらによれば西北坪北三分の一内は、東四分の一余を南北溝SD6512で仕切り、西三分の一を南北溝SD7080で区切った中央部に、比較的小規模な掘立柱建物を数棟づつ配置している。これは坪の中心部に正殿・脇殿・前殿等を整然と配置して、一坪全体を占めた宅地である西南坪とは異なる利用形態である。ただ、西北坪でのこれまでの調査地が坪の北に片寄っている点で、なお南に中心的建物群の存在するだけの空間はある。西南坪も周辺部は塀で区切られて小規模な建物が散在するようであり、西南坪と同じ配置は採れないものの、西北坪が一坪全体を占めて利用された可能性は残される。

また、小規模な建物と土坑群及び井戸で構成される坪北半部の性格については、第62次調査の井戸と今次調査の土坑群から出土した木簡はこの坪が通常の宅地ではない可能性を示唆するが、具体的な利用形態と性格については、なお明かでない部分が多く、第63次調査との間（第66—12次調査）及び、坪の南半分での今後の調査の進展を待って検討したい。

III、飛鳥地域の調査



飛鳥地域調査位置図

1、石神遺跡第10次調査

(平成三年七月～十二月)

昭和五十六年に開始した石神遺跡の発掘調査も第10次をむかえた。第3次調査以降は、旧飛鳥小学校の東側の里道に沿って南から水田を1筆づつ調査し、遺跡の南北の規模が160m以上に及ぶことを明らかにする等の成果をあげてきたが、今年度からは旧小学校の敷地（小字唐木）を数回にわけ調査する予定となつた。今回の調査地は第3次調査区の西に位置し、1棟だけ残されている旧校舎を隔てて史跡水落遺跡の北にあたる。調査面積は約670m²（東西約40m、南北約17.5m）と例年に比べ少ないが、これで調査総面積は約11,120m²に達した。

遺構

層序 調査区の基本的な層序は、上から校庭造成に伴う盛土、旧耕土・床土・灰褐色土・含炭褐色土で、その下が黒褐色土ないしは黄褐色山土の整地土となる。校庭造成に伴う削平は西にいくほど著しく、盛土の直下が含炭褐色土となるところも多い。遺構の大部分は整地土上面で検出したが、校舎の基礎工事などの攪乱を受けているところでは、地山を形成する灰褐色砂層ないしは暗褐色砂礫土層上面で遺構を検出した。遺構面は全体に東南が高く、西北に緩やかに傾斜しており、A期の石敷上面での比高差は約30cmである。

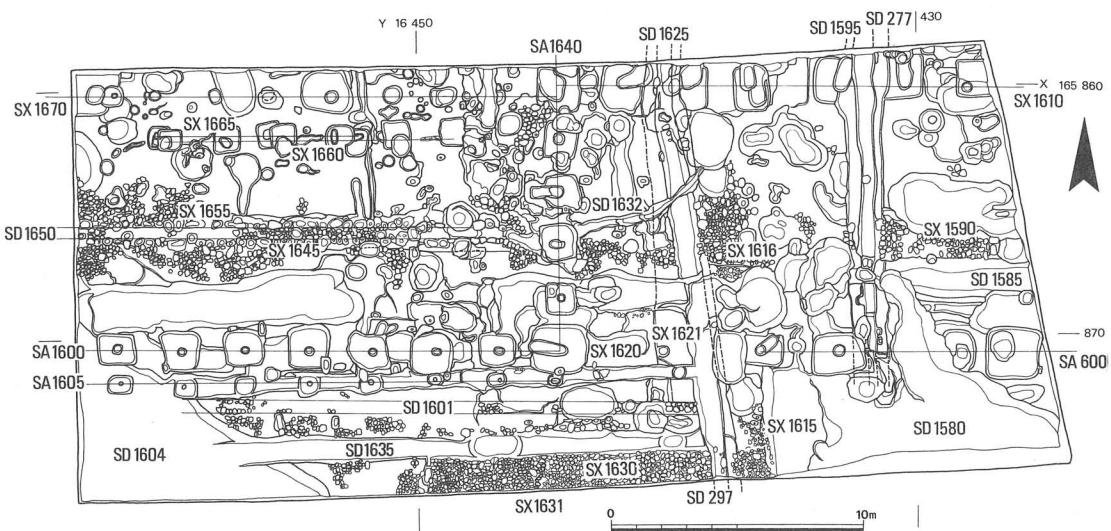
時期区分 石神遺跡では、主として7世紀中頃から8世紀前半にわたる遺構を検出しており、これまでの調査成果によれば、大きくA期（7世紀中頃：齐明朝）、B期（7世紀後半：天武朝）、C期（7世紀末～8世紀初頭：藤原宮期）、D期（8世紀前半：奈良時代）にわけられる。今回はこのうちA～C期の遺構を検出した。なお、A期はこれまで3小期に細分してきたが、今回検出したA期の遺構は時期細分の手がかりに乏しいので、細分は次回以降の調査成果をまつことにしたい。

〈A期〉 飛鳥寺の寺域の北に東西大垣SA600が作られ、その北側に石神遺跡（齐明朝の饗宴施設）、その南側に水落遺跡（齐明六年〈660〉に中大兄皇子がつくった漏刻台＝水時計）が形成された時期である。

東西大垣SA600 これまでの調査成果によると、東西大垣SA600は幅約3mの低い

基壇をもつ掘立柱の1本柱塀で、第3次調査区内で約45m分を検出し、さらに東西に延びると推定されていた。今回は、調査区の東側でその西延長部とみられる一辺が2m前後、深さ約1.2mの柱掘方を4箇検出した。ただし、柱間寸法は東から約1.7m、5m、3.1mとばらつきが大きい。このうち5mの箇所は、その間に存在した柱穴が後世の自然流路SD1580によって失われたとみられるが、その他の柱位置も、第3次調査区で知られた柱間寸法2.54m等間での割りつけ位置には合致しない。したがって、なんらかの理由により、両調査区の間で柱間寸法が乱れていると考えられる。ただ造営方位は正確に揃い、柱の径もほぼ同規模なので、ここでは一連の塀とみなしておく。

東西塀SA1600 このSA1600の西端の柱穴から西へ約7.5mの間に柱穴はなく、後述する通路SX1620として機能していたと推定されるが、その西側でSA1600と方位を揃え、柱間寸法も同じ2.54m等間である東西塀SA1600を7間分検出した。SA1600の東端の柱掘方は東西が2.4m、南北が2m、深さ約1.5mと他の掘方よりひとまわり大きく、柱も径36cmほどあり、SA1600とほぼ規模が等しい。しかし、他の掘方は一辺がほぼ1.5m大で深さ1.5~2mとやや小さく、柱も径21~24cmと細い。柱掘方は地山面から掘り込み、柱を据えた後に黄褐色の山土で低い基壇を築くために、基壇土を取り除かないとみえない。基壇端は第3次調査によれ



石神遺跡跡第10次調査遺構実測図（1：300）

ば玉石で化粧したと考えられており、その南に基壇端と一体になった石組の東西溝SD1601があり、基壇の出は柱心から約2mとなる。SA1600の東端の柱は西側に抜き取られ、抜取り穴には赤く焼けた壁土と上塗の白土が充満していたので、この塙は柱を芯に壁小舞を組み、壁土を塗った塙であることと、焼失したことが知られた。また、東から3番目の柱痕跡は上半部が空洞化しており、底近くに焼土と炭化物がみられたので、柱は基壇面近くで切断したと思われる。東から2・4～7番目の柱痕跡も、空洞こそ認められないが同様に切断したものとみられる。なお、東から8番目の柱には小さな柱抜取り穴があり、柱痕跡の上半部には焼土が充満していたので、柱をほぼ垂直に抜いたと考えられる。

このように、SA600とSA1600は掘方の大きさや柱の径がわずかに異なるものの、一連の計画にもとづき造営された大垣とみられる。しかし、約7.5mの間に柱穴はなく、この間は水落遺跡と石神遺跡を結ぶ通路SX1620として利用されたと考えられる。したがって、今回検出したA期の遺構は、

- 1、東西大垣SA600・1600の南に広がる水落遺跡に属する遺構
- 2、水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構
- 3、SA600・1600の北に広がる石神遺跡に属する遺構

の三群にわけられる。

1、水落遺跡に属する遺構 水落遺跡に属する遺構としては、SA1600の基壇の南縁を限り西へ流れる石組溝SD1601と、その南に広がる石敷SX1630がある。

石組溝SD1601、長径10～30cm大の底石が断続的に残り、底幅40～50cmの溝に復原できる。側石はほとんど失われているが、第3次調査で検出した基壇縁の化粧石の据え付け掘方や抜取り穴のあり方からすれば、基壇の南縁を画す玉石が溝の北の側石を兼ねた構造となろう。底石と石敷SX1630との比高差はあまりなく、南側の側石の高さは1石程度の浅い溝と推定される。

石敷SX1630は、径10cm～30cm大の川原石を敷きつめたもので、上には径2～3cmの礫を厚さ約10cmほど敷いたバラス層が全面に存在する。この石敷は、後世の自然流路SD1580や東西溝SD1635でかなり壊されているが、かつてはSD1601の南側全面にひろがっていたと推定される。石の敷き方は石神遺跡側の石敷

SX1590・1645・1655にくらべ丁寧で、石も全体に小型である。なお、この石敷には、SA1600に取りつく南北壠SA1640の南延長部に、南で少し西に傾く見切り石列SX1631がある。この見切り石列の東側の石敷は約5cm低く、この部分は通路SX1620に対応する水落遺跡側の施設であった可能性も考えられる。

2、水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構 水落遺跡と石神遺跡を結ぶ遺構としては、通路SX1620、水時計遺構の中心から北へ延びる木樋Eあるいは小銅管を埋設した掘方SD277、その抜取り溝SD1595、おなじく北北西に延びる木樋Hを埋設した掘方SD1625とその抜取り溝SD297がある。

通路SX1620は、SA600の西の柱3間分を省略し、幅約7.5mの通路としたものである。この間には、ほぼ中間に位置する小柱穴SX1621以外に顕著な遺構がないが、かつては石敷で舗装されていたと推定される。

木樋Eあるいは小銅管を埋設した掘方SD277は、その南側が自然流路SD1580によって深くえぐられて残っていないが約12m分を検出し、水時計中心部から50m以上延びていることを確認した。掘方は幅約1.4m、深さ約0.6mで、木樋等を埋設後に厚さ15~20cmの整地土を置き、さらにその上を石敷で覆う。この掘方は調査区北端で柱列SX1610と重複しているが、施工の順序としてはSX1610の柱掘方を掘り、柱を立てた後にSD277を掘削している。一方、廃絶にあたってはまずSX1610の柱を抜き、その後、SD1595が掘られていることが判明した。抜取り溝SD1595は、石敷を壊してうがたれた、断面が上ひろがりの深さ約0.8mの溝であるが、SX1610やSA600近くには大量の焼土が含まれており、両者が焼失した後に木樋等が抜き取られたことを示している。抜取り溝の底は幅約30cmの浅いU字形を呈するが、木樋の痕跡はもちろん、水が流れたことを証する砂層、あるいは木樋の固定に使用した粘土等は認められなかった。なお、水落遺跡の第5次調査区の所見では、外寸法で約30cmの幅をもつ木樋Eと、小銅管を封じ込めた10cm角の木樋は、心々距離で約50cmの間隔を保ち併設されているが、今回の土層断面の観察結果では、一方の抜取り痕跡しか認められず、小銅管あるいは木樋Eのどちらかが、水落遺跡の第5次調査区と今回の調査区との間で東西いずれかの方向に折れ曲がっていると推定される。いずれとも決しが

たいが、断面観察の結果では、木樋Eが北へ延びている可能性が高い。

木樋Hを埋設した掘方SD1625は約17m分を検出し、木樋Gとの接続点から36m以上延びていることを確認した。掘方の幅は1.6~2.5m、深さは0.5~0.6mで、木樋を設置し、厚さ5cm前後の砂質土を約30cmほど版築状に積み、その上に厚さ10cmの整地土を置き、さらに石敷で覆う。抜取り溝SD297は上幅約0.9m、深さ約0.5mの浅いU字形を呈するが、調査区北端近くの埋土には焼土を多量に含み、これも柱列SX1610が焼失した後で抜き取ったことが判明した。

3、石神遺跡に属す遺構 石神遺跡に属す遺構としては、東西大垣SA600・1600の北に広がる石敷SX1590・1645・1655、SA1600と柱列SX1610にとりつき通路SX1620の西を画す南北堀SA1640、SA1600の約5m北を西へ流れる東西石組溝SD1650、調査区の北辺に沿って検出した東西方向の柱列SX1610・1670がある。

石敷SX1590は、10~50cm大の川原石を敷きつめたもので、上には径2~3cmの礫を厚さ10cmほど敷いたバラス層が存在する。後世のいくつかの遺構によってかなり損なわれているが、東西大垣SA600と柱列SX1610の間は、ほぼ全面にわたって石敷で舗装していたとみられる。

石敷SX1645・1655もSX1590とほぼ同じ大きさの川原石を敷きつめたもので、石組溝SD1650にむかって緩やかに傾斜し、東西大垣SA1600と柱列SX1670の間の雨水を排水するようになっている。この石敷上にも同様のバラス層が存在する。なお、SA1600の基壇北縁と、この石敷との接点がどのような構造になっていたかは不明であるが、調査区北端では、柱列SX1610の柱掘方の一部を覆って石敷が残り、柱近くまで石敷で舗装していたことが確かめられた。

南北堀SA1640は、一辺が1.2~1.4m大、深さ約1mの柱掘方4箇を検出した。柱間寸法は2.1m等間である。これも地山面から柱掘方をうがち、その上に厚さ40cmほどの整地土を置き、石敷を施す。いずれも西側からの柱抜取り穴があり、多量の焼土を含む。

石組溝SD1650は、幅約1.5m、深さ約0.35mの掘方をうがち、長径20cmほどの川原石を幅約40cmにわたって敷きつめ、両側にひとかえほどの玉石を立てて側石とする。側石は7石を除いて抜き取られ、底石も中央部と調査区西端に残

る程度である。東端の構造が不明であるが、南北塀SA1640付近の石敷の残存状況から判断すると、全体が浅くくぼみ、周囲の雨水を集めてSD1650に排水していたと推定される。

柱列SX1610・1670は、一連の東西棟建物の南側柱になるのか、東西塀になるのか調査区内の所見だけでは判断しがたい。しかし、南北塀SA1640を境に東と西では柱筋がわずかに揃わず、また、柱抜取り穴の形や柱間寸法も異なることから別の構造物であった可能性が高い。ただし、いずれの柱抜取り穴にも焼土が充満しており、同時に焼失した同時期の遺構と考えられる。

柱列SX1610は、一辺が1.4～1.8m大で、深さ1.5mの柱掘方を7箇検出した。いずれも、北あるいは北東・北西方向からの柱抜取り穴がある。柱間寸法はほぼ2.6mで割りつけられるが、東から3間目が3.4mと広いのが特徴である。柱掘方は地山面から掘り込むが、柱を立てた後に20cm以上は整地土を置き、その上に部分的ではあるが黄褐色の山土層が残存することから、山土で低い基壇を築いていた可能性もある。

柱列SX1670は、径0.4～0.8mの柱抜取り穴を8箇検出した。柱掘方はそのうち1箇所だけを断ち割って検出したが、一辺が約2mで深さが約1.5mである。この柱掘方も地山面から掘り込み、径約35cmの柱を立てた後に厚いところでは50cm以上の整地土を置き、さらに黄褐色の山土で低い基壇を築いていたと推定できる。柱間寸法は若干のばらつきがあるが、ほぼ2.3mである。

＜A期以前の遺構＞ 以上のA期の遺構は、整地や石敷舗装との関係から、ほぼ同時期に造営されたと考えられるが、この他にA期以前の小規模な石敷SX1615・1616と、柱列SX1670よりわずかに遅れて施工された柱列SX1665がある。

A期に先行する石敷SX1615・1616は、木樋Hの掘方SD1625の東側で部分的に検出した。SX1615は、5～20cm大の川原石を乱雑に敷つめたものであるが、東側が自然流路SD1580によって壊されており、わずか南北1.7m、東西1mの範囲内で検出したにすぎない。A期の石敷SX1630より約0.3m下にあり、その間には炭化物と土器片を含む灰褐色の砂質土が堆積する。SX1616は、南半がC期の土坑で壊され、またA期の石敷SX1590を壊さないように調査したので、わずか東

西約1mの範囲を確認したにすぎないが、周辺の断ち割り調査の結果ではそれほど広い石敷ではない。これもSX1615とほぼ同じ大きさの川原石を敷きつめたもので、灰褐色の砂質土が流れ込んだ状態で堆積した後に整地土を置き、その上にA期の石敷SX1590が敷かれている。

柱列SX1665は、調査区内で3箇の柱掘方を検出した。柱間寸法は東から約3.5m、約4.3mと広いとともにばらつく。いずれの柱穴もB期の柱列SX1660の柱掘方によって半分ほど壊されているが、一辺が1mほどで深さ約1.1mあり、小さな柱抜取り穴があって径20～25cmの柱をほぼ垂直に抜き取る。この柱抜取り穴には焼けた壁土と焼土を含み、廃絶の時期は約1.5m北の柱列SX1670と同時期と推定されるが、断ち割り調査の結果では、柱掘方が掘られた時期はSX1670よりわずかに遅れる。すでにふれたように、柱列SX1670の柱掘方は地山面から掘り込み、柱を立てた後に黒褐色整地土と黄褐色整地土を置いて基壇を築く。柱掘方の埋土は暗褐色砂質土で、黄褐色山土は含まない。一方、柱列SX1655の柱掘方は、黒褐色整地土の上面から掘り込み、柱を立てた後に黄褐色整地土を置き、柱掘方内には黄褐色山土が含まれるという違いがある。したがって、SX1665は、その施工時期がSX1670より少し遅れ、その基壇築成に伴い建てられた付属的な施設と考えられる。

〈B期〉 A期の遺構が取り壊され、新たに整地をおこない配置の異なる建物群が建設された時期である。今回は、A期の東西大垣SA1600の南約1.2mにある東西塀SA1605を7間分検出した。また、この時期の建物と推定されるものに、調査区の北西で検出した東西方向の柱列SX1660がある。

東西塀SA1605 東西塀SA1605は、長辺が0.6～0.9m大で、深さが約0.8mの柱掘方を8箇検出した。柱間寸法（2.54m）と造営方位は東西大垣SA1600と一致し、柱位置もほぼ正確に揃う。このSA1605は、第3次調査で検出した東西塀SA560の西延長部とみられるが、通路SX1620部分では精査にもかかわらず柱穴は見いだされなかった。第3次調査区の所見では、柱掘方はSA600の基壇上面から掘り込み、一部でSA600の柱掘方を壊し、基壇もかさ上げして南縁の化粧石も据えなおしていることから、A期の大垣の位置を南にずらし、B期もその位置

をほぼ踏襲したものとみられてきた。しかし、柱間寸法はもちろん柱位置までSA1600と揃い、通路SX1620部分にこの扉が続かないことを重視すれば、このSA1605は、SA1600と一体の構造をもち、一時期遅れて付け加えられた遺構である可能性も考えられよう。その場合、SA1605はA期に遡る遺構となり、これまでのB期の遺構配置についての理解には再考が必要となる。

柱列SX1660 柱列SX1660は、一辺が約1m大で、深さが約0.9mの柱掘方6箇を検出した。柱間寸法は2.3mほどである。柱掘方は、A期の柱列SX1670の基壇土である黄褐色山土層の上面で検出し、掘方の埋土には山土と焼土を含む。5間分を検出したのみで妻の柱穴を検出していないが、あるいは東西棟建物の南側柱列になる可能性も残る。

〈C期〉 B期の遺構がすべて取り壊され、小規模な建物や井戸が作られた時期である。今回は、大小の土坑や斜行溝SD1632を検出したにとどまり、建物等は検出していない。土坑からは土師器や須恵器が大量に出土したが、東半部に規模が大きくかつ深いものが多い。

〈C期以降の遺構〉 東西溝3条、いくつかの土坑、自然流路2条などがあるが時期・性格とも不明な点が多い。調査区の西南隅で検出した自然流路SD1604は、飛鳥川の水が一時期ここまで及んだことを示しており、水落遺跡の西側を削る崖と一連のものと思われる。砂礫層中から摩耗した土器片や瓦片が少量出土した。なお、調査区の東南部で検出した自然流路SD1580には瓦器片が含まれており、その底にA期の遺構がかろうじて残されていた。

出土遺物

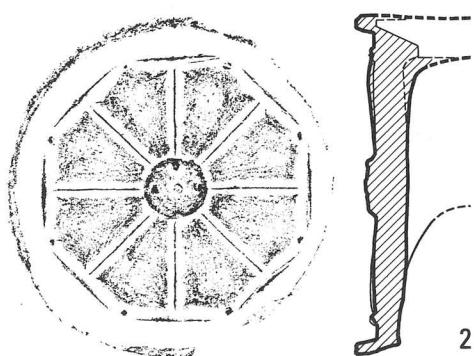
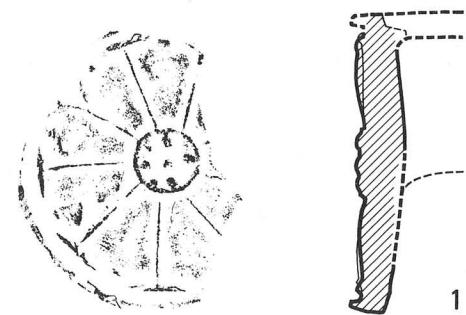
出土した遺物の大半は、含炭褐色土、及びC期の土坑から出土した土師器と須恵器である。この他に鉄製品（釘・刀子・鉄鎌・鉄斧）、石製品や土製品が少量ある。また、縄文時代や弥生時代の土器と石鎌、古墳時代の土器、中世の瓦器なども少量出土した。

瓦 瓦は主として自然流路SD1580と含炭褐色土から出土した。丸・平瓦は整理箱にして3箱ほどあり、大部分が飛鳥寺所用の瓦と思われる。軒丸瓦は、いわゆる角端点珠と総称される单弁軒丸瓦が2種出土した。1は单弁9弁の軒丸瓦

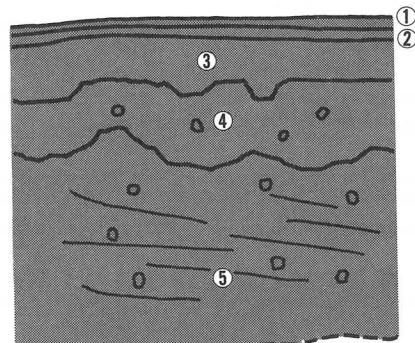
で、中房に1+4の蓮子を配した範が飛鳥寺（VII型式）と豊浦寺（II B型式）に使用され、これに2箇の蓮子を彫り加えて蓮子を1+6とした範が若草伽藍（3Bb型式）に使用されたことが知られている。今回出土した例は、彫り加えがおこなわれた範によって作られているが、若草伽藍出土例より範の中房部分の傷みが明らかに少なく、肉眼による観察ではあるが胎土にも違いがある。従来は、若草伽藍の創建時に彫り加えが行なわれたと考えられてきたが再検討の必要があり、わずか1点ではあるが飛鳥地域からの初の出土例として注目される。2は、単弁8弁の軒丸瓦で中房に1+4の蓮子を配する。文様構成がよく似たいくつかの型式が、石神遺跡のこれまでの調査や奥山廃寺（奥山久米寺）で出土しているが、同範かどうか確認がむずかしい。2点出土している。

壁土 A期の柱抜取り穴から大量の焼けた壁土と上塗の白土が出土した。壁土の観察と分析結果を要約しておく。

壁土の断面は右図に示すような構造である。④と⑤は、下地を構成する層で、3~4mm大におよぶ礫を含む。礫には花崗岩礫を含む。石英と長石以外にバーミュキュライト化した雲母（金色を呈する）が多量に存在する。この土は、花崗岩が風化したもので、鉄分に富み赤色を呈している。⑤には、植物質のスサと思われる形状の物質が多量に混合されていた形跡が認められるが、いずれも埋れ



出土軒丸瓦 (1 : 4)



壁土断面模式図

ている間に腐って消失している。4にはスサの混入があまり認められない。④・⑤の層が硬化してから①～③の層が上塗されている。③の層は白色系、②の層はあずき色、①の層は白色系であるが、いずれも土の質は同じであり、石英を最も多量に含み、ついで長石で、雲母はほとんど含まない。粒径から判断すると、細粒砂で構成されている。X線回析で分析した結果、粘土鉱物は検出されなかった。これは、500～600°C 程度の火を受けると粘土鉱物は結晶性を失うからである。坂田寺跡から出土した白土にはモンモリナイトなどの粘土鉱物が含まれていた。今回の試料の白土は、いずれにせよ火災によると思われる影響を受けているので、色調変化を起こしている。なお、①・②・③のいずれからも漆喰の成分(CaCO₃) は検出されなかった。

まとめ

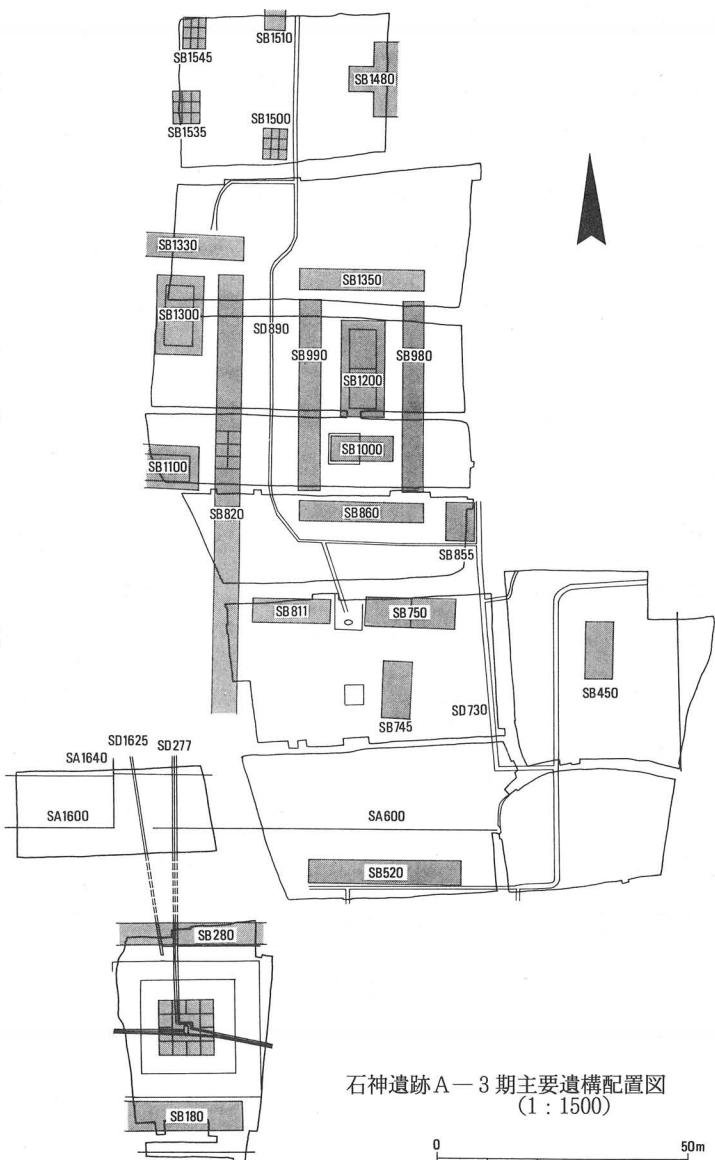
今回は水落遺跡と石神遺跡を隔てる境界域を調査したため、検出した遺構は例年にくらべかなり少ない。特に、B・C期の遺構については不明な点も多いが、ここでは、A-3期を中心とした調査成果をまとめておきたい。

昨年までの調査で、石神遺跡の南北の規模は東西大垣SA600から北へ160m以上におよぶことが知られた。今回は石神遺跡と水落遺跡の両者が飛鳥川の東岸近くまでひろがり、東西の規模が140m以上になることが明らかとなった。A-3期の遺構は、この中に少なくとも5つほどのひろがりもつ空間としてまとめられる。

SA600の北には、約40mの南北規模をもつ石敷を中心とした空間がひろがる。北寄りには石敷を伴う井戸や数棟の建物が点在し、井戸から石組溝が北へ延びるほか、数本の屈曲する石組溝が縦横に走る。井戸から北へ延びる石組溝の東には、4棟の建物で囲まれた外周東西24.7m、南北49.4mの狭長な東区画の全貌が明らかになっている。一方、石組溝の西には、東を長廊状建物SB820、北を東西棟建物SB1330によって区画されたより広大な西区画の存在が解明されつつある。さらに、この東・西両区画の北には、前回の調査で明らかになったように、石組溝の東に特異な平面形をもつ建物を中心とした区画があり、西には総柱建物が数棟建ち並ぶ倉庫群が存在したようである。

このうち、東区画はきわめてコンパクトにまとめられた「院」とでも称すべき配置をもち、石神遺跡のなかでも重要な役割を果たした施設のひとつと推定される。一方、西区画では、2棟の四面廂建物SB1100・1300がその東北部で検出されており、東区画より大規模かつ中枢的な施設であった可能性が高くなりつつある。今回検出した柱列SX1610・1670は、この西区画の北を画す建物SB1330に対応した南限の施設となる可能性も考えられよう。その場合、西区画の南北の規模は110m近くに及び、東西の規模は42m以上となる。

また、今回の調査では、石神遺跡と水落遺跡が、これまで考えられてきたように東西大垣SA600で隔てられた別の空間として機能していたのではなく、両者を結ぶ通路SX1620によって一体の空間として利用され、木樋や銅管を用いた水利用の施設が西区画の中心部に延びていることも確認された。来年度以降の調査で、西区画の建物配置と、水を利用した施設の機能が解明されることを大いに期待したい。



2、坂田寺第7次調査

(平成三年九月～十二月)

この調査は、高市郡明日香村阪田字古宮の坂田寺跡について奈良県が行う環境整備事業に伴う遺構確認調査の第2年次にあたる。第1年次の調査は平成二年度に事業地の東半分について実施した（坂田寺第6次調査、『概報21』）。

第6次調査では、第3次調査で確認した西面する仏堂（坂田寺の伽藍は国土座標系の北から約15度西に傾いた方位にたてられており、ここでは仏堂の正面を西、背面を東として記述する。）の東南隅部とそれに取り付く廻廊を検出し、仏堂が8世紀後半の造営にかかる二重基壇をもつ建物であること、廻廊は単廊で仏堂よりやや遅れて造営されたことなどを確認した。今回の調査は第6次調査地と一部重複して、東西45m、南北7～11mの調査区を設けて、南面廻廊の規模と構造を明らかにすることを主な目的として実施した。

層序

調査地の基本的な層序は第6次調査の西半部とほぼ同じで、上から耕作土・床土・茶灰色系粘土・暗灰色砂・灰褐色系粘土・暗黄褐色砂質土・黒灰色有機物包含粘土・花崗岩風化岩盤であり、廻廊倒壊時の堆積層である厚さ20cm弱の黒灰色有機物包含粘土を除去することで廻廊建物の全容が検出された。廻廊基壇上面は地表下2.0mにある。地山岩盤は調査区の西端付近で北に向かって下降し、そこには灰白色粘土や灰褐色バラスがある。廻廊及び伽藍はそれらを削って造成されている。なお、層序が水平面を形成するのは表土下1.2mの暗灰色砂以上であり、暗灰色砂下面には水田耕起に關わる牛の足跡が確認された。15世紀段階にはこの山際の地が水田化されていたとみられる。

調査の結果、調査区の西へなお延びる南面廻廊を検出し、廻廊で囲まれた伽藍の形態が、地形からの推定通り正方形に近いものであることが確認された。

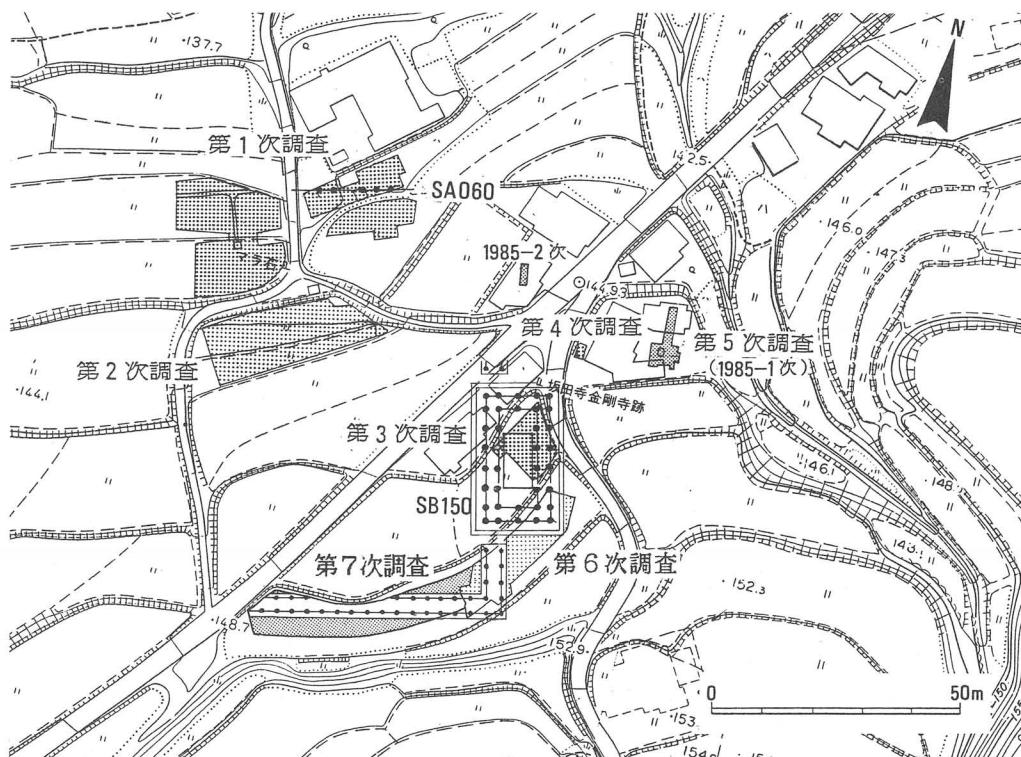
遺構

検出した遺構には、南面廻廊とその内外の雨落溝、内庭の石敷のほか、石組施設・溝・炉や土砂崩れの跡などがある。また、今回も調査区東半で廻廊建築

部材が倒壊した状況で出土し、それらについては第6次調査分を含めて遺構図に描き入れたが、遺物として記述する。

南面廻廊SC180 廻廊は梁間1間の単廊で、柱間寸法は桁行・梁行ともに3.03m(10尺)に割り付けられる。今回新たに15間分を検出し、昨年検出分の2間を合わせて、東南隅の間を含めて17間以上の規模になる。

基壇の造成は、まず廻廊の外約4mの所で伽藍全体の造成にあたる切り土を行い、地山岩盤の平坦面を形成した後、さらに両側の雨落溝を削り込むことで成形する。その上面に一辺1.1m×0.9m、深さ0.2mの掘方を掘って礎石を据えつけ、さらに基壇土にあたる砂質土を薄く積んでいる。礎石は据え付け掘方の底の地山面に直接据えられ、礎石の側面に小石を詰める例がある以外は、根石等は用いていない。礎石は0.5m×0.8m大の花崗岩の自然石で、全体を確認した例では、高さ25cmである。礎石の上面の高さは西でやや低く、検出した東西端では約16cmの差がある。また、廻廊の内外では内側の礎石が僅かに低く

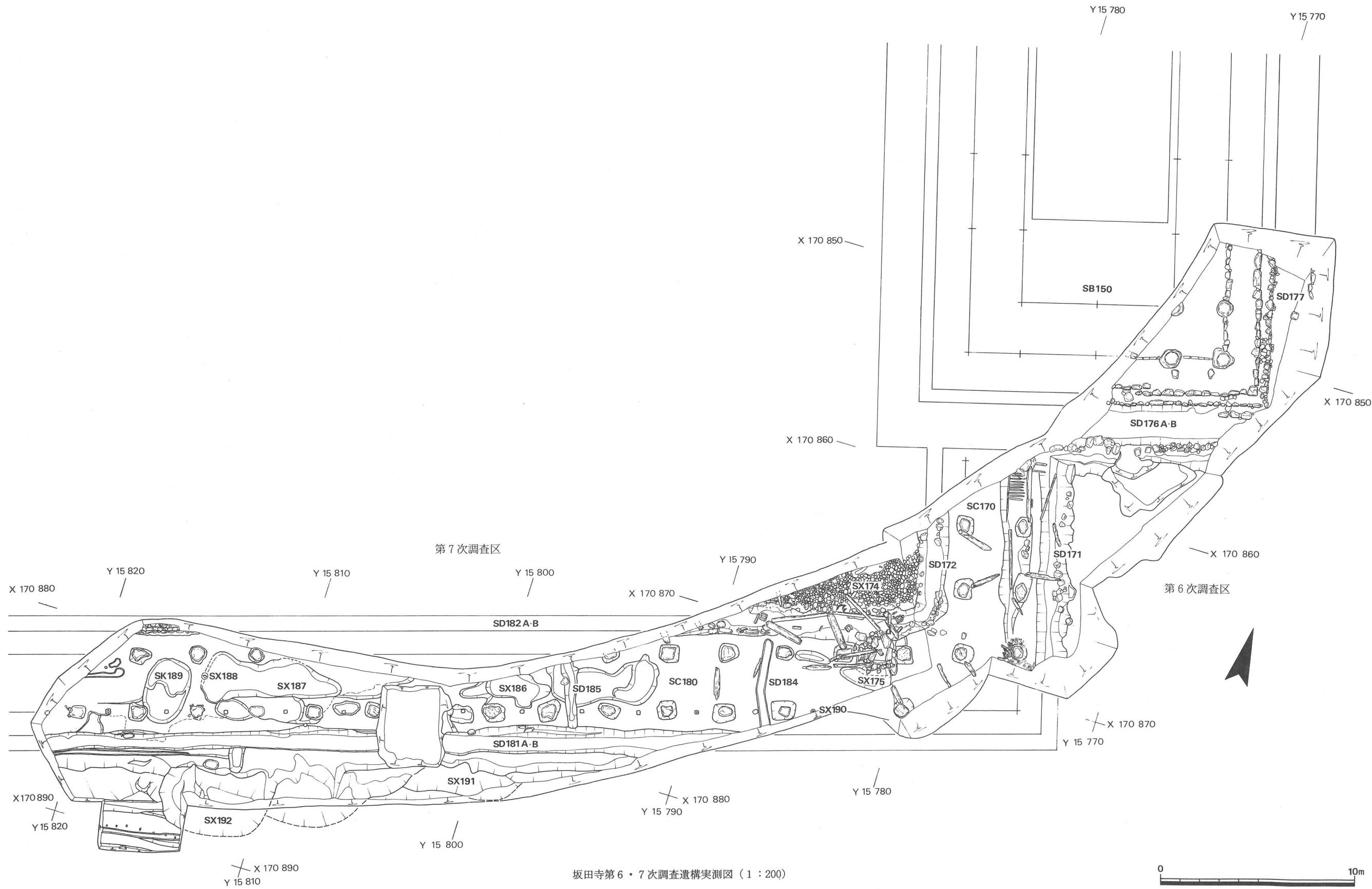


坂田寺調査位置図 (1 : 1500)

据えられる傾向がある。

廻廊の南側柱列、すなわち壁と窓が設けられる柱列には、各礎石間の中央に角柱列SX190がある。柱は一辺20cm、深さ25cmの掘方を掘って据えられ、底に瓦片を敷く例がある。柱根の多くは腐朽していたが、東半で遺存した例では一辺12cm×7.5cmの断面長方形で、短辺を平行方向に揃えている。角柱列は廻廊の外側の礎石列にのみ認められることから、足場穴と見ることは否定され、礎石列と重なって存在することから、礎石建ちの廻廊以前に基壇上に設けられた掘立柱塀か、あるいは礎石建ち廻廊の腰壁束と考えられる。しかし、前者の場合、柱が極めて細い点や正しく礎石間中央にある点から疑問があり、また、後者の場合には腰壁束が地覆材の上にのる構造であれば、基壇上で柱穴としては検出されない難点がある。廻廊基壇上の礎石間に柱穴を検出した例には山田寺があるが、そこでは柱掘方は大型で柱間寸法にはらつきがあり、坂田寺の場合とは幾分状況が異なっている。坂田寺のこの角柱列の具体的な機能については、柱断面の細いことから腰壁束の一種である可能性が高いとするのが妥当であろうが、今後類例を待って検討したい。

廻廊南雨落溝SD181 廻廊南雨落溝は、幅1.5～2.0m、深さ0.2～0.3mの規模に地山岩盤を削り込んで造られている。溝の南外方は幅約0.5mほどの平坦面をもつだけで急傾斜で丘陵にいたる。溝埋土は3層に分かれ、上層は瓦を多く含む茶褐色粘土、下層は南の丘陵側からの流入土である茶褐色砂質土で、ともに10世紀後半代の土器が少量含まれる。さらに溝底は幅0.8mで基壇と並行する厚さ3cm程の小さな段をなして下がっており（最下層）、その北端の位置は礎石心から1.2mにある。最下層は瓦・土器の細片を含む褐色粘土で突き固めた状況で上2層とは大きく異なっている。溝内には基壇側に数個の石塊があるほかには護岸の石材は遺存しない。しかし、この溝最下層の突き固めた粘土層の外側に浅い不整形なへこみがいくつか確認できることから、雨落溝は当初、この粘土層を溝底とし石で護岸していた（SD181-A）と考えられる。その後、雨落溝は基壇縁石と護岸の石の据え付け掘方を含めた形に掘り直して改修され（SD181-B）、10世紀後半代に埋没したとみられる。



溝上層の瓦は後述する南からの土砂崩れの跡付近で多く認められ、土砂崩れの瓦層と一連に形成されている。遺構図では表現していないが、この土砂崩れの部分には瓦層を掘り込んで、雨落溝と並行する溝が掘られており、暗灰色粘質土で埋まっている。これは、土砂崩れによって埋没した雨落溝を部分的に掘り直した溝（SD181-C）と考えられる。なお、廻廊倒壊時に形成された暗灰色粘土あるいは黒灰色有機物層はSD181-Cの埋没後に形成される層序で確認できることから廻廊倒壊時には基壇上にまで土砂が迫っていたとみられよう。

廻廊北雨落溝SD182 廻廊北（内側）の雨落溝は調査区の東と西で検出したが、両者で様相が異なっている。東では第6次調査区での所見と同じく、建物部材を含む黒灰色有機物層の下で、幅1.6m、深さ0.3mの素掘溝が検出され、大型川原石が散在する溝内には灰色砂が厚く堆積し、また、溝底の両側には灰色砂の入り込んだ不整形な穴が確認された。西では礎石心から1.2mの位置に面を揃えた一かかえ大の川原石の列と、その外側で石列天端から14cm下に上面をそろえた人頭大の石敷を長さ2m分検出した。石敷は部分的に欠失する所と平瓦片に置き替えた所があるが、すべてを廻廊基壇上面から一連に続く暗灰色粘土が覆っている。これらは廻廊の基壇北縁石にあたる護岸の石と雨落溝底石であり、調査区東での状況は基壇縁と雨落溝の石組を抜き取った結果であって、灰色砂の入り込んだ不整形な穴は側石の抜取り穴であると理解される。また、東での溝中に散在する川原石の中の一石は据えられたままであることが確認された。すなわち、当初は廻廊内側の雨落溝は幅0.8mの石組溝であり、縁石の位置が廻廊外側の雨落溝と同様に礎石心から1.2mの位置にあることから、当初の廻廊基壇幅は5.4mであると推定される。なお、調査区西では縁石と廻廊礎石の天端とは約5cmの差をもって礎石が高くなっている。

廻廊北雨落溝の内側は人頭大の川原石で舗装している（SX174）。舗装上面は遺存した北雨落溝の底石よりも約10cm高く、廻廊礎石上面よりは9cmほど低くなっている。川原石による舗装は部分的に抜き取られ、その部分を含めて平瓦片や小砂利を敷いた舗装が行われている。これは、底石が遺存した調査区西での北雨落溝の様子と同様で、瓦や小砂利による廻廊内部の改修が広く行われ

たと考えられる。その時期はこれらを覆う薄い灰色砂の上に廻廊建築部材を含む黒灰色有機物層が厚く堆積していることから、10世紀後半の廻廊倒壊時以前である事は確かであるが、出土遺物からは限定できない。

その他の遺構 石組施設SX175、南北溝SD184、SD185、土坑状のくぼみSX186、SX187、炉跡SX188、土砂崩れ跡SX191、SX192がある。

調査区東端の石組施設SX175は、第6次調査で既に検出しているが、南面廻廊の入隅から2間目の内側礎石列上に大型の石材を内法幅0.6m、長さ1.2m余の長方形に組んだものである。東の礎石から20cmの位置で幅1.5m、深さ0.5mにコ字形に掘方を掘り、大型の石を掘方壁面に沿わせて、東西両壁では2石、南壁では1石配して構築している。底は地山岩盤削りだしのままで敷石などは無く、改修後の内側雨落溝底とほぼ同高にある。なお石組の東西南の各辺や底に導排水の施設はなく、廻廊を横切る形の暗渠や溝ではない。石組掘方と礎石との間は、約15cmの深さで浅く掘りくぼめ、人頭大から一抱え大の石を乱雑に詰め込んでいる。試みに東側石の南から2石目を正立させると、想定される基壇北縁石と合致する位置にくるが、北側の石が崩れていて、南北長及び廻廊北縁石との関係が明らかでない。側石の天端が礎石上面よりも約10cm高く据えられており、石組の側石は裏込状の石塊群の一部とともに、基壇上に露出していたことになる。倒壊した廻廊建物の部材が石組の上をわたっており、廻廊の機能していた時期に存在したことは確かであるが、設宮の時期やその機能・性格については類例もなく明らかでない。

南北溝SD184・SD185は、それぞれ南面廻廊隅から5間目と8間目に掘られた幅0.6～0.8mの素掘溝で、深さは15cmである。砂の混じった暗灰色粘土で埋まっており、廻廊倒壊時よりも古い溝である。廻廊雨落溝をつなぐような位置に掘られているが、浅くて、その機能は認められない。むしろ、廻廊上に溜りこんだ水を排水するための一時的な溝と考えられる。ただ、両溝ともに壁があったと考えられる廻廊外側柱列を横切って掘られていることは、この部分の壁が既に壊れていた段階の溝であることを示すものであろうか。

廻廊の中央部礎石間には深さ10cm未満の浅い不整形なくぼみSX187・186・

185がある。くぼみの底には砂が薄くはりつき、拳大から人頭大の川原石と瓦片を含む茶灰褐色砂質土で埋められている。茶灰褐色砂質土には白灰色粘土の薄い層が挟まっている部分があり、倒れた壁かとも考えられたが確証が得られなかった。これらは廻廊倒壊時の堆積層である暗灰色粘土や黒灰色有機物層の下で検出され、重複関係から南北溝SD185より古く、出土瓦に奈良時代のものが含まれることから、廻廊使用期間中に行った基壇上の整形かと考えられるが確定的ではない。

SX187の西端に炉跡SX188がある。内径20cm、深さ6cmの掘り鉢形をなして、厚さ2cmの青灰色の焼け面があり、その周囲の粘土は幅3cmの輪状に赤褐色に変色している。埋土の下半は炭、上半は黄褐色粘土で、埋土からは焼土の小塊が出土した。廻廊内部にある炉の性格は明らかでない。

廻廊の東南隅から15間目にある土坑SK189は、南雨落溝や基壇をえぐる形に丘陵斜面からのびている。廻廊倒壊時の暗灰色粘土層より新しく、滯水を示す暗青灰色粘土が埋土である。底面でSX190の柱穴が検出された。

南面廻廊の南側は地山岩盤の急斜面の崖となっていて、一部南に拡張して確かめたところでは、そのまま丘陵上段へ至るようである。土砂崩れの跡SX191・SX192はその地山の崖を幅6~13m、奥行き3m、深さ1.6mにわたって抉っている。堆積層は南に高い片流れのレンズ状で、茶褐色砂質土の間層をはさんで、厚い瓦層が3枚以上認められ、上に版築土の一部と思われる山土と砂と粘土の互層からなる大小のブロックで構成される土層がある。東のSX191が浅くて古く、西のSX192が新しくて深いが、いずれの瓦層にも7世紀後半から8世紀初頭の瓦と奈良時代末~平安時代初めの瓦が多量に含まれ、少量の10世紀後半代の土器片のほかに土製の小仏像断片が出土した。また、SX191の間層には金箔をおした漆製品の断片や風化したガラス容器片・玉が混じっている。

なお、調査区中央の方形の穴は、現代の水耕栽培の為のコンクリート水槽を掘りだした跡であり、礎石は水槽構築時に持ち出されている。

遺 物

建築部材・瓦・土器・施釉陶器・鉄釘などがある。瓦が大量である他は極め

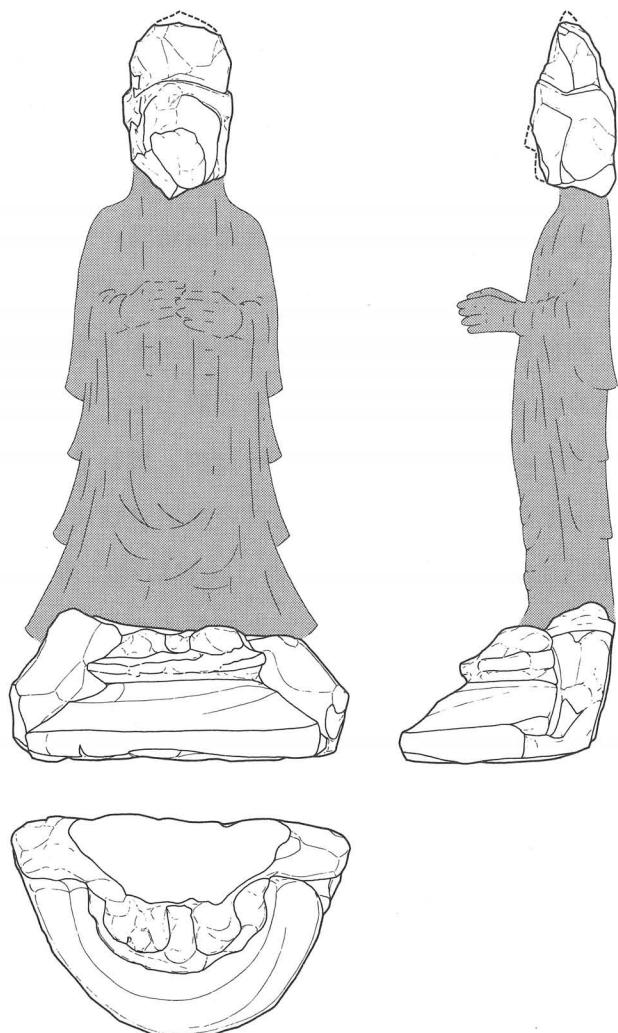
て少量で、建築部材を除けば、廻廊外側から流入した遺物がほとんどである。

建築部材 建築部材には、内側柱筋の東から2・3・4・6本目の柱、2本目と3本目、3本目と4本目をつなぐ頭貫、2本目にかかる虹梁、3本目・4本目の柱に関わる斗のほか、外側柱筋の4・5・6本目の柱材や用途不明の長尺材、檜皮などがある。檜皮は柱や頭貫材の下に厚く堆積して出土しており、廻廊が桧皮葺きであったことは確実である。また、斗には檜材で斗縁の浅いものと、杉材で斗縁の深いものの二種がある。第6次調査で一辺36cmの斗と30cmの斗が出土しており、各々大斗と巻斗と考えたが、今回新たに出土した斗は巻斗ばかりであった。どの程度の斗が失われたか不

明だが組物は概ね平三斗であっ

たと考えられよう。

瓦 瓦には7世紀前半から平安時代のものがあるが、これまでと同様、廻廊建物建立時（8世紀後半）のものではなく、7世紀後半から末と、奈良時代末から平安時代初めの瓦が多い。その大部分が土砂崩れ跡SX191・SX192出土であり、特にSX192に多い。瓦は今回検出した遺構に直接関わるものではないが、坂田寺の変遷を理解する上で重要な資料であり、今回新出の型式も多いことから、これまでの調査で出土した瓦をも含めて新たに設定した型式番号によって、全型式を示しておく。今回の



土製小仏像実測図（1：3）

調査での出土点数は別表（77頁）の通りである。

土 器 土器には土師器・須恵器・黒色土器があり、土師器では奈良時代前半から平安時代にかけての灯明皿が多い。施釉陶器には緑釉・三彩があり、三彩は型押しの文様をもった楕形の内外面に釉薬が施され、唐三彩とみられる。

その他の遺物 このほか、土製小仏像、金箔をおした漆製品の断片、ガラス製容器断片・玉などが土砂崩れ跡SX191や溝SD181-Bから出土した。土製小仏像は菩薩立像の断片で台座から足部の破片が2点、頭部の破片が1点あり、図（74頁）のように復元される。砂粒の多い茶褐色の粘土を素地とし、表面はナデ仕上げのままで、背面を籠で削っている。外表に漆や箔の痕跡は認められない。

まとめ

伽藍 今回の成果は、奈良時代の坂田寺の南面廻廊の規模が隅から17間以上であることが確認されたことである。調査地周辺の地形からすると、廻廊は19間以上には延びないと考えられ、その東西幅は51m以上57m未満となる。廻廊の南北幅は昨年までの調査から58m程度と推定されており、廻廊で囲まれた空間は、ほぼ正方形に近い形になり、その規模は地方の国分寺クラスに等しい。この廻廊内側の空間は、仏堂、塔、あるいはその両者を入れるに十分な規模であるが、今回の調査ではその存否についての手がかりは得られなかった。8世紀後半の寺院では廻廊内側の広大な空間に堂塔の無い例も多いので、結論は今後の調査を待たねばならない。

廻廊 廻廊は第6次調査によって、8世紀後半の仏堂にやや遅れて造営された事が明らかになっているが、その後の変遷について内外の雨落溝の埋没の様子から少ないながら新たな知見を得た。外側の雨落溝では、雨落溝は当初石組溝として造られ、素掘溝に改修された後に、10世紀後半までには徐々に埋没している。その後、南面廻廊の西寄りでは大きな土砂崩れなどが起きて、廻廊背面の排水が滞り、廻廊東南隅部は水没状況になったと推定される。この解消のため、土砂崩れの部分にのみ溝を掘るが、これもすぐに埋没し、廻廊の柱にまで土砂が押し寄せた状況だったらしい。そして、10世紀後半、廻廊は倒壊する。

廻廊内側についても、当初、石組の雨落溝と川原石敷きとして造営されたが、

広い範囲について瓦や小砂利による改修が行われ、さらに素掘溝に改修される。この改修の時期については出土遺物からは確認できないが、第1・2次調査で確認された井戸が9世紀前半に掘り直されていることから、この時同時に改修が行われたとみることもできる。

廻廊内側は雨落溝から庭部にかけて灰色砂で埋没しており、一時期流水で洗われたことが推察される。この流水源や流路については確認していないが山側からしか考え難く、廻廊倒壊以前に廻廊の壁を壊し基壇上から廻廊内部に流水があったことは認められよう。廻廊を破る流水から廻廊倒壊までがどの程度の時間で起ったかについては手がかりはない。いずれも出土土器からは10世紀後半代の出来事である。

廻廊倒壊後は部材の遺存状況からみて東半分は滯水状況にあり、少なくともそこに埋没した部材は片づけられる事なく放置されたのであろう。

廻廊南外方 土砂崩れによって形成された高まりには多量の瓦類や基壇土の一部と思われる山土のほか、土製小仏像、金箔を押した漆製品の断片やガラス玉が含まれており、丘陵上に瓦葺きの堂塔が存在したことを暗示する。出土した瓦は7世紀後半から末のものと、奈良時代末から平安時代初めのものとが主体をしめており、丘陵上の施設には仏堂・廻廊の造営以前に建てられたものと以後に建てられたものとがあって、廻廊倒壊時までの間はともに存在したと考えることができそうである。これは廻廊で囲まれた内側に堂塔が存在したか否か、奈良時代の坂田寺の伽藍全体の構成と関わる問題であり興味深いが、今後の調査によって解明するべき課題である。

軒丸瓦

型式	内区		外区		旧分類 (概報21)	7次調査 出土点数	備考
	蓮子数	弁数	内縁	外縁			
1 A	1 + 5	T 10	/	素文	I A	1 } 2	桜花形素弁
B		T 10	/	素文	(I B)		
C		T 10	/	素文	(I C)		
D		T 9 力	/	素文	I D		
E		T 9 力	/	素文	(I E)		
2 A	1 + 4	T 9	/	/	(II A)		飛鳥寺VII型式
3 A	1 + 6	T 9	/	素文	II B	1	円端点珠
4 A	1 + 5	T 16	/	素文			飛鳥寺、奥山久米寺
5 A	1 + 7	T 6	/	素文	III D	(1)	弁端反転
B	1 + 7	T 7	/	素文	(III B)		
C	1 + 7	T 7	/	素文	(III C)		
D	1 + 8	T 8	/	素文	III A		
6 A	1 + 8	T 8	/	素文	IV A	14 } 17	坂田寺式重弁
B	1 + 8	T 8	/	素文	IV B		
7 A	1 + 6	T 8	/	重圈文	V A		山田寺式
8 A	1 + 4 + 8	T 8	/	重圈文	VII A	19	善正寺式
11 A	1 + 4	T 6	/	素文			川原寺
21 A	1 + 4 + 8	F 8	/	斜素文	VII A	31 } 48 (77)	薬師寺6型式
B	1 + 4 + 8	F 8	/	斜素文			飛鳥寺X IV型式
23 A	1 + 5 + 9	F 8	/	L V		13	
25 A b	1 + 4 + 8	F 8	S 32	斜素文		1	藤原宮6233 A b型式
26 B	1 + 5 + 9	F 8	S 40	R V 64			藤原宮6273 B型式
28 B	1 + 6	F 8	S 28	L V		1	藤原宮6279 B型式
29 A a	1 + 4 + 8	F 8	S 32	L V 46		1	藤原宮6281 A a型式
31 A	1 + 8	F 6	S 24	L V	VIII A	12	川原寺622型式
32 A	1 + 8	F 8	S 16	L V		43	
41	/	巴	S				
計						200 (206)	()内は型式不明含む

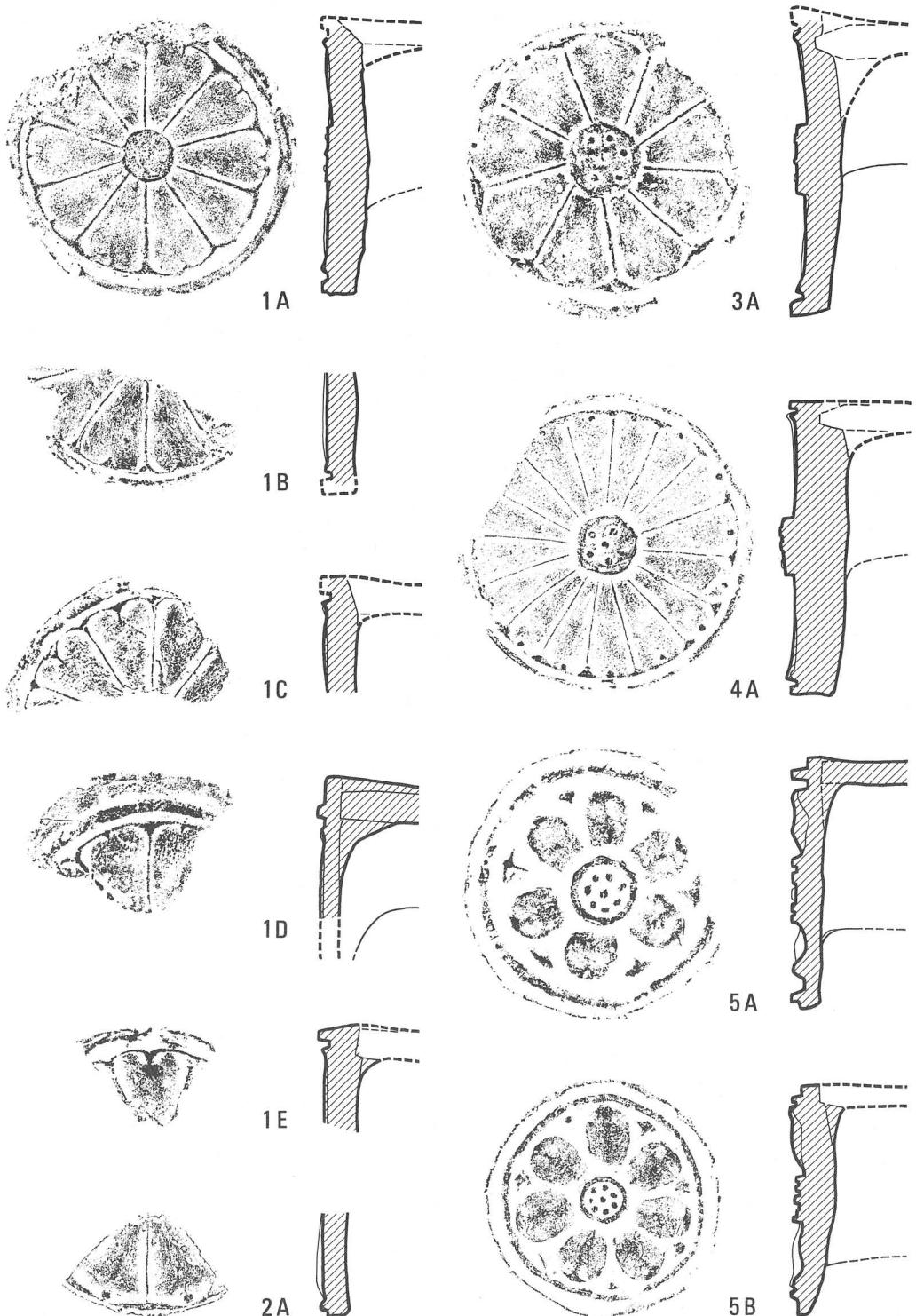
軒平瓦

型式	内区文様	外区文様			旧分類 概報21	7次調査 出土点数	備考
		上外	下外	脇			
101 A	H K (R)		/			1	手彫り唐草文
102 A	二重弧		/			1	
104 A	四重弧		/			2	
109 A	六重弧○×		/			13	藤原宮6561 A型式
112 A b	H K (R)	S 23	/	/		1 } 8 } 4 } 20	藤原宮6641 A b型式
C	H K (R)	S 23	L V 21	L V 4			藤原宮6641 C型式
E	H K (R)	S 21	L V 27	L V			藤原宮6641 E型式
F	H K (R)	S 24	L V 26	L V 5			藤原宮6641 F型式
113 C	H K (R)	S 22	S 22	S 4		2	藤原宮6642 C型式
117 D	H N (R)	S 31	L V 42	/		1	藤原宮6647 D型式
121 A	K K (R)	S 10	S 10	/		1	川原寺752型式
122 A	K K	S 10	S 10	S 1		53	
123 A	K K	/	S ×	×			川原寺763型式
124 A	K K	素文	素文	素文			
125 A	K K	S 11	S 10	S 3			川原寺771型式カ
141 A	重郭文						
計						92 (94)	()内は型式不明含む

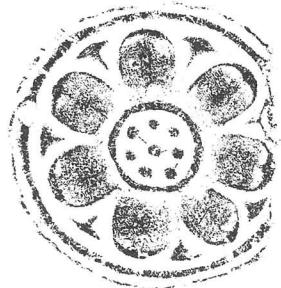
註) 軒丸瓦には1~99、軒平瓦には101~199の番号を与えた。種別はアルファベットで表現し、藤原宮と同範のものは同じ種とした。

T : 単弁、F : 複弁、S : 珠文、L V : 線鋸歯文、R V : 凸鋸歯文
H K : 偏行唐草文、H N : 変形偏行忍冬唐草文、(R) : 右偏行

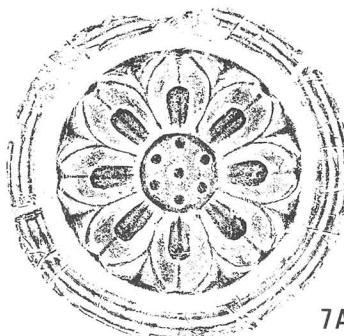
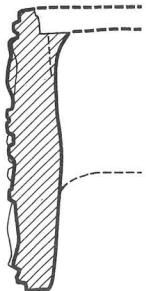
坂田寺出土軒瓦型式一覧



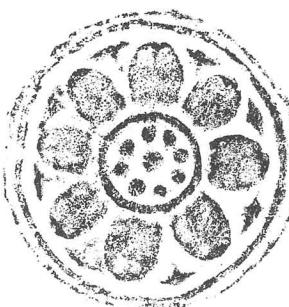
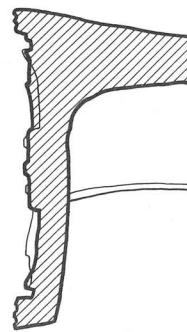
坂田寺出土軒丸瓦① (1 : 4)



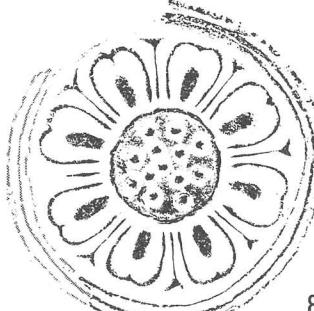
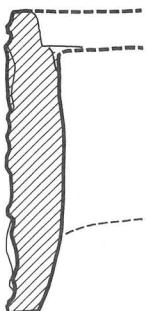
5C



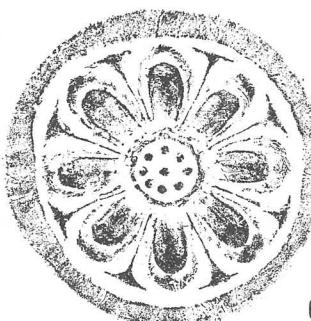
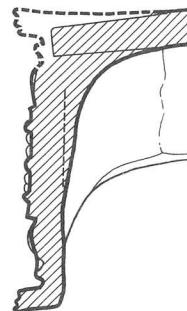
7A



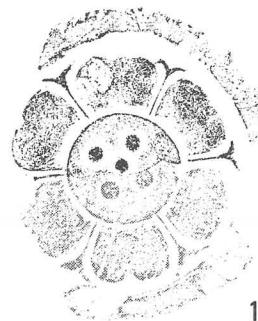
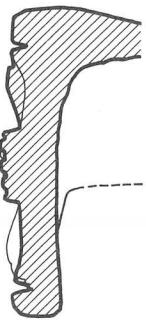
5D



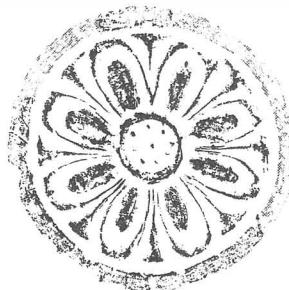
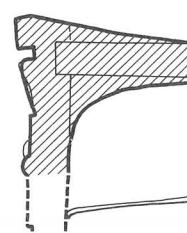
8A



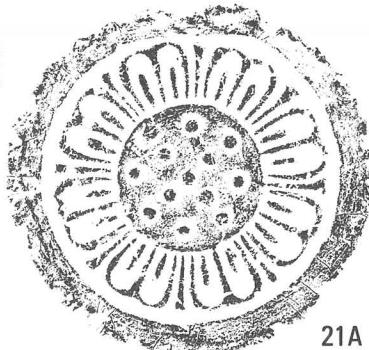
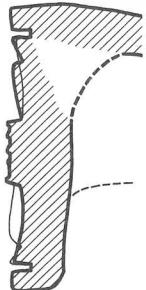
6A



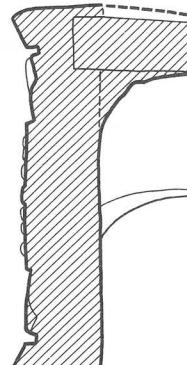
11A



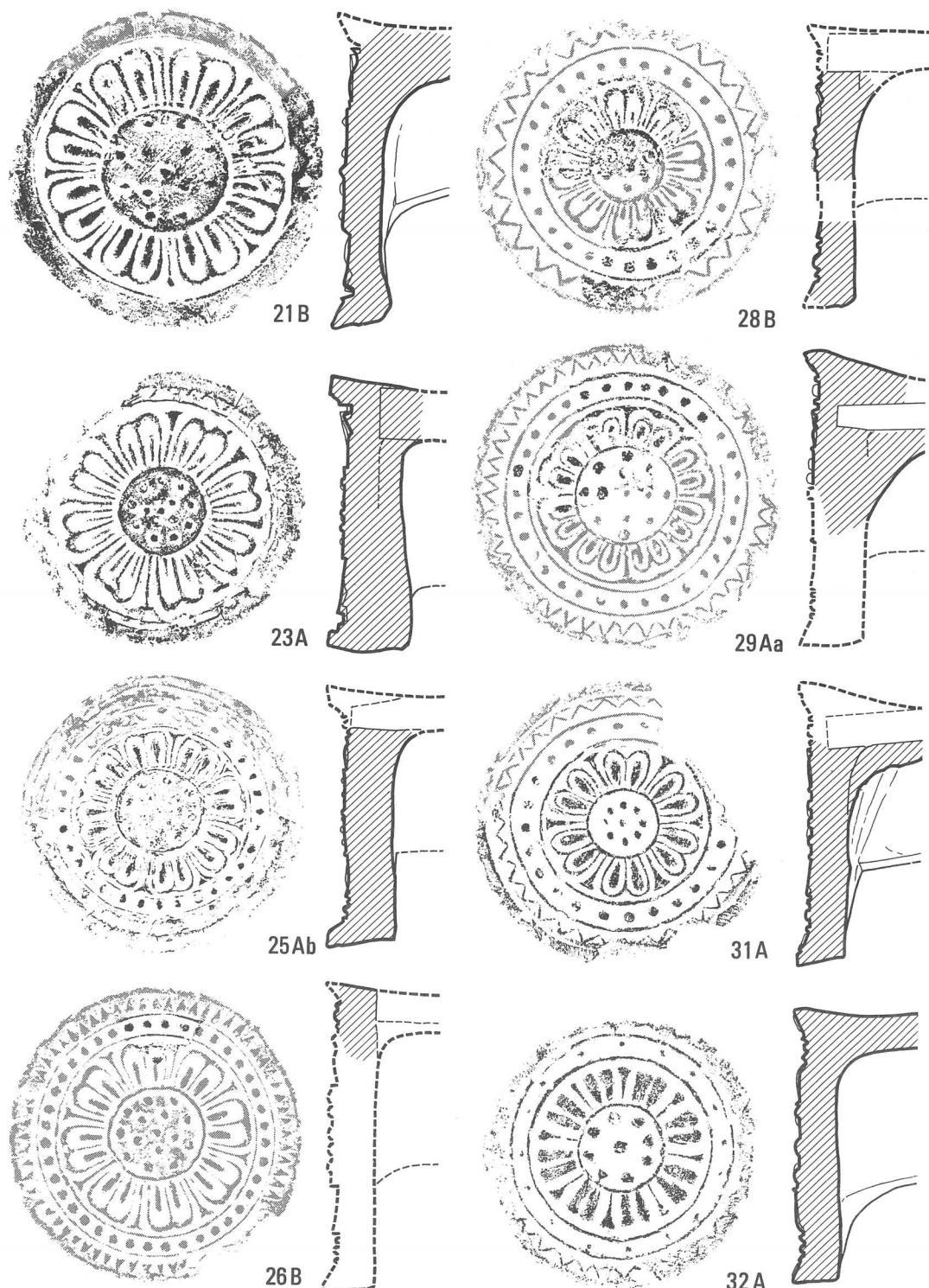
6B



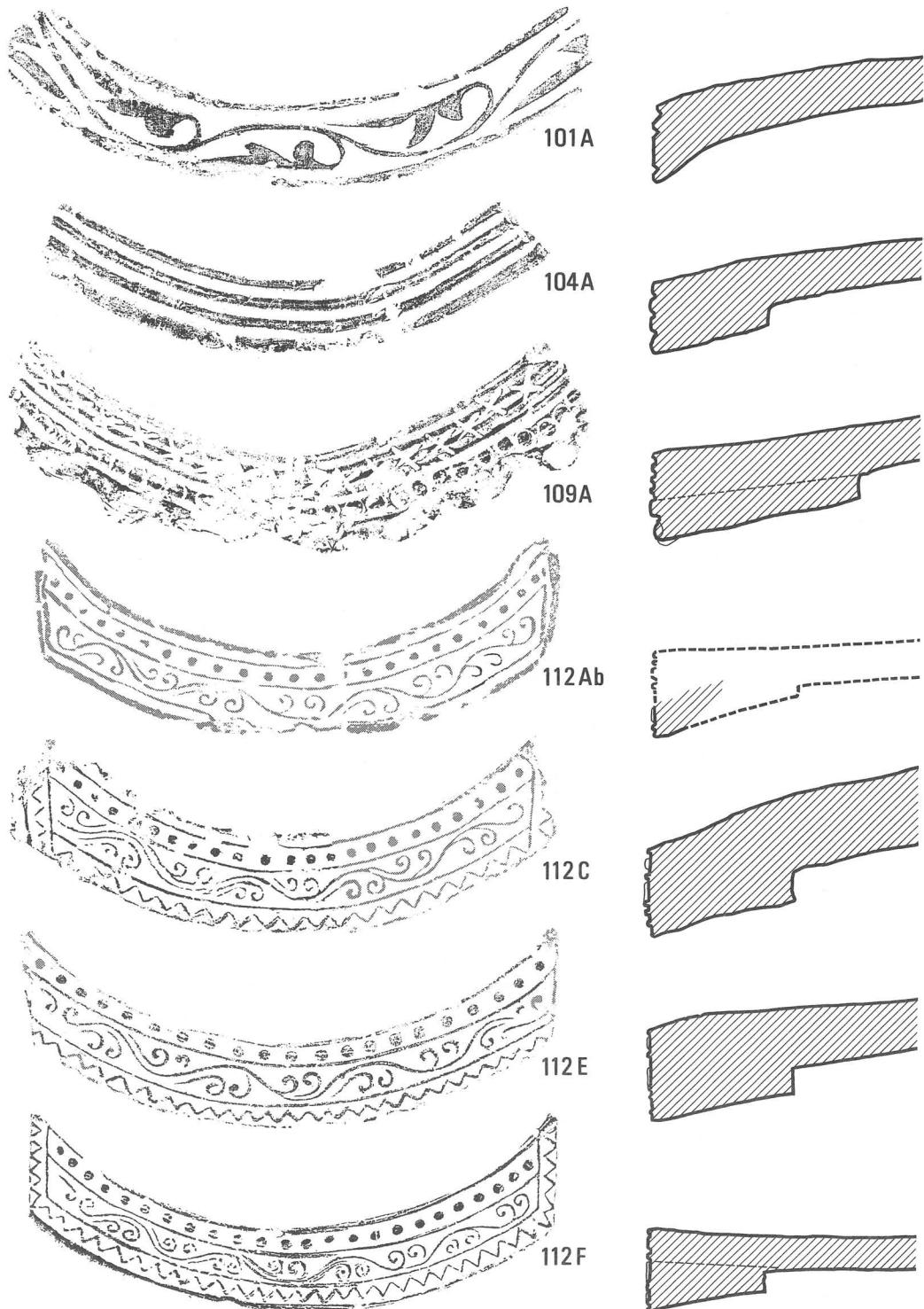
21A



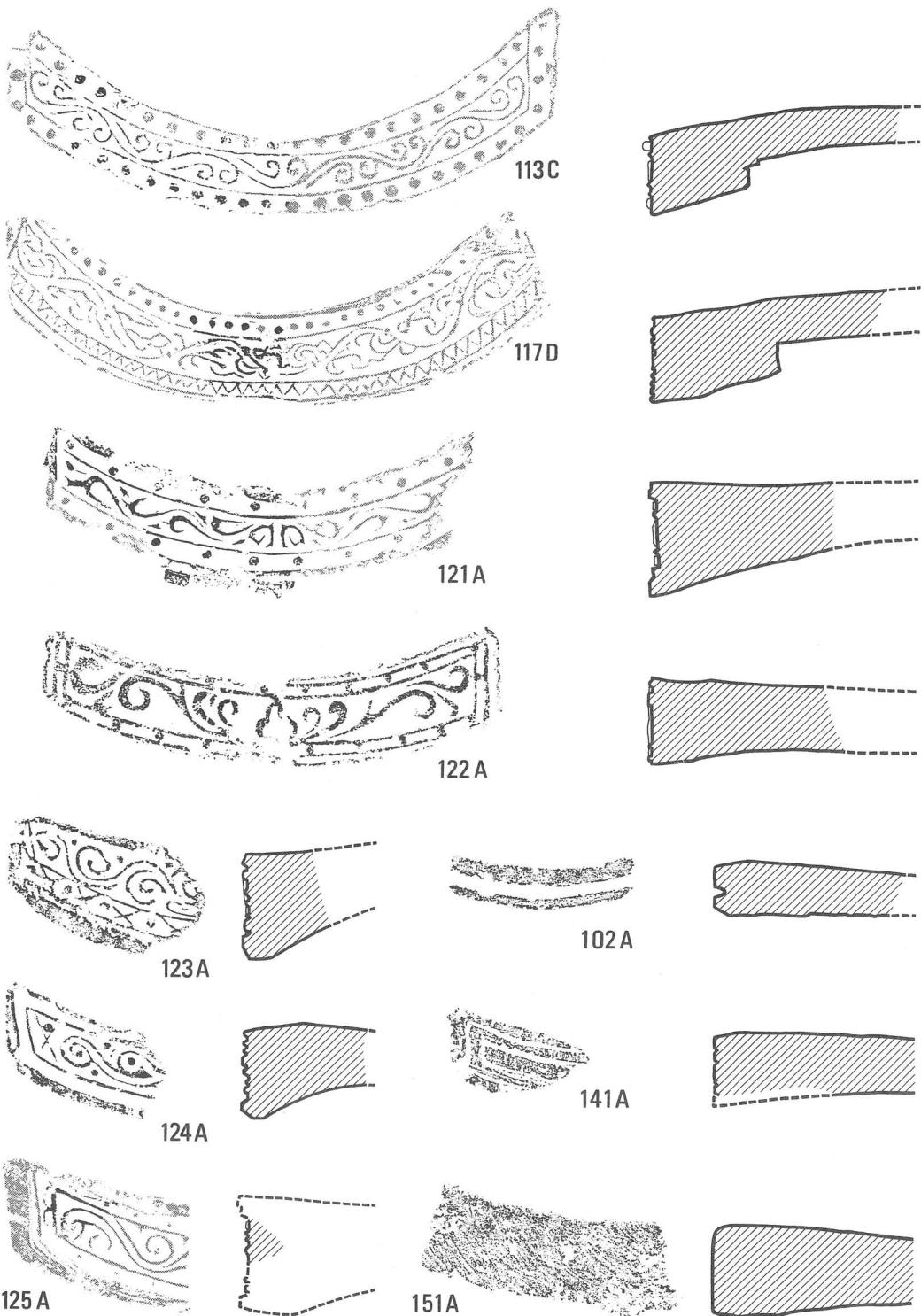
坂田寺出土軒丸瓦② (1 : 4)



坂田寺出土軒丸瓦③ (1 : 4)



坂田寺出土軒平瓦① (1 : 4)



坂田寺出土軒平瓦② (1 : 4)

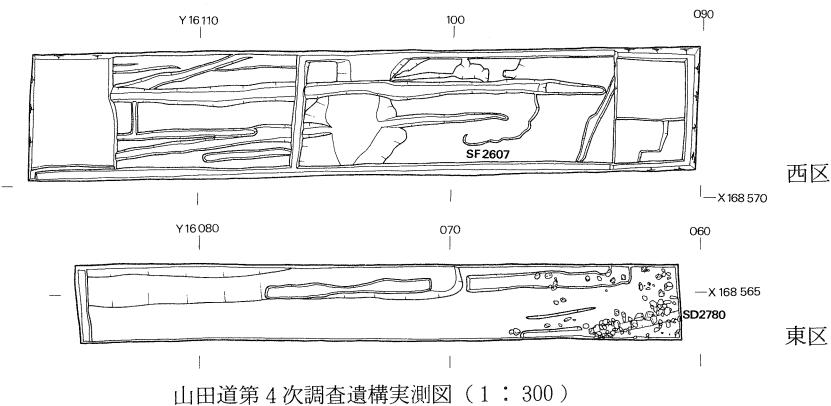
3、山田道第4次調査

(平成三年七月)

この調査は県道樅原神宮東口停車場明日香線の拡幅工事に伴う事前調査で、昭和六十三年度以来三次に亘って調査を続けてきており、その調査成果は『概報20』・『概報21』に報告している。今回の調査地は奥山久米寺の南方約200mの畠地で、山田道第1次調査区の東側にあたる。層序は、東区では耕土・床土・黄灰色砂質土・黒褐色粘土混じり黄褐色粘質土の遺構面、西区では耕土・床土・灰褐色砂質土・黄褐色粘質土・黒褐色混じり黄褐色粘質土の遺構面・黄色粘質土・黒褐色粘土（弥生時代包含層）である。

東区で検出した主な遺構は石組溝SD2780のみである。石組溝は東端で3m分検出した。長さ0.4m程度の石を0.4mの間隔で二列並べて溝としており、底石はない。深さは0.4mで、西端は石が抜き取られてその行き先は不明である。耕土直下にあるため時代の判定は難しいが石の組み方から見ると飛鳥時代の可能性がある。西区全体は遺構面が北へ向って傾斜し、そこに砂が堆積しており、発掘区中ほどから北側は流路があったと考えられる。

西区は全面が、厚さ0.1から0.2mの小礫の入った黒褐色粘土混じり黄褐色粘質土の平坦面となっており、「山田道」の路面の可能性がある。中世の東西溝及び南北の流路以外顕著な遺構はない。なお西区の北方40mの地点（昭和52年、『概報8』）で検出した南北溝SD130はこの調査区では検出されなかった。



山田道第4次調査遺構実測図（1：300）

4、飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991－1次調査）

（平成三年四月～八月）

この調査は、奈良県高市郡明日香村大字飛鳥字古池に所在する「飛鳥池」の埋め立て工事に伴い、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部と明日香村教育委員会が合同で実施した事前調査である。

まず、平成三年三月に明日香村教育委員会が池の東側と南側において試掘調査を行い、その成果をうけて四月から合同の本調査を開始した。試掘調査によつて、池の南西部に遺構および遺物包含層が良好に遺存していることが判明したので、本調査はこの部分に重点をおいた。調査は、四月五日に機械掘削を始め、八月九日に現地調査を終了した。調査面積は1190m²である。

調査地の位置と地形

調査地は飛鳥寺の東南にあり、寺域の推定東南隅からは約100mの距離がある。遺跡の東西には南から北に延びる低い丘陵があり、西側の丘陵の西斜面には飛鳥寺瓦窯がある。二つの丘陵に挟まれた谷は奥で二股にわかれる逆Y字形をしており、「飛鳥池」はその最も狭い部分を土手で閉じて池としていた。古代の地形も基本的には同じだが、西側の谷は浅く、東側の谷はかなり深かったようである。調査を行ったのはこの二つの谷のうち深い西側の谷の部分と東側の谷の一部である。遺構は主に西側の谷部に残っており、二つの谷に挟まれた池の南端部は、削平を受けて遺構は全く残っていない。

調査地の基本層序

調査地は旧地形にしたがって調査区北西辺と南部が高く、全体には北東に向つて緩く傾斜している。最上層には池底の堆積層が厚く堆積する。北部西半では池底堆積層の直下で花崗岩の岩盤があらわれるが、東側の谷部では池底の堆積層の下に灰色粘砂層と炭混暗灰色砂質土層が堆積している。花崗岩地山上面、あるいは炭混暗灰色砂質土層の下の整地土層（明灰緑色粘質土層など）上面で遺構を検出した。南部では調査区東半で池底の堆積層直下、あるいはその下層の炭混灰褐色土層の下で花崗岩地山や黄褐色粘質土の整地土層・炭層があらわ

れるが、中央やや西よりの谷部には平安時代の遺物を含む炭混暗褐色土層がある。遺構は主に整地土層上面で検出した。さらに、調査区南部では整地土層の下で石敷や井戸・石組溝などの下層遺構を検出した。

遺 構

調査によって検出した遺構は、掘立柱建物 8 棟、掘立柱塀 4 条、炉跡10基以上、石敷 4 、石組溝 2 条、井戸 1 基、素掘溝、土坑などである。遺構の時期は大きく、平安時代、藤原宮期、7世紀中頃の3時期にわかれれる。

＜平安時代の遺構＞ 谷 (SD809) に沿った素掘溝SD771がある。調査区南西辺では幅0.4m、深さ0.45mあり、谷筋に沿って北東に延びる。調査区北部では幅広くなるが、深さは0.2mと浅い。埋土は炭混黄灰色ないし灰色の砂である。

＜藤原宮期の遺構＞ 整地土の上面で、掘立柱建物・掘立柱塀・炉跡・井戸・溝・土坑を検出した。これらは金属製品などの製作に関連する遺構である。さらに、谷筋 (SD809・810) に堆積した炭層と粗炭層からは、土器・瓦・木器・木簡・金属器等が大量に出土した。これらの大半は金属製品（鉄・銅）・ガラス製品・木製品の製作に関連する遺物である。

掘立柱建物 ほぼ方眼方位にそったSB748・SB754・SB757と、北で東にふれるSB767・SB785・SB805・SB808がある。

方眼方位にのる3棟はいずれも調査区の南西部にある。SB748は柱間1.8m(6尺)である。SB754は梁間、桁行とも2.4m(8尺)等間の南北棟であろう。SB757は東西の柱間2.4m(8尺)、南北の柱間3.0m(10尺)である。この2棟は重複しており、SB757が古い。

北で東にふれる建物は調査区の北半にある。北辺に位置するSB805は2間×3間の建物で、斜面を削って平坦面を作り、山側に2条の排水溝SD803とSD804を巡らす。梁間2.2m等間、桁行は総長6mを1.8m(6尺)2間と2.4m(8尺)に3分する。SB808はこのSB805北東妻に重複する建物で梁間総長は4.4m、SB805と同じである。桁行の柱間は1.8m(6尺)で、2棟は側柱筋をほぼ揃える。新旧は不明である。

SB785はSB805の南東にある。規模は2間×2間であろうか。桁行2.7m(9

尺) 等間、梁間約3.9mである。南西の妻付近に炉跡SX788とSX791がある。SB781はその南西にある小規模な掘立柱建物で、梁間2.4m、桁行3.2mである。北西妻柱筋はSB805の側柱筋にはほぼ揃うので、2棟は一体のものであろう。建物内部に炉跡SX774～776・SX787がある。これらの建物は内部やその近辺に鍛冶炉跡があるので、工房であろう。

調査区西辺にあるSB767は2間×3間の建物である。梁間1.8m(6尺)、桁行は2間が1.65m(5.5尺)、1間が0.9m(3尺)である。

掘立柱塀 塀SA748とSA751は調査区の南西部にある。SA748は柱間1.8m(6尺)の2間、SA751は3.0m(10尺)である。SA748は近接して炉跡SX750があるので建物の一部かもしれない。塀SA753は大型の土坑SK770や炉跡群の南にあって、南西から北東方向へのびる。4間分検出し、柱間は3.0m(10尺)等間で、柱掘方は長辺が1mをこえ大型である。柱筋はSA751やSB785の側柱筋とほぼ並ぶ。この塀の南には廃棄物堆積層ともいえる炭層が広がる。作業区域の東南を限る塀であろう。SA756とSA759は調査区の西端にあって、互いにほぼ直交する2条の掘立柱塀である。SA756は北東から南西にのび、柱間1.5m(5尺)である。3間分を検出した。SA759はその北東にあって西北西から東南東にのびる。柱間1.8m(6尺)で3間分を検出した。

鍛冶炉(91頁図参照) 直径35～40cm、深さ10cm前後の円形の炉跡が10基以上ある。これらは地面を掘り下げただけのものと、穴を掘ったあと内側に粘土を貼り付けたものとがある。壁面は赤褐色ないし赤紫色に変色し、炉周囲の土も赤変が著しい。炉内部には厚さ10cmほど炭が充満する(例えば図2、SX791参照)。

炉SX788(図1)は同じ所で6つの炉(I～VI)が重なっており、古いものの内側に土をいれて粘土を貼り、かさ上げしながらつくり替えている。各々の炉は壁面が赤紫色に変色する。最下層のSX788VIは東西約75cm、南北50cm以上ある。内側になるほど上面を削平されているので検出した大きさは小さくなるが、本来はほぼ同じ規模であったのだろう。最終の炉跡(SX788I)の内部には炭が充満していた。

炉SX774～776(図3)は検出面では3基の炉が位置をずらしながら重複して

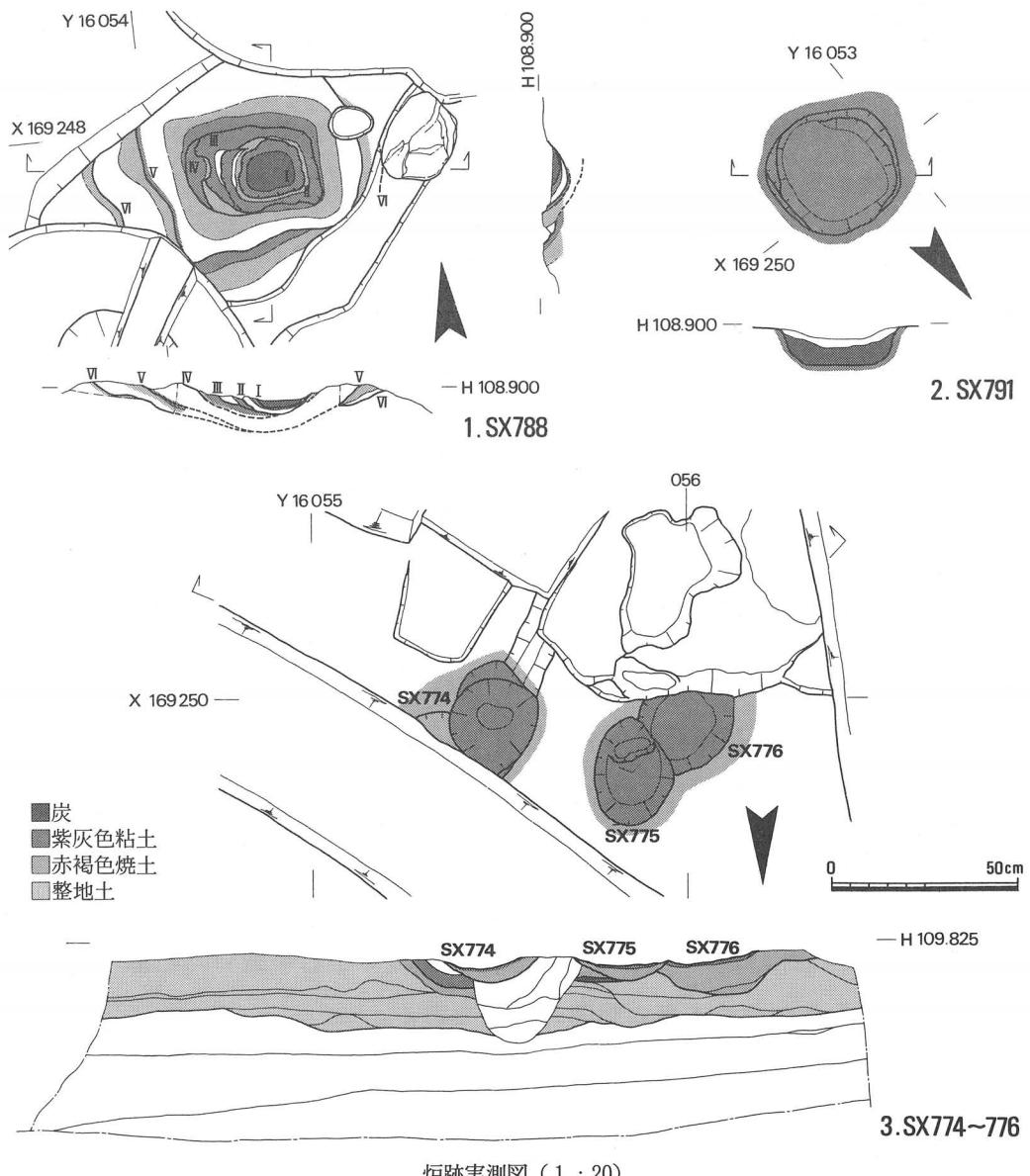


飛鳥池遺跡調査遺構図 (1 : 200)

0 10m
Y 16 050

いたが、断ち割ったところ、その下層にも少なくとも2基の炉跡があり、近接した狭い範囲で何度も炉をつくり替えていたことがわかった。SX788と同じく、古い炉を埋めその上に新しい炉を築く。これらの炉跡は、先にのべた掘立柱建物SB781とSB785が覆っていたものと考える。

SB805の南西にある炉SX800はSB805に関連するであろう。直径約60cmあり、内部に炭が充満する。炭の中からは銅釘や銅切り屑・銅塊が出土した。



このほか、調査区南端に小型の鍛冶炉が1基（SX750）あり、西部にやや大型の炉跡（SX760）がある。SX760は幅約50cm、残存する長さ約1mで、床面および周囲の壁が赤褐色に焼けているが、他の鍛冶炉のように内部に炭の堆積はなかった。

井戸 井戸SE777は曲物側板を枠とする。枠は一段のみで、掘方の径0.6m、曲物径45cmである。

炭層・粗炭層 建物SB785や塀SA753の南から東にかけては、多量の炭・灰を交えた遺物包含層があった。この層は、調査区南西から北東に延びる浅い谷SD809と、その前面にあって南東から北西に延びるやや深い谷SD810に堆積した産業廃棄物の堆積層であり、その中から、鉄・銅滓、鞴羽口、鋳型、坩堝、鉄製品、銅製品、銅切り屑、須恵器、土師器、瓦、木器、木簡、砥石などが出士した。

<7世紀中頃の遺構> 藤原宮期の遺構が形成された整地土層あるいは同時期の炭層の下層で検出した。石敷遺構4箇所、井戸1基、石組溝2条などがある。

石敷SX815は、南北約4.2m、東西約3mの規模で、南側約半分にコ字形に列石を巡らせ、その中には拳大の石を、北側には人頭大の石を敷き詰める。石敷の北辺には列石SX817があり、コ字形列石の二辺とほぼ平行する。これが石敷の北限であろう。石敷面は地形に沿って北へ緩く傾斜する。石敷の南側と東側には溝が巡る。南側の溝SD813は素掘で、これを挟んだ南側は一段高いテラスになる。東側の溝SD816は石がかなり抜けているが、元来は両側を石で護岸してあったようだ。石敷SX815をはずれると護岸の痕跡はなく、素掘りの溝である。SD813とSD816はSX815の南東隅でつながり、ここにさらに南上段にある素掘りの南北溝SD811が注ぎ込む。

石敷SX814は石敷SX815の西側で一段低い所にある小石を敷いた石敷である。西側を後に削られたため本来の範囲は不明である。

石敷SX818は、石敷SX815と北西の井戸まわりの石敷SX823をつなぐように作られた舗道状の石敷で、幅約0.5～0.6m、長さ約7.2m、南端が約1m高い。南東側は、花崗岩岩盤を削り込んで急な斜面となる。この斜面と石敷面との間に

は底幅0.3mほどの素掘り溝SD819がある。溝SD819は北東端で石組SX820につながり、SX820は石敷SX818を斜めに横切って石敷SX823の西側にある石組溝SD825につながる。

石敷SX823は、井戸SE822の周囲に設けられた石敷である。東西約4.0m、南北約4.5mで、石敷SX815やSX818と同じように、南側の花崗岩岩盤を削り込んで平坦面を作り、その南端に井戸SE822を掘る。敷石は長さ30cmほどの人頭大のものを上面に敷くが、下層に拳大までの小石を敷いており、一度改修したようである。西側を石組溝SD825（内法約20～30cm、一部に小石敷）が囲む。東側にも弧状に並ぶ石列SX824が残るので、南側を除いて周囲に石組溝を巡らせていた可能性が強い。石組溝SD825には積み直しがあり、これは石敷SX824の改修と関連する。

SE822はSX823の南端にある横板組の井戸である。一辺約0.8m、深さ約1.6mで、横板は北3段、東・南は4段、西は5段が遺存する。最下段だけ内側に横桟をかませる。隅柱は建築材の転用、横板にも転用材が目立つ。掘方の下層には河原石を詰め込んでいた。掘方から完形の平瓦、埋土最下層から土師器や須恵器が出土した。

このほか、藤原宮期の建物SB805の下層でSD809の堆積層（灰色シルト層・灰緑色粘砂層）を掘り下げた。土器・瓦・木器が出土し、少量の金属器・轔の羽口や漆壺が含まれる。井戸SE822からほぼ北北西に向かって谷地形が延びていたものと推定できる。

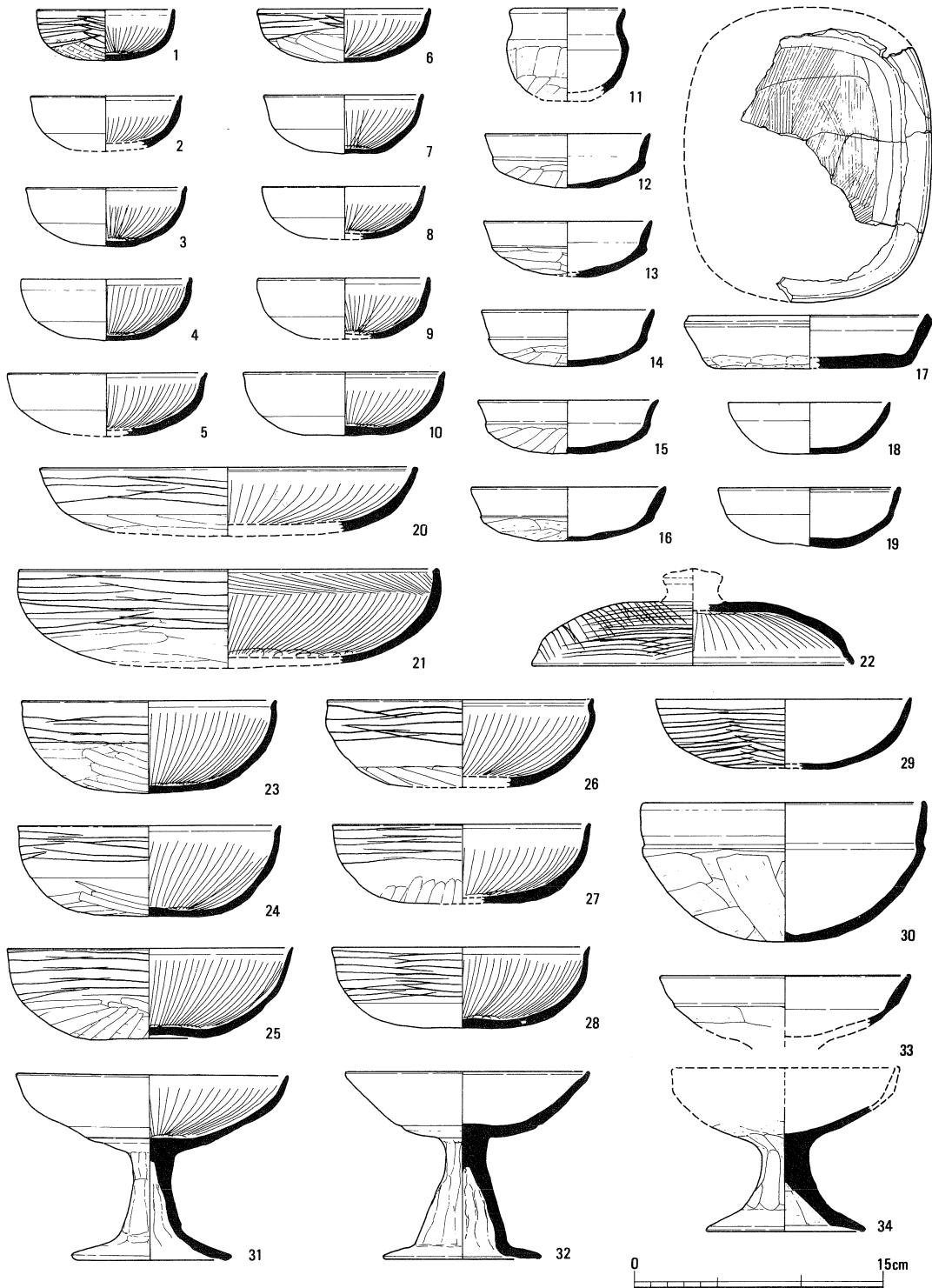
遺 物

出土した遺物は多く、材質では、瓦塼類、木簡・木製品、金属・金属製品、土器・土製品、石製品がある。そのうち特に工房関係の遺物は木器・金属・土製品・石製品にまたがる多種多様な内容をもち、銅・鉄などの金属製品、ガラス、木製品の製作に関連する。しかし、理化学的な分析を必要とする点も多く、整理はまだ緒についたばかりであり、内容の解明にはなお時日を要す。ここでは遺物の種類と数量について材質別に概要を示すとともに、特に注目すべきいくつかについて簡単に紹介することにしたい。

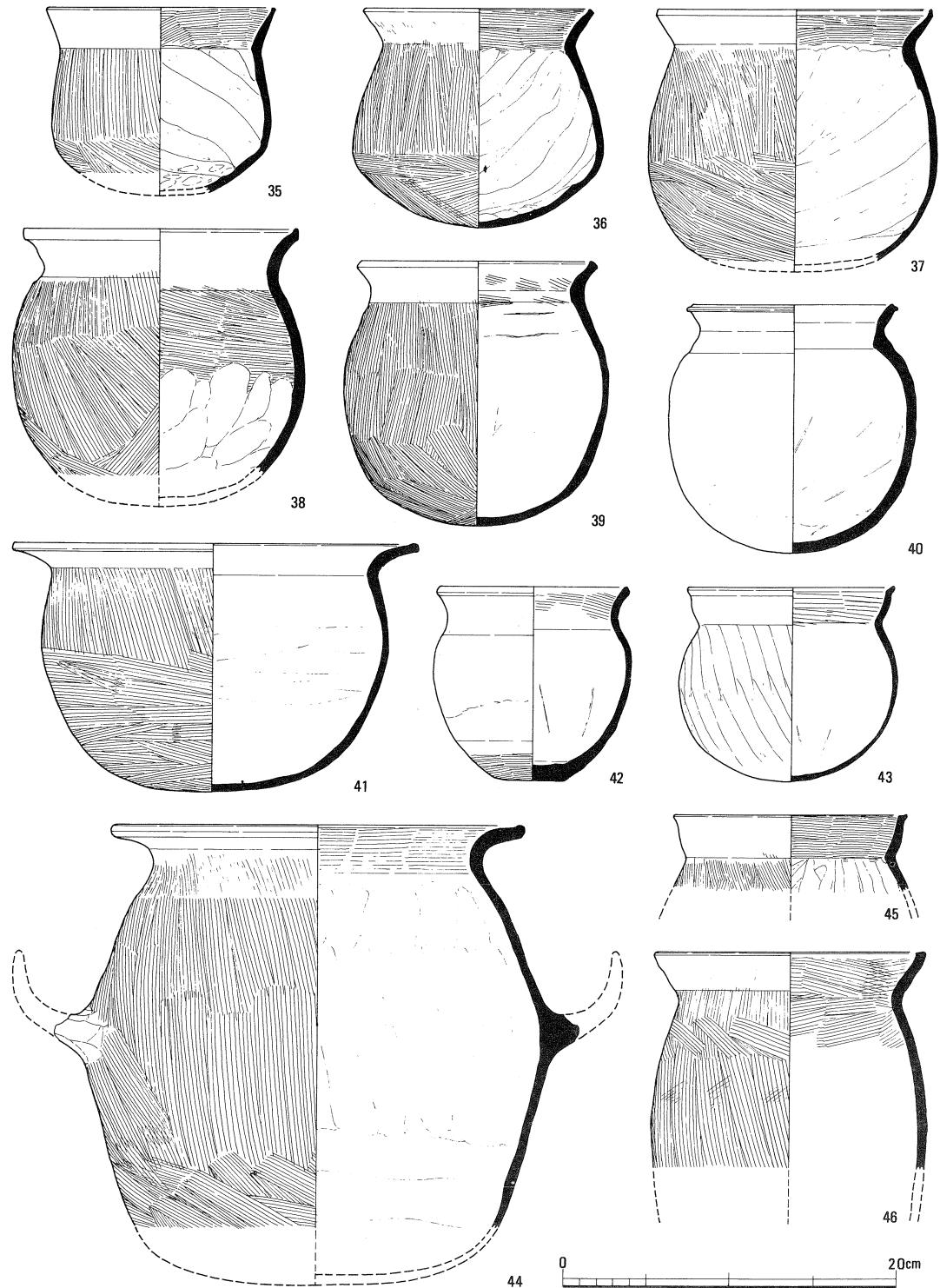
土器 土器には多量の土師器・須恵器、少量の緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などがあり、時期の上では灰緑色粘砂層の7世紀前半代と炭・粗炭層の主体を占める7世紀後半から8世紀初めの土器が多く、6世紀初めおよび平安時代の土器が少量ある。それらは現在整理途上であるので、7世紀前半代の良好な資料であるSD809の堆積層、灰緑色粘砂層の土器についてのみ紹介しておく。

灰緑色粘砂層の土器には土師器・須恵器がある。土師器の器種には杯、高杯、皿(20)、鉢(21)、蓋(22)、小壺(11)、台付鉢、甕(35~40・42・46)、鍋(41)、甌があり、杯、高杯、甕のほかは少量である。杯にはC・H・Gの3種があり、口縁を横ナデするだけのG(18・19)は少ない。また、折敷に似た隅丸長方形の杯(17)は珍しい。杯Cは口径8.2~17.2cm、径高指数32~36で、法量によってI~IIIに大別される。そのうち杯C IIIは口径に8.2~10.7cmの幅あるが、径高指数36に限れば約6mm間隔の口径差をもつまとまりがあり、重ねると互いに内接する。これは杯C I・C IIを外容器とする重鏡構成をとるものと理解され、C IIIが单一法量に集約される前段階にあることを示している。杯C Iでは外面ヘラケズリ調整が大半で、その手法には底部と周縁を5分割で削るもの(23)、3分割のもの(24・25)、底部のみを1方向に削るもの(26・27)の3態があり、後2者が主体を占める。このケズリの3態は工程の省略過程を示す。ナデ調整の28は器高が低く、内面の螺旋暗文が二重に施される点で新しい傾向にある。杯C II・IIIの外面調整はナデ調整が大半で、ケズリ調整の1・6にはミガキが残る。高杯にはC(31)・H(33・34)・G(32)があり、やはりGが少ない。杯C Iにナデとケズリがほぼ等量ある坂田寺SG100より古く、高杯Cの杯部が浅く外面のヘラミガキが省略される点で川原寺下層SD02より新しい。

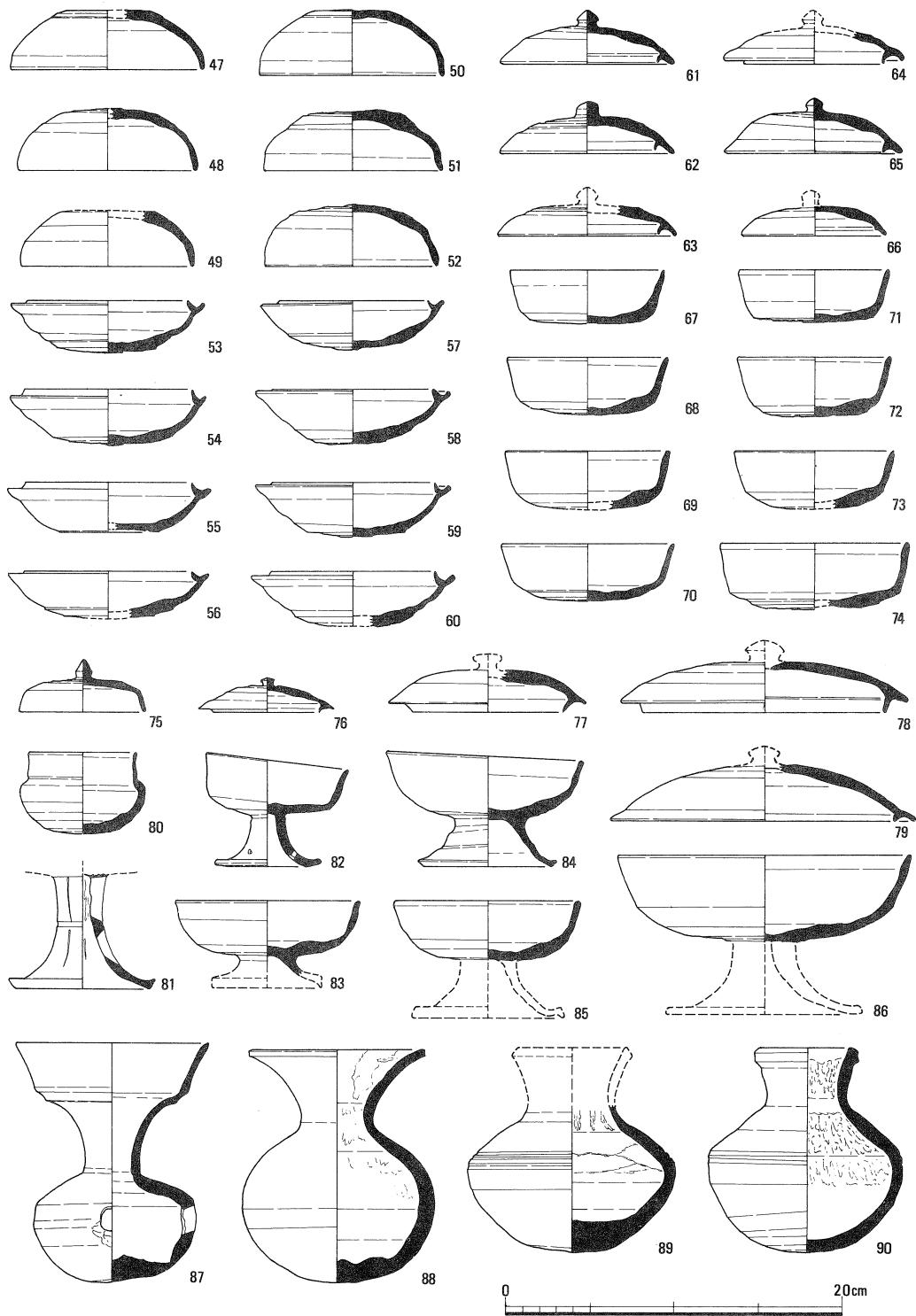
須恵器には杯H、杯G、高杯(81~86)、蓋(75~79)、鉢、平瓶、聰(87)、細頸壺(95・96)、台付長頸壺(92~94)、短頸壺、甕などがあり小型の壺(88・89・90)は漆容器である。杯H(47~60)は蓋口径10.2~11.3cmで主体は10.6cm、ヘラキリのままかナデ調整である。杯G(61~74)は身口径9.0~11.1cmで主体は9.6cmである。蓋66は混入品であろう。身の調整にロクロケズリとヘラキリがあり、ヘラキリは少量である。杯Hには朱の付いたものや灯火具と



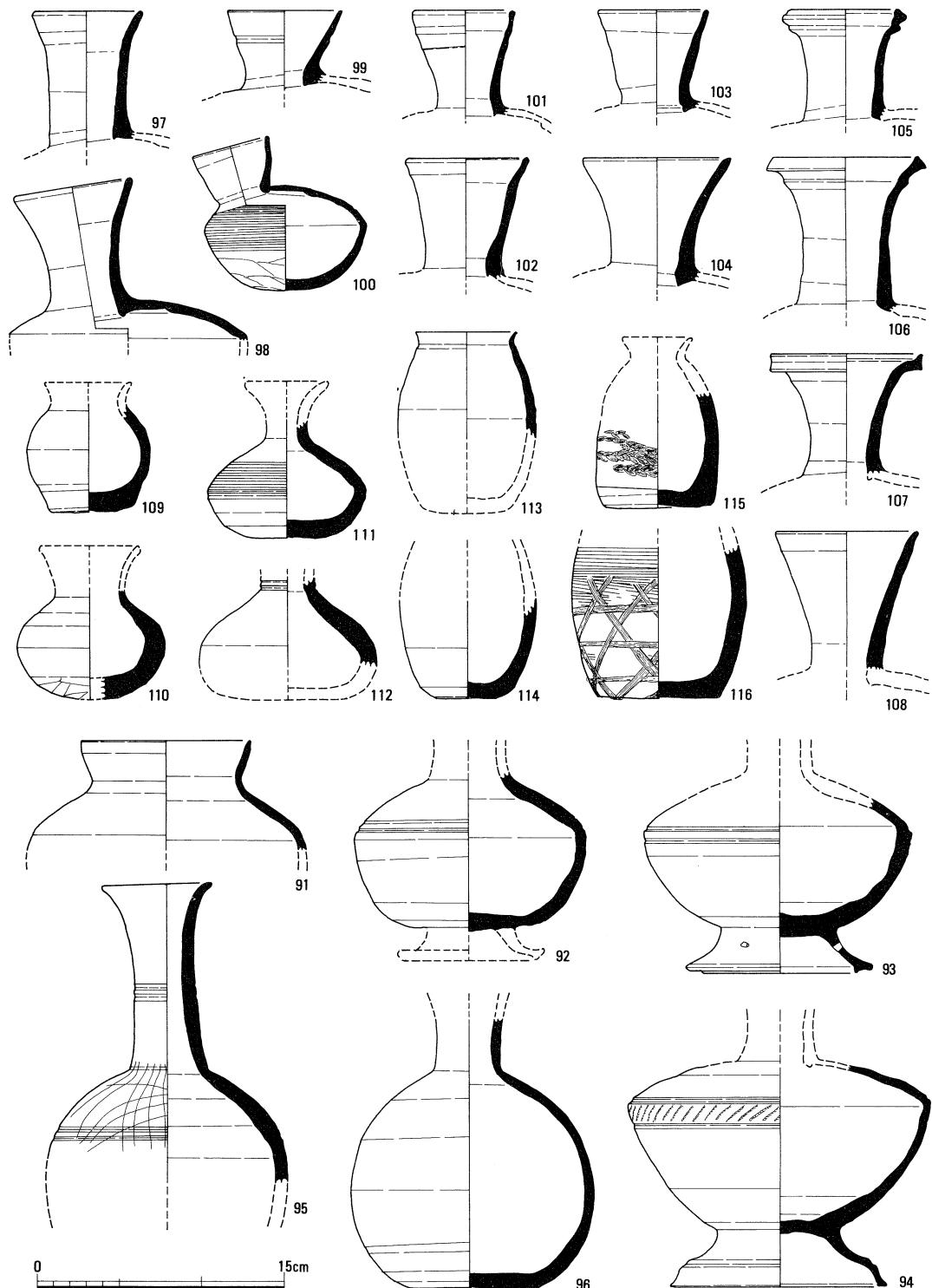
出土土器① 1~34 : 灰綠色粘砂層土師器 (1 : 4)



出土土器② 35~46：灰綠色粘砂層土師器（1：4）



出土土器③ 47~90：灰綠色粘砂層 須恵器、88~90：漆容器 (1 : 4)



出土土器④ 91～96：灰綠色粘砂層須惠器
97～116：各層出土漆容器各種 (1 : 4)

して利用したものがある。杯Hと杯Gとはほぼ等量で、やや杯Hが多い。杯Hの多い山田寺下層資料よりも小型で、杯G・Hが等量ある坂田寺SG100のそれよりも大型であることから、両者の中間に位置づけられる。

土師器、須恵器ともに杯類の主体は単一な内容をもち、それに僅かな量の新しい傾向の個体が含まれる点で一致している。土師器須恵器を総合して飛鳥地域の他の土器群との前後関係を示すと、川原寺下層S D 02→山田寺下層S D 61 9及び整地土→飛鳥池→坂田寺S G 100のように位置づけられる。

なお、灰緑色粘砂層には、工房関係遺物の鞴羽口・鉱滓・漆容器・とりべ等が少量含まれる。これらの遺物の出自の検討は、遺跡の工房としての成立時期、灰緑色粘砂層の土器群の器種構成の理解の上で重要である。現時点では、完形の漆壺や金属片などが一定量含まれている点から、灰緑色粘砂層の示す時期には工房として成立しているものと考えておく。

土器で注目すべきものに炭層を中心に出土した約800点以上の漆付着土器がある。漆付着土器にはパレットとして使用した杯皿類と、容器として使用した壺類(97~116)がある。壺には大小多様な口縁の平瓶があり、製作時期や产地の違いを反映している。他の器種には横瓶・台付長頸壺・短頸壺などがあり、特異な徳利形の小壺など漆専用の土器と思われるものがある。それらに共通した特徴は、栓のしやすい口の小さな器種である点である。また、外面に縄(115)や籠(116)が固まりついたものがあり具体的な使用の姿を彷彿とさせる。

墨書土器には7世紀末頃の土師器鍋の体部外面に「石河宮」「烷」、甕の体部外面に「養戸」、須恵器杯Aの底部外面に「祚」と書いたものがある。「石河宮」は木簡の「石川宮」と同一宮名とみられ興味深い。

土製品 鞍羽口・坩堝・とりべ・鋳型・炉壁のほかに土馬・円面硯・転用硯・土製円盤などがある。

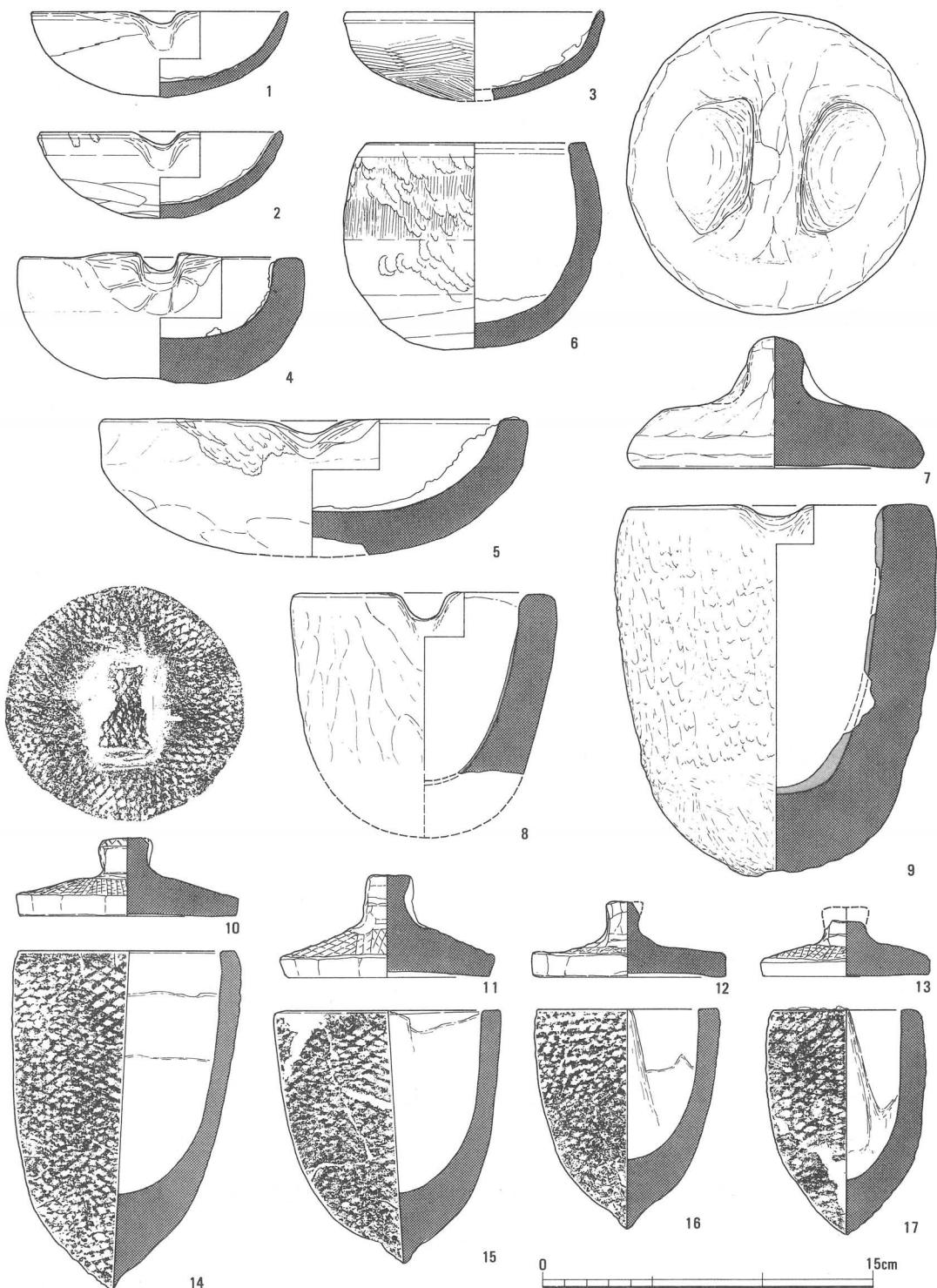
鞍羽口は総数520点以上あり、おもに炭層から出土した。大きさで内径2.5cm、長さ20cm程のものが大半を占め、内径2.0cm、長さ15cm程のものが少量ある。また、外表に「大十(本カ)」とヘラ書きした個体がある。

外表に著しい加熱の跡がみられる坩堝には砲弾形や椀形がある。それぞれ約

5個体出土している。砲弾形には大・小（9・8）があり、いずれも片口につくる。内面はなめらかな放物線を描き、型作りの可能性がある。外面は焼けただれて調整は不明である。石英粒を多量に混ぜた粗い胎土で、内側に極めて細かい真土を塗る。口縁端部にのこる痕跡から蓋が被るとみられ、円餅状の蓋（7）がそれにあたる。深い椀形の6は外面を刷毛目調整し内面に真土を塗らない。片口か否か不明である。外表の加熱はさほど著しくないが黒色に変色し、内表は白色である。これも蓋を被せて使用している。これらで溶解した物質については蓋（7）に付着する物質からは銅が多量に検出されたが、坩堝本体には明瞭な付着物が無く、詳細な理化学的分析の結果を待ちたい。

肉眼でも溶解物質の判る坩堝にガラスの坩堝（14～17）がある。ガラス坩堝は石英粒を多量に含む粗い胎土で、砲弾形をなし、底部先端が乳頭状に尖る。おもに炭層から約90個体が出土した。外面は斜交格子叩きを施し、内面は平滑でなめらかな放物線を描き、型作りと見られる。内面に緑・赤褐・黄褐・乳白濁色のガラスが残り、外面には火襷き様のむらがみられる。口径でI（内径8.5cm）、II（6.5cm）、III（5.5cm）に分類でき、I・IIはさらに深さで13～8.4cm・9.2～6.4cmに細分され、都合5類以上に分類できる。それぞれの容量は、I:480～330cc（使用容量380～270cc）、II:250～160cc（180～80cc）、III:120cc（90cc）である。ガラス坩堝には蓋（10～13）が伴う。蓋は円盤状をなす笠部の上面中央に隅丸長方形のつまみを付けるもので、笠部とつまみの頂部に身体部と同様の斜交格子叩きを施し、笠部側縁を切り落とす。外表が被熱し内面にガラスが付着して坩堝口縁の痕跡が付く。約70個体出土した。蓋の径は身口径に準じた13～7.5cmである。約9割が11～8.5cmの大型で、小型のものは少ない。ガラス坩堝は平城京内や石川県寺家遺跡など10遺跡に出土例があるが、いずれも多くて数点であり、蓋は今回が初例である。

内面に著しい加熱をうけた「とりべ」は椀形の厚手のもの（4・5）と土師器と同様のつくりで薄手のもの（1～3）がある。いずれも片口に作り銅湯玉やカラミが付着する。炭層を中心に約200点が出土したが、厚手は少なく、薄手には他に土師器甕を半裁して転用したもの、須恵器杯・壺を転用したものがある。



炭層他出土土製品 とりべ・埴堀・ガラス埴堀 (1 : 3)

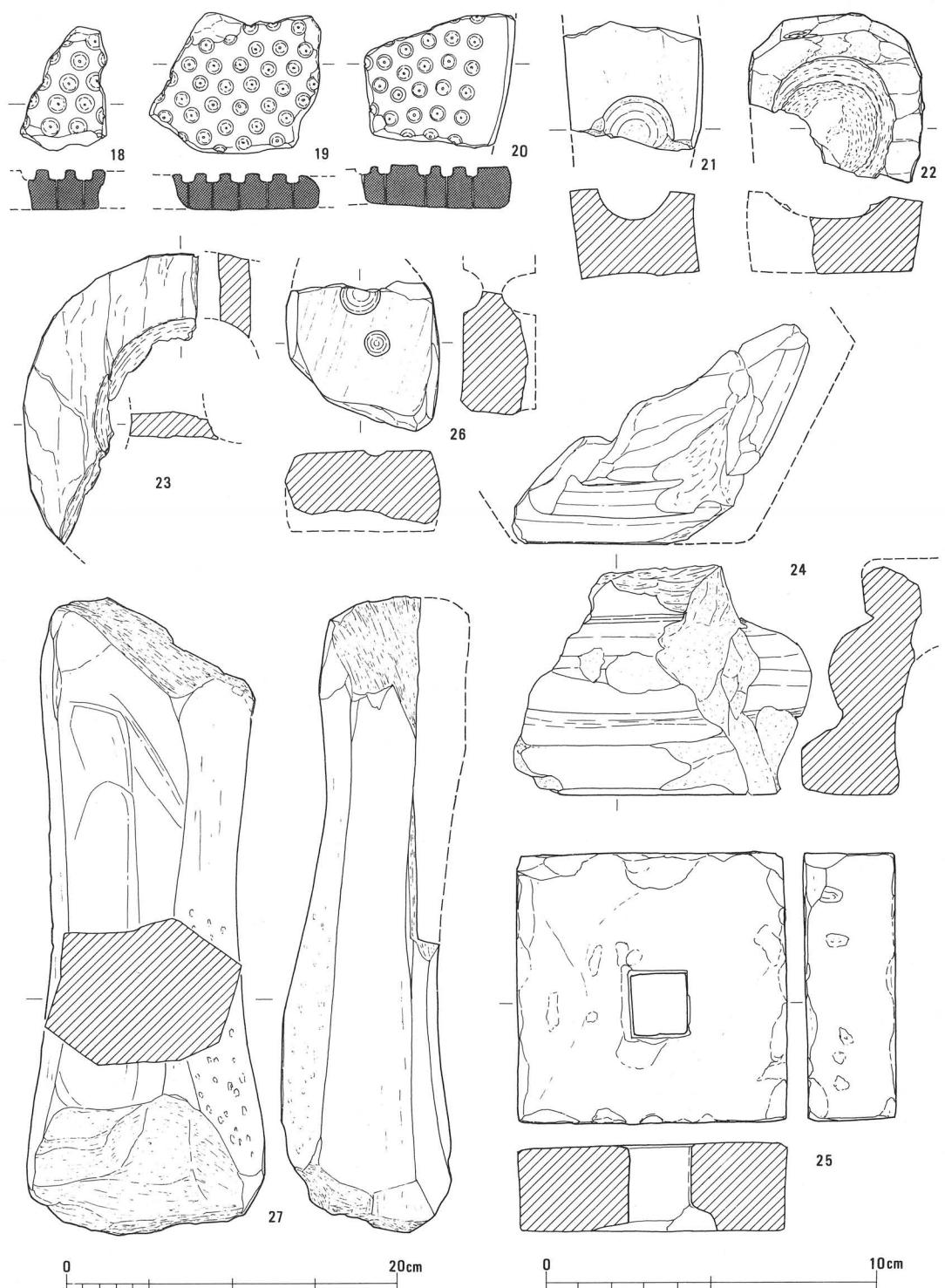
鋳型のほとんどは製品の種類が明らかでないが、ほどを作った小型の合わせ型が多い。製品の判るものでは仏像型と海獣葡萄鏡型（写真図版参照）が注目される。仏像型は幅5.0cmの板仏の型で、菩薩立像を表わした原形に細粒の粘土を押しつけて作っている。長方形で素文の背面の型を合わせて別の粘土で封じ、脚部から湯を流し込む。海獣葡萄鏡の鋳型は外縁から外区にかけての細片で、面径は明かでないが20cm以上の大型鏡であろう。連続する花文と葡萄を啄む翼を広げた鳥の一部が残る。極めて微細な胎土で暗灰色を呈する。炭層から出土した。

ガラス小玉鋳型（18～20）はガラスの表面張力を利用した片面だけの型である。粘土板の一方の面に直径5mm前後的小孔を多数並べ、小孔の中央には1mm未満の細孔が下面まで貫通する。3点出土し、小孔の直径に大小2種がある。下面の細孔周辺は他よりも熱による変色が強く、細孔にガラスの残るものがある。類例は天理市布留遺跡・橿原市四条大田中遺跡等7遺跡から出土し、5世紀後半と7世紀末～8世紀前半の2時期のものが知られている。

石・石製品 砥石のほかに石製鋳型、ドーナツ形の滑石製品（23）、粗粒の砂岩製で一辺8.0cmの方形板の中央に方孔を開けたもの（25）、同質で六角小石塔の一部と思われるもの（24）などがある。石製鋳型（21・22）には石英斑岩の平滑にした一面に半球形を彫ったものが3点ある。型の周辺に黒色物質が付着する。

砥石は2.5～40cm大の多様な大きさのものが約990点ある。大型・中型の「据え砥」は少なく、小型の「持ち砥」が多い。「持ち砥」には三角形・角形・多角柱形など特異な形になるまで使い込んだものが多い。石材は砂岩が多く、片岩・石英斑岩がそれにつぎ、粘板岩・花崗岩・榛原石が少量ある。小型で三角形のものは現代の漆工が使用しているものと酷似し、多数の円弧で角形をなすものは円棒状のものを研磨したことを推測させるなど、その形状、材質の粗密・硬軟、研磨の痕跡から研磨対象や工程を推測できそうである。

製品以外では砂岩の切石・榛原石・流紋岩の板石が多量にあり、凝灰岩片が少量ある。切石は一辺26cmの方形、厚さ12cmで一つの面に著しい加熱を受け、



土・石製品 (18~20: 小玉鋳型、21~22: 石製鋳型、23~25: 石製品、26~27: 砥石; 27は $\frac{1}{4}$ 他は $\frac{1}{2}$)

板石は一面が摩耗していて、炉の障壁や作業台であろう。また、一部がガラスの原材料と思われる良質の石英塊・水晶・紫水晶が少量ある。

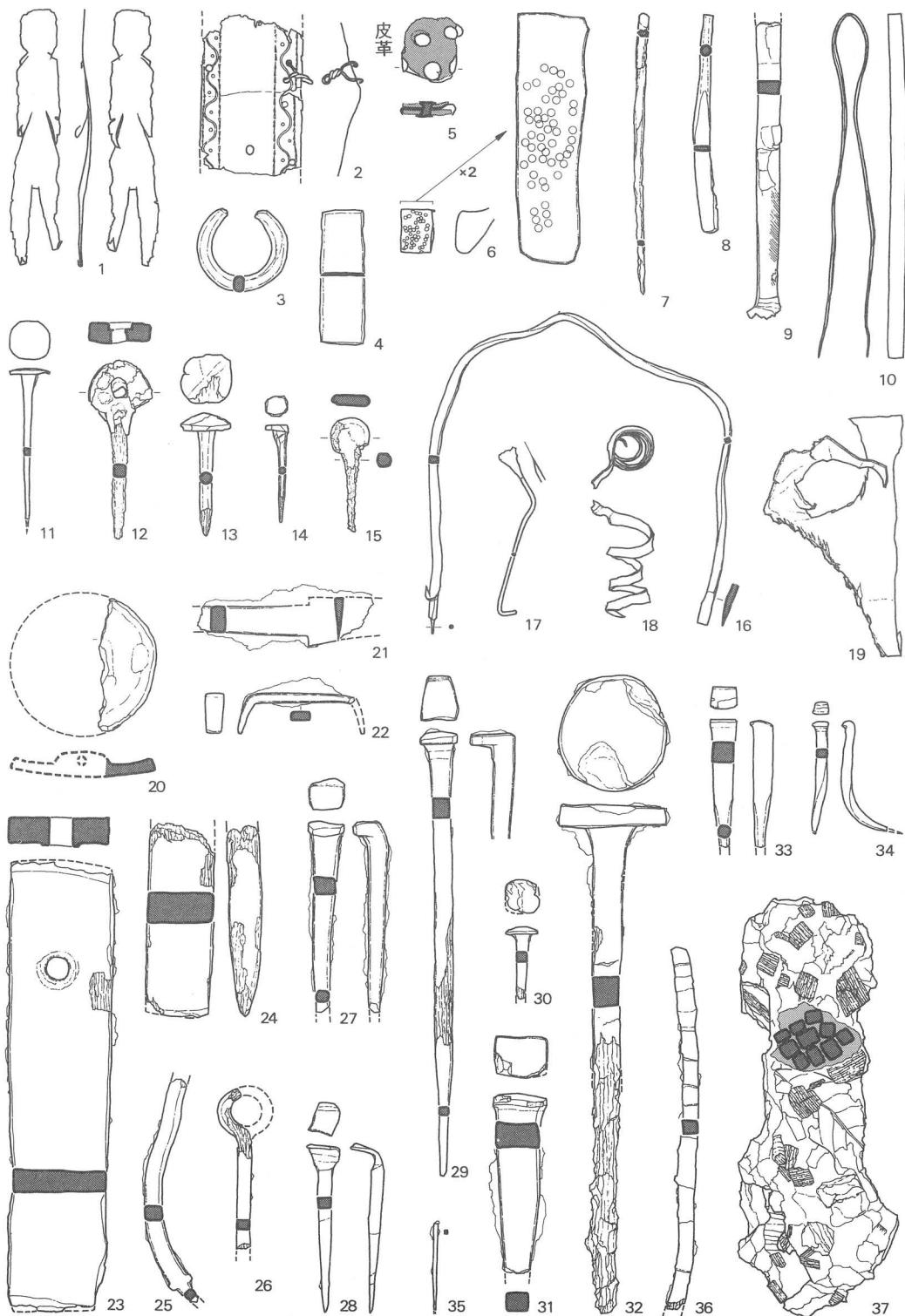
金属製品 銅と鉄の製品・未製品など約490点の他に銅切り屑、鉛、方鉛鉱、多量の鉱滓がある。

銅製品には人形(1)、円環(3)、留め金(5)、針(7)、ピンセット(10)、環釘(12)や方頭釘(11・13)、魚々子を打った板(6)、波状列点文を刻み歩搖を付けた金銅板(2)のほか、銅線(16)、18・19など製作工程を推測できる切り屑もある。魚々子は国産最古例とされる長谷寺の法華説相図銅板(686か698年)とほぼ同年代の遺品である。

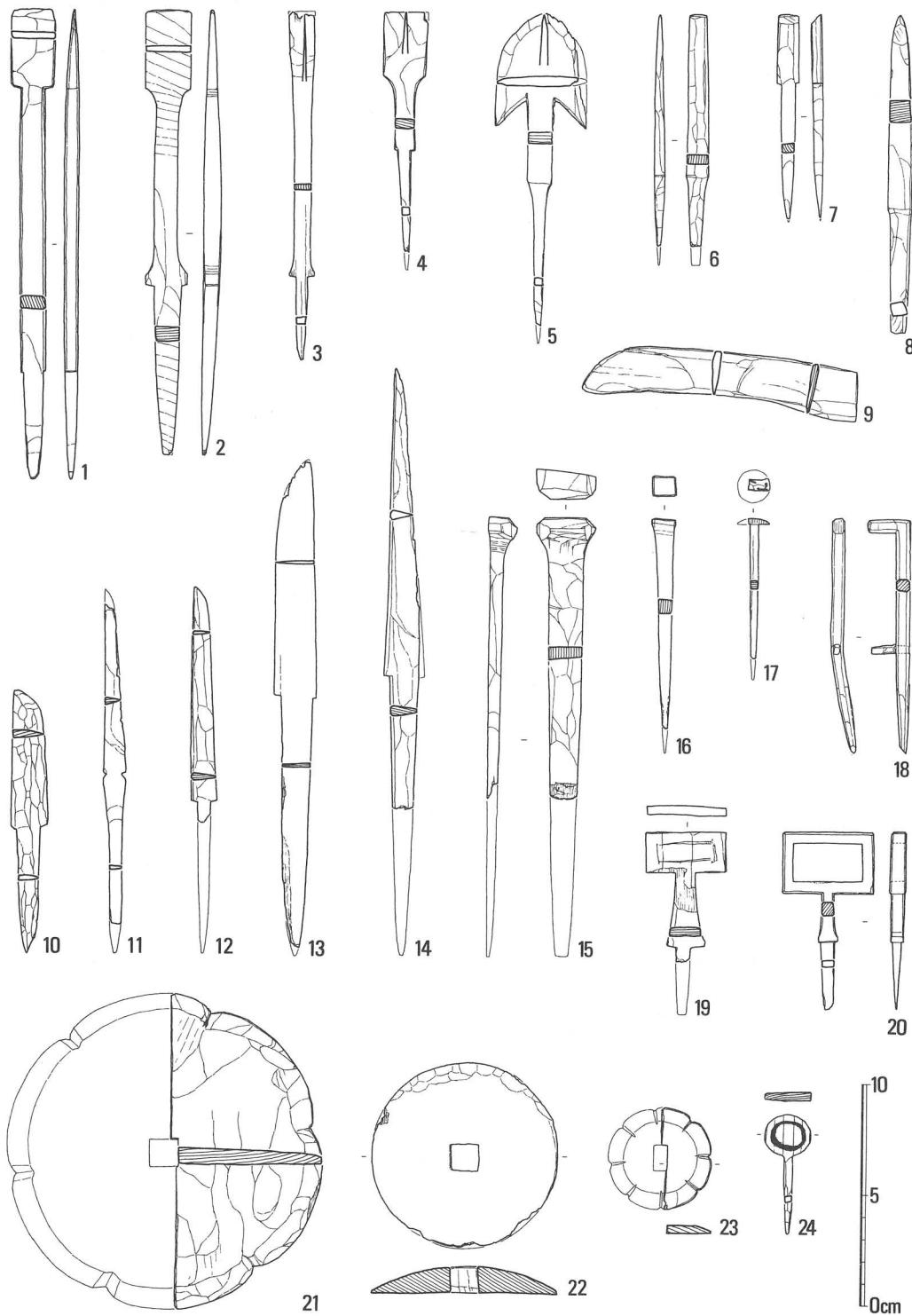
鉄製品には釘(折頭釘27～29・33・34、方頭釘30・31、円頭釘32)、鎌(22)、刀子(21)、鏃(25)、鑿、鑿(24)、はばき、素文小鏡(20)、針(35)などがあり、刀子や釘の未製品もある。このほかに、敲打した棒状のもの(36)や何本かの棒をあわせたもの(37)などが注目される。

なお、銅製品・銅塊・湯玉等は炉SX800と溝SD802やその付近から集中して出土した。鉄製品がSB781・785周辺に分布するのとは対照的であり、工房の作業区分が推測できよう。鉱滓は総重量450kgあり、楕円形のほか金属分の多い塊状のものや軽石状のものまで多様である。

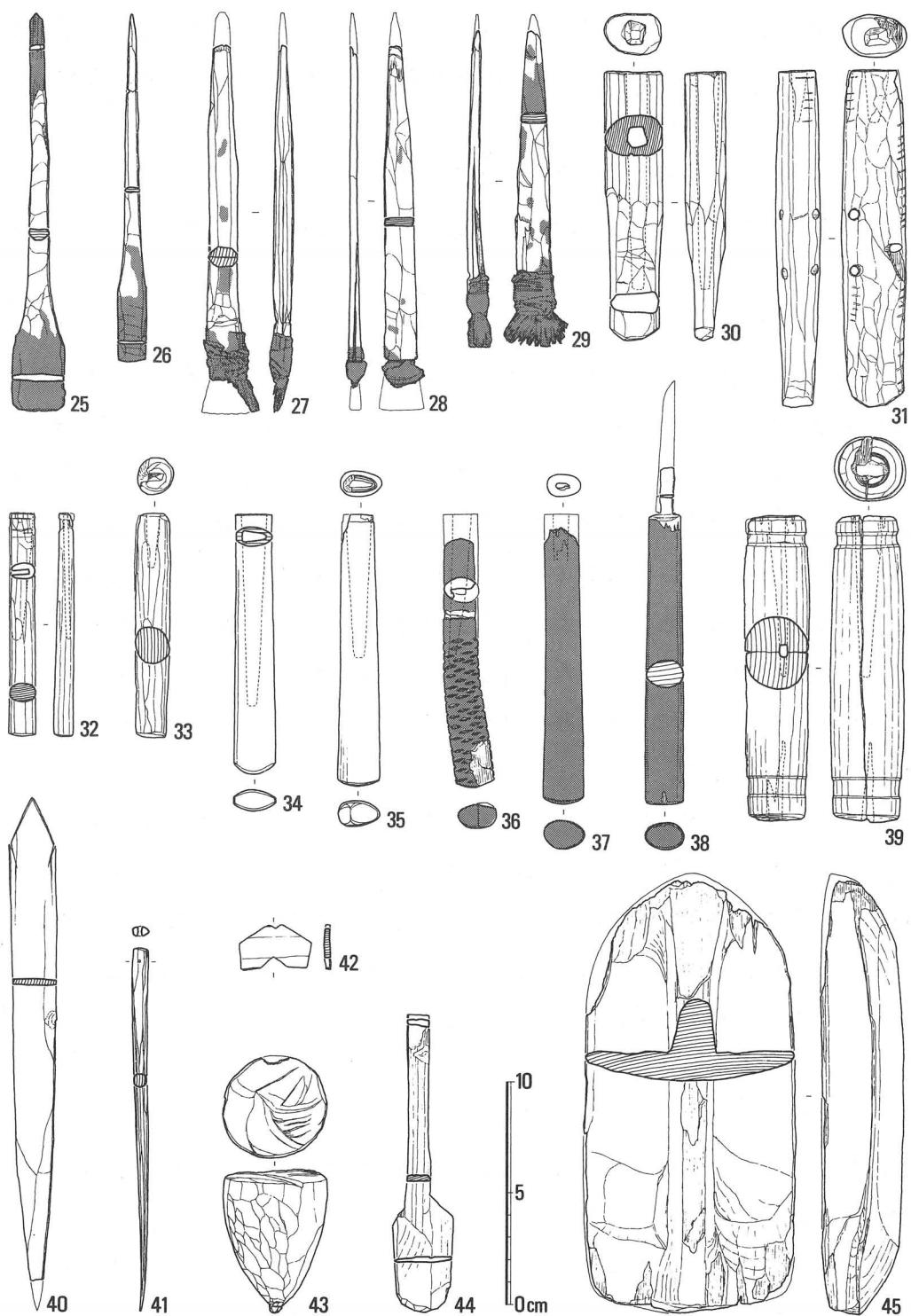
木器 木器は粗炭層から多量に出土した。金属器工房で用いた様(ためし:注文見本)、漆工房用の道具、木工具のほか、祭祀具・遊戯具・服飾具・容器等がある。様(1～24)には鏃(1～8)、鎌(9)、刀子(10～14)、釘(15～17)、門金具(19・20)、座金具(21～23)、壺金具(24)などがある。鏃のうち1～4は方頭式で、1は長い笠被、4は短い笠被、2・3は長い棘笠被を持つ。5は平造脇挟三角式で笠被を持つ。6は方頭両刃、7は方頭片刃で鏃には類例を見ない形態であり、鑿の可能性もある。刀子は棟関と刃関を造り出し刃部の形状には各種がある。15・16は方頭釘、17は円頭釘で、15は縦に半裁した形を呈し、17の頭部には墨書がある。門金具のうち20は完成品、19は方孔の輪郭のみ針書した未完成品である。壺金具24も円孔の輪郭を墨書した未完成品である。座金具には六花形21、八花形23、円形22がある。漆工具には笠25・26と刷毛27～29があ



金属製品 (1・3~19=銅製、2=金銅製、以上縮尺2:3)
20~37=鐵製、縮尺1:2)



粗炭層出土木製品① (1 : 3)



粗炭層出土木製品② (1 : 3) [綱部分は漆]

り、黒漆が付着する。木工具では、32～39が刀子柄で、36～38は外面に黒漆を塗り、36は漆塗布後に細かい刻み目を入れる。30・31は茎孔の形態から鑿柄であろう。45は鎌で、下面是摩滅し平滑になっている。

木簡 木簡は、藤原宮期の堆積層と考えられる炭層及び粗炭層から103点（うち削屑9点）が出土した。他に墨痕を確認できないが荷札状形態を有する木製品も3点ある。

木簡の形態的な特徴としては、第一に削屑が少ないこと、第二に完形品ないしは堆積中に折損したと見られるものが多いのに対して、藤原宮跡出土木簡に顕著に見られるような徹底的な割裁を受けたものは少ないと、などがある。

木簡の年代については、年紀を記したもののがまったく見られないが、荷札の中に國の下に置かれた行政単位を評と記すものがあるのに対して、郡と表記するものがないこと、さらに評の下の行政単位について里とするものと五十戸と記すものとがあること、などから、大宝令施行（701年）以前で、概ね五十戸制から里制への変更が行なわれた時点を含めた時期と考えることができる。

木簡に記された内容で、本遺跡の性格を考える上で重要な点として次の諸点を挙げることができる。

①釘・針・小刀など製品と考えられるものが記され、その雛型（様）も出土している。これに対してこれらの製品を作るための素材と考えられる鉄の記載も見られる。これらは木簡とともに出土した遺物に金属加工関係遺物や鉄製品があることと関連があると見られる。しかし漆関係遺物やガラス製造関係遺物などに関わる記載を有する木簡がない点は問題として残る。

②製品の供給先あるいは素材の提供者として「内工」「石川宮」「大伯皇子宮」「大伴」などが見える。

③評制下の地方行政機構を通じて当地にもたらされた素材や米等の荷札がある。

④付札には工人が生産した製品に付けたと思われるものがある。

その他、本遺跡出土の木簡は、①比較的まとまって出土した伊予国の湯評関係木簡の内包する諸問題、②未知の部名が多数新たに知られるに至った点、③大伯皇子宮・石川宮（石河宮）など飛鳥やその周辺地域に点在していたと思わ

れる宮の問題、など今後に多くの検討課題を提供した。

以下に主な木簡の釈文と法量（単位はmm）・型式を掲げる。

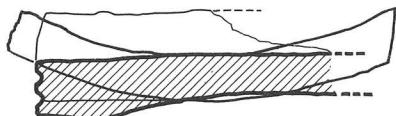
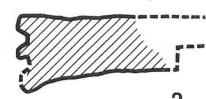
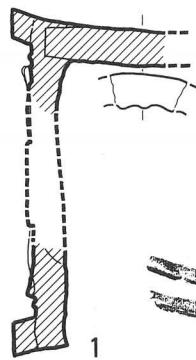
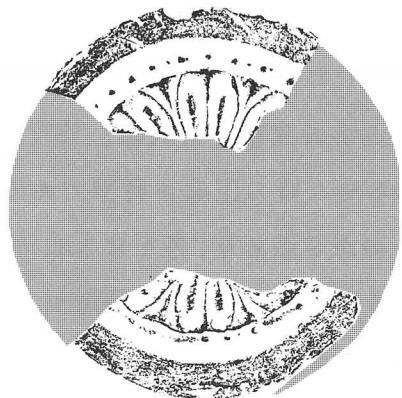
①	一月廿九日詔小刀一口 鍛 182×29×3011	⑨	十月十一日飛鳥町麻呂一□ 131×17×3 011
②	大伯皇子宮物 大伴□… 1咄并五十□ (145+85) ×18×4 011	⑩	十月五日立家安麻呂四 ・□ 五十三 五十一 (針書) (130) ×20×3 061(漆籠)
③	石川宮鐵	⑪	立家安麻呂 129×16×2 081
④	湯評伊波田人葛木マ鳥	⑫	三ノ尋布十 104×20×4 032
	183×19×2 011		
⑤	湯評大井五十口 ・凡人マ己夫	⑬	□鍛印百六十 〔五カ〕
	(122) ×13×3 011	⑭	□難鍛五十六□ (209) × (17) ×3 081
⑥	加毛評柞原里人 ・ (鬼鳴) □□マ□俵		
	133×21×2 032	⑮	内上鍛五十 (109) ×6 (軸の径) 061 (針様の軸) 111×24×3 031
⑦	吉備道中国加夜評 ・ 葦守里俵六□	⑯	・□□人皇□ (145) ×36 (笠の径) 9 (軸の径) 061 (針様) 146×21×2 081 ・五十一
⑧	五十戸□止伯 鵜人マ大尔		

瓦搏類 整理箱にして60箱ほどの瓦搏類が出土した。内訳は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦、面戸瓦、熨斗瓦、鷗尾、搏、土管である。

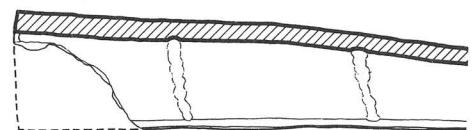
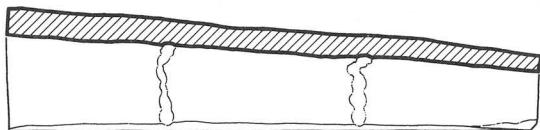
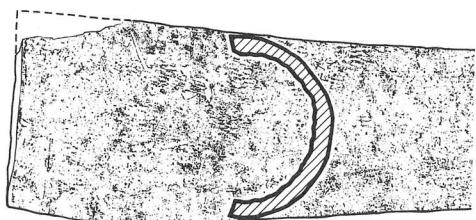
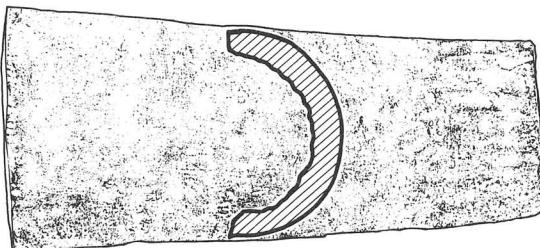
軒丸瓦は17点出土した。飛鳥時代10点、白鳳時代4点、奈良時代以降3点である。飛鳥・白鳳時代のものはすべて飛鳥寺と同范で、飛鳥時代は飛鳥寺I型式とIII型式が各4点、V型式とVII型式が各1点、白鳳時代はXVII型式が4点ある。XVII型式(1)は複弁八弁蓮華文で、外区内縁は小粒の珠文、外縁は素縁である。『飛鳥寺発掘調査報告』では年代を平安時代初めと推定した瓦であるが、後述する「竹状模骨痕」をもつ行基式丸瓦を丸瓦部とすること、三重弧文軒平瓦と組み合うこと、さらに炭層から出土したことなどから白鳳時代末頃にあてる。同范品は飛鳥寺のほか奥山久米寺にあり、桜井市高田寺にも同范品と思われる例がある（保井芳太郎『大和上代寺院志』1932、図版第22）。

軒平瓦は16点出土した。飛鳥時代の素文軒平瓦6点、白鳳時代の三重弧文（飛鳥寺I型式）7点と四重弧文（飛鳥寺II型式）2点、平安時代の均整唐草文（川原寺762あるいは763型式）1点である。素文軒平瓦は凸面に朱線が付着する平瓦だが、軒先に用いるために加工を施している。1点(7)は凸面中央に平行叩き目を残し、叩き目と対応する凹面には円形の当て具の痕跡が並ぶ。この叩きは瓦を偏平にするために分割後に行なったものである。そのほか、広端面を斜めに削り落とした例(8)もあり、軒先用として製作したことは明かである。朱線から判断して、茅負からの瓦の出は約12～12.5cm（約4寸）である。I型式の三重弧には、大型品のIA型式（3点）（2・3）と小型のIB型式（4点）(4)、がある。IA・IB型式は繩叩きを行うことや胎土焼成からみて、軒丸瓦の飛鳥寺XVII型式と組み合う。

丸瓦は行基式と玉縁式がある。行基式丸瓦は模骨の構造によって、一木の模骨によるもの、枠板を連結した模骨によるもの、いわゆる「竹状模骨痕」をもつものの3種がある。前2者は刻線叩き板（格子・斜格子・平行・変形など）、「竹状模骨痕」丸瓦は繩巻き叩き板を使用する。玉縁式丸瓦は、胴部だけに布圧痕があるもの、玉縁まで布圧痕が連続するものがある。前者は平行刻線の叩き板、後者は繩巻き叩き板を用いる。



4



5

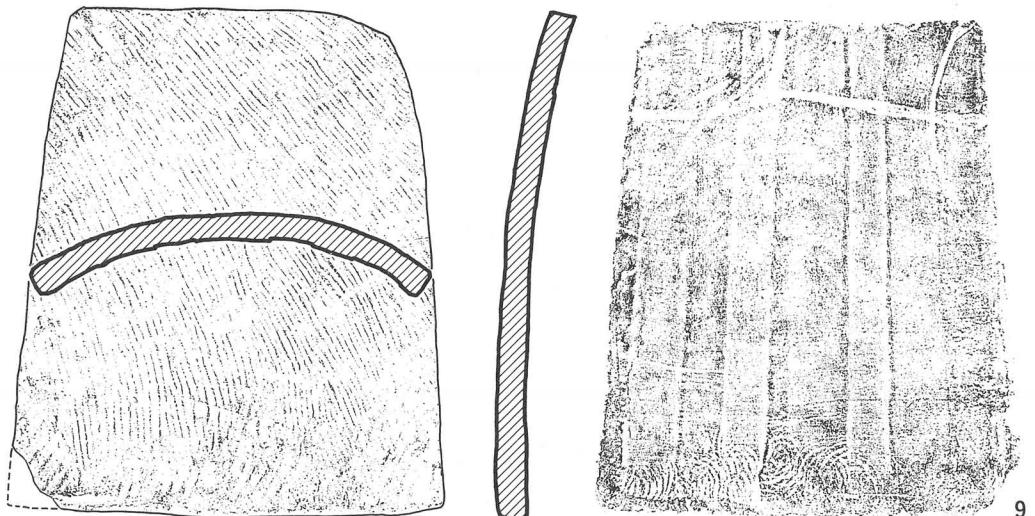
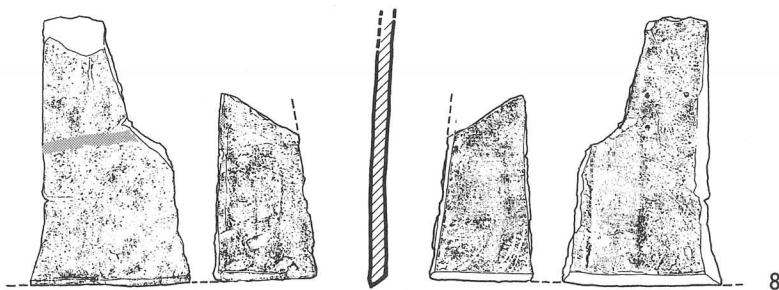
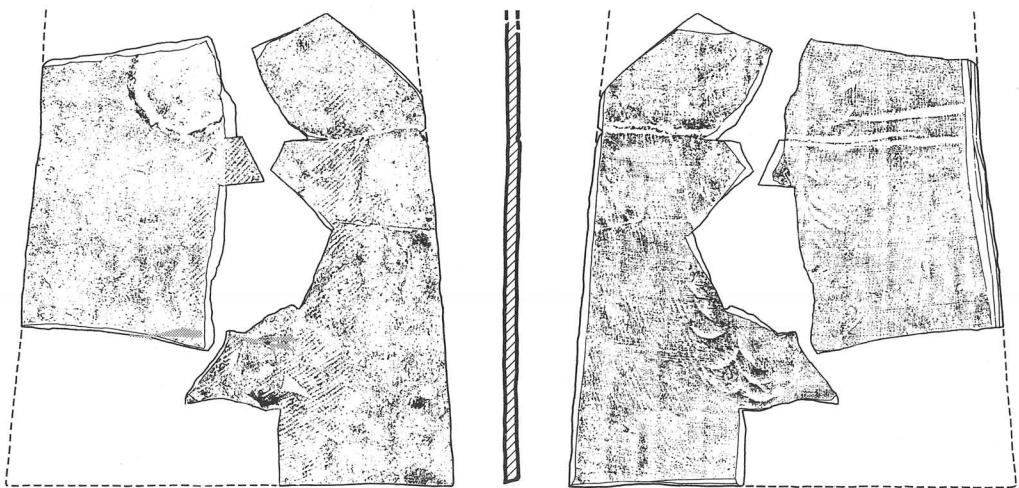
6

出土軒瓦（1～4、1：4）と丸瓦（5・6、1：6）

「竹状模骨痕」をもつ丸瓦（5・6）は、「竹のような材料を割って紐で編み重ねて簾状のものを作り」、これをまるめて模骨とした行基丸瓦である（小田富士雄「百濟系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究歴史時代篇』1977）。細い棒状の模骨枠板圧痕と、これを横に綴じ合わせた紐の圧痕が特徴である。破片を含めて103点出土した。全長の判明するものが3点あり、各々41.2cm、41.3cm、42.6cmである。模骨は棒状の枠板を約40本連ねたもので、九州の諸例に比較すると一本の枠板が太く本数は少ない。綴じ合わせの紐は上下端を含めて4本で、各紐の間隔は13cmから15cmである。粘土板巻き付けで、凸面はタテ繩叩きのちナデ調整する。従来、九州の豊前と筑前に限って分布するといわれていたが、これが大和にもあることが確認できた。大和では、坂田寺・奥山久米寺・姫寺にも出土例がある。

平瓦は平安時代と推測する少数の一枚作り平瓦を除くほとんどすべてが粘土板桶巻き作りである。叩き板は多様で、刻線叩き板には格子、斜格子、平行、その他の刻線がある。井戸SE822の掘形内に枠板のおさえとして使われていた平瓦(9)は、凸面広端に補足の叩き締めがあり、凹面広端にはそれと対応する同心円あて具痕が残る。あて具の径は7.9cm。また凹面狭端近くには桶に巻き付けた布の縫い合わせが端面に平行に走る。繩巻き叩き板は叩き目が叩き締めの円弧を描くものと側縁に平行するものがある。前者は灰緑色粘砂層に少量含まれるので飛鳥時代に遡る可能性がある。後者は主に炭層から出土し、「竹状模骨痕」をもつ丸瓦と組む。

その他、垂木先瓦と鷁尾の小片が1点づつ出土している。ともに飛鳥寺所用である。面戸瓦は8点あり、「竹状模骨痕」丸瓦を加工する。熨斗瓦3点はすべて繩叩きの平瓦を使った切り熨斗瓦である。隅切り瓦は1点出土。土管は行基式丸瓦を分割しないで転用したもの。1点ある。埠は飛鳥時代のL字形の埠と、7世紀末頃の長方形埠がある。前者には焼成後に文様を描いた例がある。後者は「竹状模骨痕」丸瓦や繩叩き平瓦に伴い。規格に3種ある。このほか瓦や埠を転用した砥石が4点ある。



素文軒平瓦（7・8）と平瓦（9）（1：6）〔綱部分は朱線〕

まとめ

調査の結果、飛鳥池遺跡は7世紀中頃から平安時代に至る遺跡であったが、特に7世紀代には木器・金属器・ガラスなどの生産遺跡であったことが判明した。7世紀中頃には漆や金属関係の生産は始まっていたと推定され、その後、若干の空白期を経て藤原宮期に周辺を整地して工房を営んでいた。この時期には、漆や金属器のほかに木器とガラスの生産も行われている。

藤原宮期の遺構は、調査区北部に3棟ほどの工房址があり、その内部あるいは周辺に鍛冶炉が多数あった。金属製品やその廃棄物の分布からすると、炉跡SX800やSB805の周辺と、SB781・785の周辺とで、銅製品の製作と鉄製品の製作が工房を違えて行われていた可能性がある。調査区中央部は炉跡や工房跡がなく、大型の土坑SK770を中心とする作業場か広場と思われる。その東南辺は柵SA735によって区切られ、その東方は廃棄物の捨て場になっていた。この廃棄物堆積層（炭・粗炭層）出土遺物を生産物ごとに示す。

○金属加工関係遺物＝坩堝・蓋、とりべ、鞴羽口、鋳型、砥石、木製雛形（様）、銅製品、鉄製品、鉄・銅塊、鉱滓、木製・木製漆塗り柄。

○漆関係遺物＝漆容器、漉し布、漆籠、漆刷毛、砥石。

○ガラス関係遺物＝ガラス坩堝・蓋、ガラス小玉鋳型、石英、方鉛鉱、鞴羽口。

これらの遺物で注目されるのは、木製の様を使って金属製品の注文生産を行う方式が既に藤原宮期に始まっていたと判明したことである。従来知られていた平城宮の例より古い。また、銅製人形・仏像鋳型はこれまで最古例である。鏡の鋳型は弥生時代（九州：小型仿製鏡石型）と、平安時代後期の例（伯耆国分寺：八稜鏡真土型）があるが、海獸葡萄鏡鋳型の出土は例がない。

木簡からは、製品の供給先や原料の提供元が複数あること、原料などには評制下で税として収集したものだけでなく宮の物品をも用いていること、製品に工人名を付して出荷したこと、などがわかり、未知の宮名や部名も知られた。

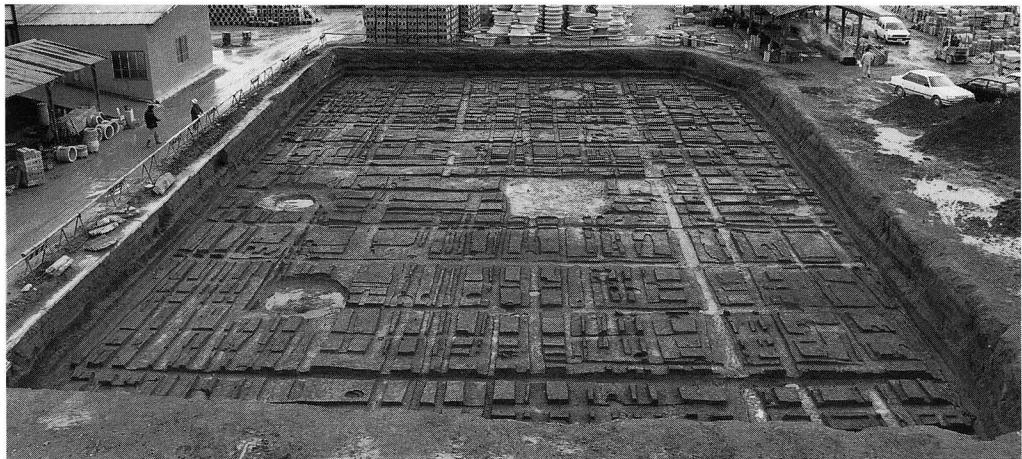
遺跡の性格や全体像を示すには調査研究が十分でないが、飛鳥の宮都のごく近傍で金属製品などの生産遺跡を発見できたことは本調査の最大の成果であり、飛鳥地域の土地利用や当時の金属器生産の実態解明に重要な資料を提供した。



藤原宮西方官衛（第68次調査東区、北半部）（南から）



藤原宮西面大垣（第66—11次調査）（北から）



藤原京右京一条一坊南西坪（第65次調査、西区）（北から）



藤原京右京一条二坊（第64次調査第9調査区）（南から）



藤原京左京十一条三坊
(雷丘北方遺跡、第66—1次)
(北から)



藤原京左京十一条三坊
(雷丘北方遺跡、第66—13次)
(北から)



石神遺跡（第10次
調査）（東から）



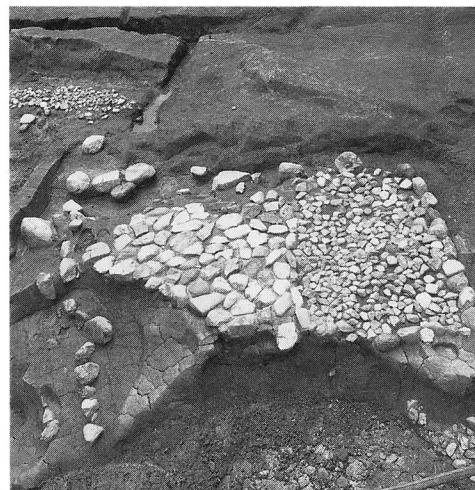
坂田寺迴廊（第7次
調査）（東から）



調査区全景（北西から）



井戸SE 822周辺（北東から）

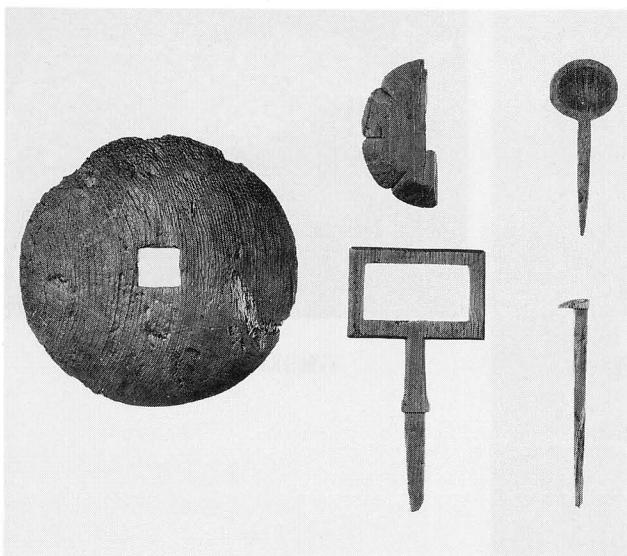


石敷SX 815（西から）

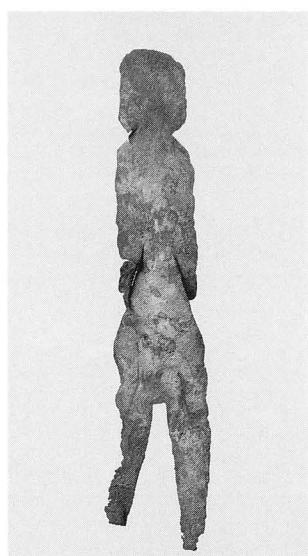
飛鳥池遺跡（飛鳥寺 1991—1次調査）



出土木簡

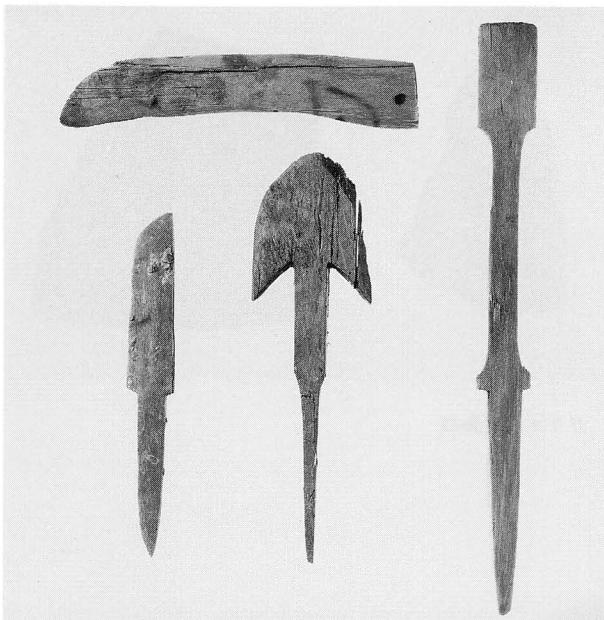


木製品（樣）

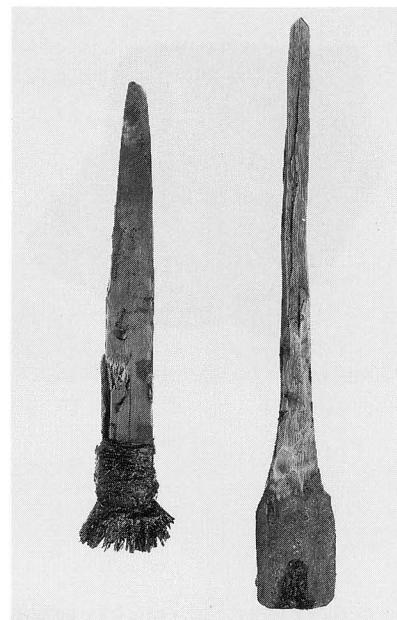


銅製人形

飛鳥池遺跡出土遺物



木製品（様）



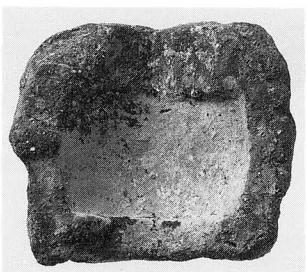
漆工具（籠・刷毛）



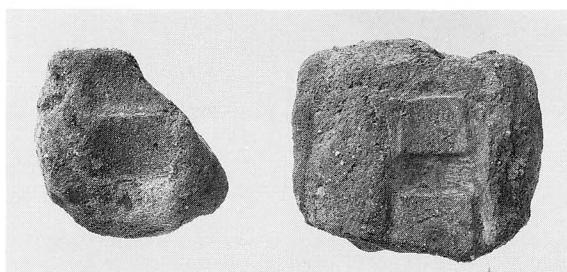
海獸葡萄鏡鑄型（×2）



仏像鑄型

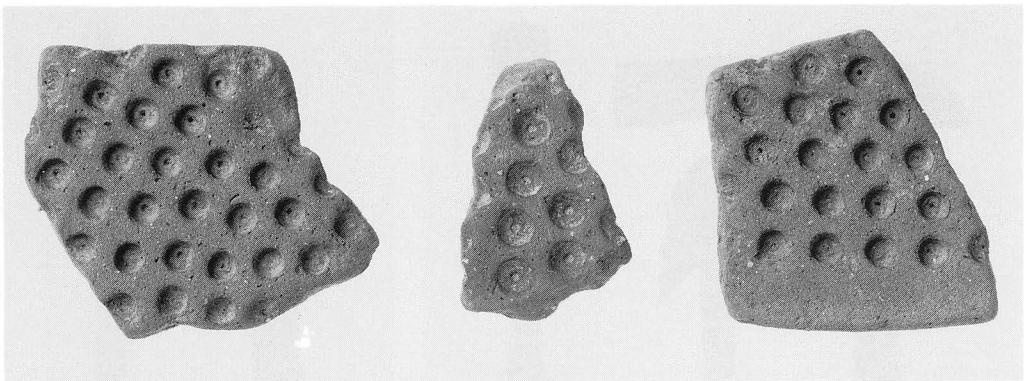


鑄型

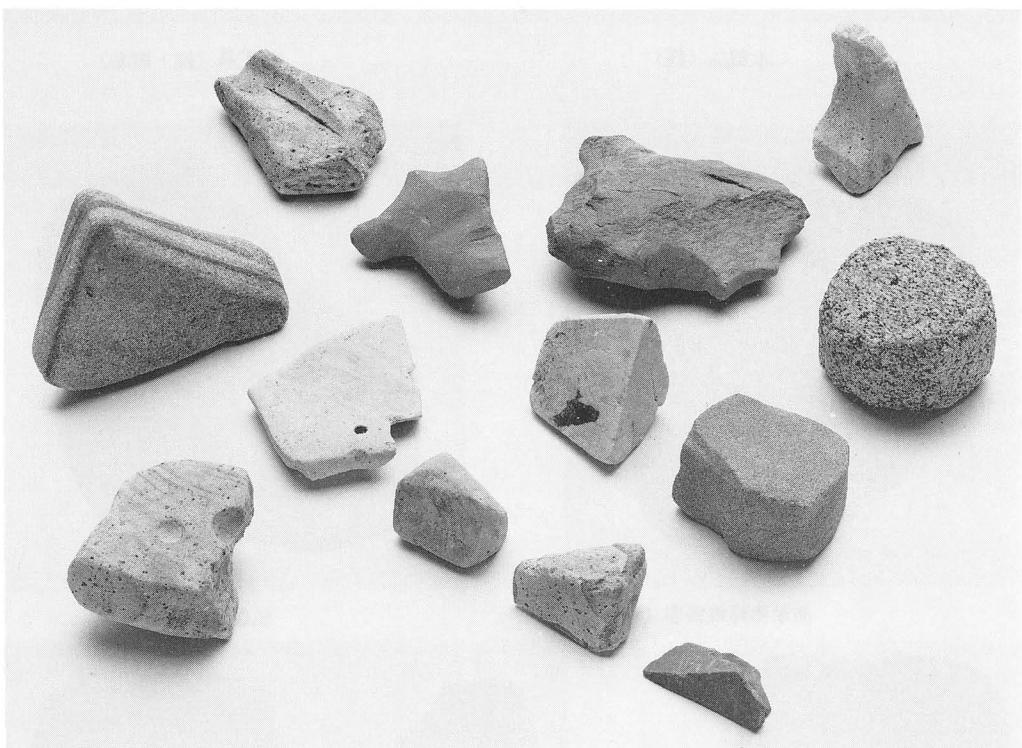


鑄型

飛鳥池遺跡出土遺物

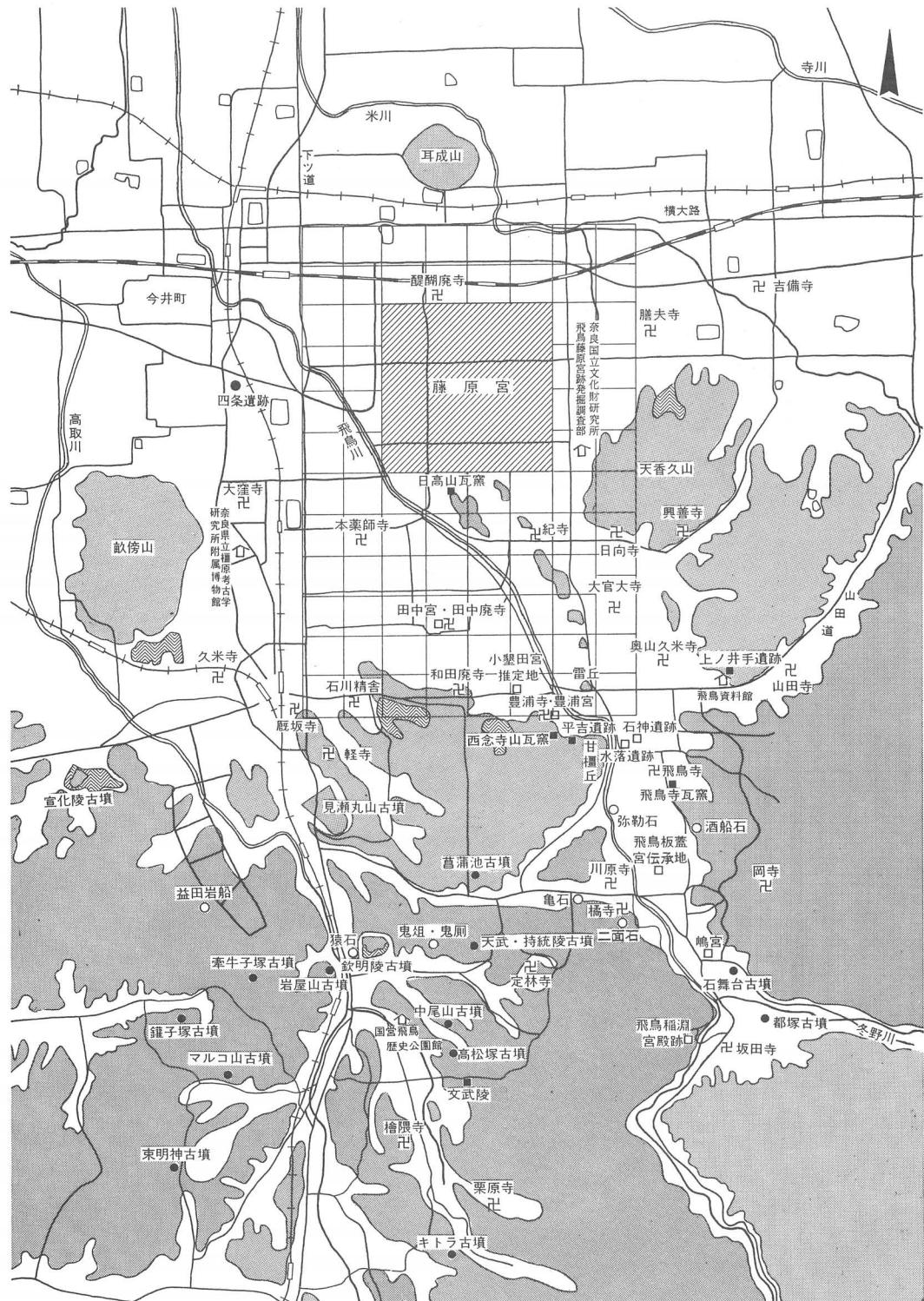


ガラス小玉鋳型



砥 石

飛鳥池遺跡出土遺物





飛鳥・藤原宮発掘調査概報 22

平成四年五月発行

編集：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
発行

〒634 檜原市木之本町宮ノ脇

Tel 07442-(4)-1122

FAX 07442-(4)-1742